

はじめに

風俗習慣の改進が戦後は急速に進み、年中行事も実際に行なわれるることは極めて少なくなった。わずかに老人の記憶の中に残ることが採集できる状態のものもかなりあった。

当地は東毛地方に位置を占めるため、千代田村などと似かよつた行事もあるが、川が少なくて江戸時代に岡上用水によって開発された大原から西部の畑作地帯は、東部の山寄りの水田のある地帯と、伝承もかなり差違が感じられる。記述に当つては、東部から西部へ及ぶように配列を考慮しておいた。

戦場でみられた年中行事の特色を示す例をいくつか取り上げてみよう。

正月の年始を受ける日をセチと呼んで、本家分家で寄る日が決まつてゐる所があるのは、本来の節会の語義が生きているものといえよう。

年神棚をナラの木を削つて編んだお欄板で作つて吊る家が多くたようだ、年の市でも三枚か五枚の板を売つていたという（大原）。また、大久保ではナラの板を一枚編んで年神棚を作る家もあり、その棚にオシラキや鉢に供え物を盛つて供えた。十六日には屋根の上に棚ごとほかし上げて「正月送り」をしたというが、吉井町などの「ホウソウ送り」にすのこを屋根に上げるやり方とも類似している。神は天上するという信仰の表現であろう。

小正月にオミタマ様を祭る風習も頗著で、「オミタマ様は年神様と夫婦

だ」といって、必ず一対の棚を部屋の天井から向かい合わせて吊るしたという（大久保）。オミタマ様は家の先祖の靈と見られるので、小正月に祭る年神の性格が先祖神に近いものだったことを暗示していよう。なお、箱に山盛りにして、あるいはおにぎりにして、一本のオツカドやウツギの箸を立てて供えるのを「ミタマノ飯」と呼んでいる。不幸時の靈前にぎり飯や枕だんごに、箸を立てて供える風習と似ており、祖靈に対する供え物の一つの方式だったかと思われる。なお、小正月の語の使わ方は少なかつた。

小正月の「成り木責め」は盛んだつたらしく、柿の木にマユ玉をゆで湯をかけて「成ルカ成ラヌカ、成ラナキヤブツタ切ルゾ」などと唱えて、なたで傷つけたりした。その時に正月の幣束の紙をまとめて柿の木に吊す呪いがあり、千代田村でも見られた。

マユ玉のゆで湯を家の回りにまいて、蛇やムカデ除け、魔除けの呪いにすることはほかでも聞くが、正月用のモチ米のとき水を、風呂に入れ元旦の朝湯をたてると、蛇やムカデ除けになるというのは、同じよう白濁した水に魔除けの靈力を感じたものであろうか。

マユ玉飾りの時、柿餅といって若餅を供え餅の小形にして、柿の枝に十一個さして部屋に吊るしたり、木棉の花の形にこしらえて木の枝にさしたりしたのは、一帯が柿や木棉の栽培に力を入れていたことの名残りであろう。マユ玉はマユ形ばかりでなく、原形はだんごや餅を木の枝にさして実のりを表現したものだったことが推測される。

道祖神のドンドン焼きは早くから消滅したらしいが、秋祭りに神社で

火祭りをしていた。

二十日正月のエビス講に、カケエ（懸魚）という生魚を供えたり、油揚しを俵の形に干ビヨウで巻いて供え、米俵がたくさん取れるように折つたりする家もある。座敷に熊手やぼうきを飾つて、財産をはきこむ

よう期待する家もあるとか。なお、金をかせいでくれるエビス講はかたわら者だといい、かたわらの家には金ができるといわれるのも興味深い。

一月のコトハ八日には、赤城山から鬼が来るといつて、メケエに格をさし竿に付けて庭先に立てて「水も流さぬコトハ八日」といって、静かにして夜なべ仕事も休んだり、夜間にはき物を外に脱ぎ捨てて置くと鬼が来て判を押していくからと、取りこんだりしてつっしんだ。ここは赤城山が北方にきれいに浮き出して見える土地で、赤城山は鬼神の来来る靈山として信仰されたものであろう。

二月十二日に「天祭り」といって、組の者が会食をしてその年の役員を決める会合をするのは、桐生地区にもあるが、西毛地方の甘樂・富岡などでケイヤクと呼んでいる行事と同様のものであろう。

三月のヒナ祭りに、古くなつたヒナ人形を川へ流したり、子供が丈夫に育つようになに金魚を川へ流したりするというのは、ヒナ祭りが人形による災厄をたけて流す危険けの行事だったことを示すものと思われる。

一月六日および三月六日に山の神の祭りをするのは（湯ノ入）、県内の北部で十二日、南部で十七日に山の神を祭る所が多いのと、日が違うのに注目したい。

夏の初成りのキユウリは天王様に供えないうちに食べると、カツバに川へ引きずりこまれるといったたり、初ナスはクワの枝に刺して煙に立ててお天道様に供えるというのは、初物をます神に供える感謝の念を表現したものであろう。

七夕にはメズラ煙に入つてはいけないといわれる。理由は、七夕様が煙で恋をしているからとか、疫病神が煙で子を生んでいるとかいう。メズラは盆櫛の縄にかけて供えるのが初物なので、それ以前の採取を禁忌

したものであろうか。また、七夕は荒れ日だとか、雨が三粒でも降ればよいとかいうのは、都會風の星祭りと違つて、農村で雨を祈つたり、盆の一周間に前回の降雨を迎えるために、天の異変を期待したりする古風が感じられる。

盆の日取りが七月二十三日、八月十三日、九月一日と幾通りにも変わったのは、烟を中心とした農作物の都合からであった。盆棚の上にカツモ（マコモ）で方一尺くらいの盆ざを編んで敷くのは、東毛地方のマコモの茂る所に見られるが、正月棚をララの木で編むのと新盆の挿拂に「結構なお盆でござります」（山ノ神）、「お静かなお盆様でおめでとうございます」（三島）などというのは、盆を正月と同様の祝い日として考えたからであろう。最近の挿拂は、「新盆で誠におさびしゅうございます」というように変わってきた。

八月に行事が少ないのは、地域がスイカの大産地で農繁期のためにあろう。

八朔の節供に新嫁がショウガを持って里帰りする風習は県下に広く見られる。そのタナモノガシとして、マスクや糞をもつて帰るのは「ますます新昌」とか「早く身ごもるよう」とか縁起を付けていわれる。

神無月に神々が出雲国へお立ちする時、オカマ様は子供が多いので留守をしているから、オカマノダンゴをたくさん供えるという行事は、東毛地方に盛んらしい。

オクチの秋祭りに神社にたき木を集めて、一晩中たき火をしてオモリする行事があつたのも、東毛地方に盛んな祭り様式らしい。秋葉神社の火祭りなどと結び付けて、火伏せを祈るというが、本米はオコモリのためのオタキアゲだったものであろう。神社で夜ふかしをした若衆や子供たちは、翌朝の参詣人の赤飯をもらって食べるのが楽しみだったといふ。

旧十月十日の十日夜の餅を前夜の九日につく所が東部に見られ、西部

はふつうと同じ十日についている。九日に餅をつく理由は、昔八幡太郎が奥羽征伐の時、十月九日に当地を通ったので餅をついて祝つたからだという。十日夜の餅は縁組み餅で、早くつくほど子供の縁組みが早いといつて、縁組みに関連させているのは東毛地方に著しい。十日夜の餅を

ワラのツトコの中に入れて供えると、神様が出雲国へ招いて行くとか

(台)、カエルがせおつて出雲へ持つて行くとかいう(大久保)。今年の収穫祝いの餅を受けた神が出雲へ行くという信仰と、出雲に集まつた神々が縁組みをするという伝承とが結びついたもので、ほほえましい。

十日夜の餅をイノコ餅といつて、月数の十二個作つて一升ますに入れ、倉の米俵の上に供えるというのは(滝ノ入)、珍しい風習である。とくに

「イノコ餅」と呼ぶ例は県内では少ないので注目したい。

なお、十日夜のころ、新米と小豆を持って、三夜沢の赤城神社へ餅食いに出かけたというが、田の神を山へ送り出す信仰との関連も考えられよう。

屋敷櫛荷の祭り日(旧十一月十五日)には、ワラのオカリ屋をふき替るので、石宮から石宮への過渡期とも見られるし、村の神社を定置する所

上の屋のやり方にも似通つてゐる。

暮の餅つきは白の下へワラを十文字に敷くが、ワラの根本を北と東に向けるといふ(滝ノ入)のもおもしろい。このよくなごとに一定のきまりがあつたものかと驚くとともに、隠れた意味も考えてみたい。

大晦日には、サンイイシメ繩を張り、幣束を立て「風の神送り」と書いた旗を立てたものを持って家々を回る。家の者が紙にオサゴ(米)を包んで身体をなせ、厄を移してそのサンイイの上にせてやるのを、村境の川に流すという。年越しに当つて厄払いをしたものがあつ。(間口正己)

一月

元日

新暦になつたのは大正の初期、役場からの触れでやつたが、中にはやらない所も多かつた。西野などは遅くまで旧暦でしていた。農作業には旧暦の方が便利である。(台)

旧暦から新暦へのきりかえは大正のはじめごろであつた。明治のおわりごろには、元旦は新でやり、お正月の行事は旧でやつていた。そんな

かたちで三年ぐらゐはやつていていたようである。(大久保)

昭和初期に新暦に切り替えた。畠仕事の都合で、年内に干し大根を作り仕事を片づけてから正月をするのがよかつた。旧正月をしたのを覚えている。

今も旧暦にする行事は、初午・十五夜・十三夜・十日夜・霜月祭り。

年神 卯の日の卯の刻に来る。(台)

アキノカタから年神様が来る。オタナはアキノカタに向けて飾る。今

年はミウマノカタがアキノカタである。(滝ノ入)

年神様のことは、としくじん(歳徳神)という。女の神様といふ。

年神様は大晦日から元旦にかけておいでになる。おたちになるのはウ

日の日といふ。年神様が短いときは家内安全といい、長くいると、

家族の者が病気にかかりやすい。あるいは火災にかかりやすいといふ。

(大久保)

年男 年男が一番先に起きて、若水を汲んで、神様にお茶をあげて、風呂をたてる。それから、みんなを起す。家々のしきたりがあり、誰煮のうちもあり、餅がつけねえで、赤飯・ばた餅・うどんの家もあり、餅をいろいろにくべておいて、青松葉で叩いて食う縁起のうちもある。七五

三のしめを、ひと間にはり、どこへもお供えを供える。小川家はうどん、夜は赤飯。年始には、手拭と、しおがまを持って行った。家族全部の箸を作る。柳のハラミシで、両はしが細く、直中がふくらんでいる。カイドウのお松にもあげる。(山ノ神)

年男が三が日は朝一番早く起きて若水を汲み、雑煮を作り年神に供える。口をゆすいでから供え物をした。神に供える分だけ年男が作り、人間の分は女衆が作る家もある。(大原)

三元日の朝夕食事は年男の役で、年男になつたら、朝湯に入り、灯明をあげ、口をゆすいで食事をお供えした。食事の世話は神様の分だけで、家族の分は女衆の仕事であった。(大原七区) 年男には世帯主か相援人(一人前になつてゐる場合)がなる。年男の仕事はしめかざりからはじめる。

元旦の朝早くおきて初水(若水)をくむ。初水でまずお茶をいれて神様に供えた。そのあとは初水を料理などにつかつた。ここでは料理は女衆がつくる。

元旦には朝風呂を年男がたてる。年男が一番はじめに風呂にはいった。あかるくならないうちに風呂をたててはいる。お茶の準備などをしておいて風呂にはいり、風呂にはいつてからお茶を神様にそなえた。

三が日のあいだは年男が神様へのそなえの仕事をする。そなえ物をするところは家によつてちがうが、大体外まわり十五ヵ所ぐらゐ。屋敷のなかの建物や神様、井戸、神様など、お松のたてであるところへ、しゃもじにこはんをのせて、はしですこしずつはさんで、お松の芯のところにそなえた。(大久保)

若水、親父があととりが年男で、暮のうちに新しい手桶を買ってシメ縄をはつたもので汲んできてやかんに入れ、大豆のからで湯を沸かす。

一年中マメで働けるように、お茶をたてて、年神・大神宮・先祖様にあげる。

若水を汲んで朝湯も沸かして入る。(台)

若水で顔を洗った水は台所に捨てろといわれた。(寺下)

若水は年男(主人か跡とり)が、井戸から手桶で汲む。三ヵ日やる。汲む時に喝え言を昔はしていたらしい。鉢瓶・釜などのその日に使つものに三杓すつ入れる。若水を汲んでからでなくては、けがれるから女シは井戸を使えなかつた。(湯ノ入)

元旦に若水を汲み、守り本尊の方を向いて拝む。(三島)

幕市で新しい手桶を貰い、元旦に初水を汲んで供える。(大原)

朝湯 三ヵ日に朝湯をたてて、近所の人を呼んで入れる。

セ子餅の米のとき水を風呂に入ると、蛇、ムカデにかまれてもとがめない(うまない)というので、今も元旦の朝風呂だけは、そうにする家がある。

水が冷えついでなかなかわかない。入る順番は特別はない。近所からもらひ湯に来ることもなかつた。(大原)

初参り 元旦の朝、鎮守神明様へお参りした。また、三元日に恵方参りに出かけた。(大原)

元旦の朝(四つ前)神社へ朝参りをした。はじめに年神様におまいりをしたら、神社へお参りを行つた。むらの人たちはめいめいお参りに行つた。朝参りにはうちのものが個人でも行つた。朝暗いうちに出かけて、暗いうちに帰つて来た。(大久保)

年始 親戚を全部回ることになつて、持つて行くものは、塩がまと手拭であつた。毎戸必ず食事を取らなければならず、非常に苦しかつた。年始に行かないとあとで叱かられた。(寺下)

年始に昔は二日から十五日位まで各家を村中まわつた。植木イッケは大本家が最初。それでは大変なので元旦に湯ノ権現に寄るようになつた。

最初にアキノカタの方角にあつた家に年始に行つた。他人の家でもかまわない。恵方まいりといふ。(湯ノ入)

塩がまの上に手ぬぐいをのせて年始に回つた。塩がまは人の手を渡つた。

て来たものを持って行つた。特に想意な家だけ年始をして、村回りはしなかつた。

親戚への年始は二十日ごろまでに行つた。親戚からは四月の桜の花見を兼ねて、大原へ年始に来た。(大原)
村の年始は、特に各戸を回ることはなく、区の戸主会が世帯主を集めてしまつた。(大原七区)

瀬戸氏の年始日は本家六日、分家Aは五日、分家Bは十一日である。こうした年始うけの日をセチといい、家によつてきまつていた。(大久保)寺の年始 村人が寺へいくのは正月中に行けばよかつた。そのときお布施に錢を包んでいたり、そばを打つて重箱に入れて持つて行く人もあつた。寺から各家へ年始くるのは正月四日で、「四日のお拂きがしは寺の年始が来る前にしろ」などといわれた。(大原七区)

正月棚 三十一日にオタナに年神様をまつる。アキノカタとは言うけれど家の作りでそつもいかず、大体東を向ける。(台)

暮の二十七日か二十八日に棚を作り、両脇に幣束をたてて年神様、オミタマ様をまつる。植木イツケはナラの木、他の家では松の木を使って新しく作る。アキノカタを見て棚を作る。アキノカタはコヨミを見て決める。神棚にもシメ繩で飾る。トリイジメという。エビス様は別にまつり、ホシノタマというタマジメを飾る。金毘羅様などの神々の掛軸を床の間に飾る。(湯ノ入)

神棚とは別に、歳神様の棚を作る。(三島)

正月棚はナラの木をさく割つて、三枚か五枚を一本のたての棒に編み付けて、お棚板を作る。お棚板は売りに来たり、幕市に出たりしたのを買つた。正月棚として恵方に向けて天井から吊つた。家によつては、わくを組み立て板で作り付けにして、天井から吊る家もある。わら束に年徳神の幣束を立てて載せて置く。(大原)
ナラの木を薄く削つたものでオタナ板をつくつた。その上に幣束を立てた。この棚は正月十六日の日に屋根の上にほかしあげ、正月様の送り

とした。(大原七区)

正月棚は作り付けの棚があつた。(六千石)

ナラの木を伐つて來て長さ三十六センチほどに割つて、十二本を繩であんで年神棚をつくる。オミタリ様の方は板でできていたのでその棚をつるした。(大久保)

「オミタリ(オミタマ)様は年神様と夫婦だ」とい、オミタリ様の棚は年神様の棚と向かい合わせて、部屋の上に吊つた。

年神棚の上には、干し柿とコンブを供えて置く。正月中の食物は、家によつてオ神ノ鉢か、オシリキに盛つて供える。

それぞれの家には棚板があつて、それを暮の二十八日か三十日(二十九日は苦を重ねるといつてやがつた。この日はもちもつかない)に、明の方にむけてつるした。

正月棚にそなえるものはほつぎのもの。
かがみもち・しめかざり・朝晩の食事(一番先に供える)・くじがき、



(左) 年神棚にのせたコンブ・干しカキ・ハラミバシ
(右) お神の鉢は2枚1組を年の市で新調する(大久保)
(開口正巳 撮影)



正月飾り(中原) (藤生昌弘 撮影)

田作・コンブ（これはおしめにつける）など。

正月棚にそなえるものは、一家によつて多少のちがいがある。たとえば、瀬戸家ではしめかざりに、ミカンをつけないが、ほかの家ではつけれる。清水一家では食事はオシラキにそなえるが、永田家では七つ鉢（七個で一組に重なる）にそなえる。瀬戸一家では、「つづけ」といつて、二つそなえる場所ができる。そこへあげる。瀬戸一家では大晦日と

一月十四日に、重箱に山もりの白めしをあげ、それに十二本のはし（オカドでつくったもの）をたてた。これをミタマシといった。これはあとでさげて雑炊にして食べた（なお、ミタマシは一月のとしとりのときにもあげた）。

永田家では正月用のオ神ノ鉢（二膳一組の木製の曲げ物で色を塗らない白鉢）を、毎年一組すつ伊勢崎の年の市（十二月二十六日）で買いました。大（径十五センチ、高さ七・五センチ）を年神様、小（径十四センチ、高さ六・五センチ）をオミタマ様の供え物に用いる。昭和四十年以降は買えなくなつた。（大久保）

供え餅 供え餅は一日分ほとんど取つて、十二、三個も作つて供える。

オシラキに、雄煮餅の餅・里芋・ニンジン等を混ぜてのせ、年神に供える。

（大原）

柳の木を薄く割つて四角にし、その一面を菊の花弁のように溝をつけたもので、正月の食事はこのオシラキに盛つてお供えした。正月十六日の神送りには、このオシラキを屋根の上にあけた。このときはお棚もあげた。（大原七区）

オシラキ 神に供える器（11.7×10.7cm）（大原）（開口正己撮影）



シメ飾り（大久保）
（開口正己撮影）

た香器をオシラキといい、供え物をのせて進ぜるのに用いる。幕市で一枚ずつ買つて置く。毛里田村や強戸村から売りに来た。この人たちが、元旦に初絵も充ちりに来た。（大原）

トウスミ 昔は燈籠にトウスミ（灯芯）で明かりをつけて年神に供えた。そのため、年寄りは、今のが願寺ろうそくでは、神様のような気がしないという。（大原）

カド松 幕の二十七日から二十八日に自分の持山か、ない人は本家の山からとつてくる。植木イッケでは松を使わず、ナラの木を使う。門口、笛荷、井戸神、藏、物置、便所（ショウビシン）に供えるという。（大原）

笛荷、井戸神、藏、物置、便所（ショウビシン）に供える。（大原）

山持ちでない人が多いので、正月の松迎えは、自由に恵方の山に入つて三階松を取つてきて飾つた。

カド松二本に竹を添えて立てる。ほかに、井戸・便所・ウジ神（星数

笛荷）・年神などに供えた。（大原）

正月飾りの松は、以前は近所の山から取つてきた。山持ちの番頭に話を聞いて松を取らせてもらつて売りにも出したので、正月前の小遣錢にもなつた。

松を飾るところは、門松・井戸・便所・氏神様（星敷神）などであつた。（大原七区）

シメ繩 年神のいる部屋には、シメ繩に七五三の飾りを付けて、全部

張り回すこともあった。(大原)

縁起 うどん縁起は正月の三ガ日、毎朝うどんを作つて年神様に供えることで、他にそば縁起、そくに縁起とある。町田家は、ばたもち縁起である。それは、正月が来るのでモチ米を用意したが主人が突然亡くなり、そのモチ米がばたもちになつたが、その年から幸運になり大尽(金持ち)になつたのでそれから縁起としてつづくようになった。

藤生姓の一族は、正月十五日まで餅をつかないで、それまでは近所、隣りからもらつて食べていて、その時は汁も作らないので運んでいるところが五十年前までは見られた。(寺下)

そば縁起は三ガ日難煮を食べないで、そばを供えて食べる。(三島)
三ガ日は朝ソバ、夜御飯で餅を食べない。餅を食べるテキモノがで

きるという。(大原)

正月の縁起はイッケでは同じである。イッケとはもとが同じ家のことである。

永田家では、正月二十日に棚を下げるまでは、うどんを作つて食べてはいけない。(ただし、よそから貰つて食べてもよい。)夕食にご飯をたいて食べ、朝は冷飯に湯をかけて食べた。また、イモ縁起で、里芋を煮て丸ごと二個ずつ神の鉢に入れて、年神棚に供える。(大久保)

正月の食事

朝食

昼食

夕食

元旦 うどん 適当なもの こはん
二日 うどん 適当なもの こはん
三日 うどん 適当なもの こはん
四日 おじや (オタナ探しで下げるものを入れる)
七日 七草がゆ。(湯ノ入)
幕 「三元日は箸を使つて、ゴミを棄てるな。福の神を棄てるから」という。(大原)
スリ鉢がぶり 年神棚の下でスリ鉢をかぶると、年を取らないといふ。

年を取りたくないのに、白をかぶつたら「ウス年」を取つたという話もある。(大原)

正月の歌 正月様ハヨイコツタ 油ノヨウナ酒飲ンデ木ツバノヨウナトトスイテ。(大原)

「オ正月ハヨイコツタ 木ツバノヨウナトトソエ 雪ノヨウナマタタイテ」と歌つた。(六千石)

二 日

説初め 青年団でウタタイのうまい人の家でやつた。ウタタイができなければ、取り結びに出られない。

説は希望者に年寄りの衆が教えた。冬、正月時分に教わった。説初めは一月十五日の天祭りの時である。宿をかりてやる。(台)

説ゾメはワカシユ連(ワカレン)といふでやり、ブタイソーニンの家でやつた。新加入者は一升吊るつて行つた(湯ノ入)。

仕事はじめ 一月一日は仕事はじめで、ちよつとしたことをやる。たとえばいは(銅葉)きりをした。なにかひとつ仕事をちよつとすればよかつた。子どもはこの日書初めをした。(大久保)

初荷 荷物に旗を立てて、初市に出した。(大原)

四 日

オ棚探し 正月四日にやる。三日間あげたお供えを煮直して食べる。

食べるところへ行つてケガをしない。(湯ノ入)

三が日あげたものを、四日にさげ、井にとつておいて、七草におじやにする。(三島)

元旦から三日まで供えて置いた食べ物を、坊さんが年始に来る前に下げる、オジヤにする。オ棚ザラシという。七草まで取つておく家もある。(大原)

お寺様が来ないうちにお供え物を下げる。(六千石)

坊さんの年始日 この日の作法は家によってちがう。瀬戸家では、正月棚におさこをまいてから、お棚にあがっているものをさげる。さげたものはとておいて、七草のおじやにして食べた。この日はまた坊さんの年始日である。(大久保)

寺の年始 四日は坊主が年始に回る日で、お供を連れて「〇〇寺」年始」といって檀家を回る。(大原)

鍋借り 若夫婦が里帰りして、米を持参し鍋を借りてたいて食べてく。(大原)

嫁と婿が一緒に、嫁の実家へおおばんもち(むかしは一升ますの大きさのもちを三枚もつていった)を持っていて、先方でなべを借りて、もちをにて食べた。この行事は、嫁に来て三年くらいはやっていた。この日は泊らずに帰つて来た。もし泊つて来ると姑にもう米なくともいいと娘はいわれたという。(大久保)

反町薬師 十九才の厄年の女人がお参りする。(大原)

新年会 大正年間に青年立志会ができて、会員が寺へ集まつて年始をした。女の組織はなかつた。(大原)

六 日

山入り オサゴ、幣束、頭付きを持つて自分の持山へ行き、ナラの木に幣束を立てオサゴ等を供え、ナラの木を切る。枝でもいい。以後山へはいれる。(滝ノ入)

山神様(常永寺境内に石祠がある)におさことお供えを持ってお参りに行く。翌日から山に入つていい。(湯ノ入)

山入りは六日、幣束をあげ、餅とおさこを供える。山について、けがをしない。(三島)

山入りは六日、米を紙に一升入れて、お供えを人數分と、お神酒をあげる。鍵を持って行ってかづらう。それからでなければ山へいけねえ。(山ノ神)

月棚におさこをまいてから、お棚にあがっているものをさげる。さげたものはとておいて、七草のおじやにして食べた。この日はまた坊さんの年始日である。(大久保)

寺の年始 四日は坊主が年始に回る日で、お供を連れて「〇〇寺」年始」といって檀家を回る。(大原)

鍋借り 若夫婦が里帰りして、米を持参し鍋を借りてたいて食べてく。(大原)

嫁と婿が一緒に、嫁の実家へおおばんもち(むかしは一升ますの大きさのもちを三枚もつていった)を持っていて、先方でなべを借りて、もちをにて食べた。この行事は、嫁に来て三年くらいはやっていた。この日は泊らずに帰つて来た。もし泊つて来ると姑にもう米なくともいいと娘はいわれたという。(大久保)

反町薬師 十九才の厄年の女人がお参りする。(大原)

新年会 大正年間に青年立志会ができて、会員が寺へ集まつて年始をした。女の組織はなかつた。(大原)

七 日

七草がゆ イモ・ネギ・大根・ゴボー・餅など七色にしたかゆを作れる。「七草なすな 唐土の鳥が 日本の國に渡らぬうちに」など唱えながら包丁で刻む。

また、七草という草があり、それを入れるとよい。タントボボのようなもので、花は白く小さい。畠のあせなどにある。(湯ノ入)

一つで七草というのがある。それをとつて来て、「七草なづな、とうどいの鳥が、日本の國に、渡らぬ先に、こつこつはたけ」といつて唱く。七草から、七草を取つて来て、「唐土の鳥が、日本の土地に入らぬ先に」と唱えながら叩き、お粥を作ら。(山ノ神)

七日の朝、七草をマナ板の上にのせて、年神棚の下で、包丁でたたく。

「七草ナズナ唐土ノ鳥が渡ラヌウチニ、トンガトソ」と唱える。

年神棚に供えた物を、下げて大きなぶりに取つて置き、七草の時に米を足して七草ぞうすいにして食べた。(大原)

七草のときにつかう七草はナズナのことをいう。これは風のふかない静かな日にとる。この辺では五日によるのがふつう。

この日の朝、「七草ナズナ、唐土のとりが日本の橋を、渡らぬうちにスコトントン」といしながら、七草をまないたの上にのせて、包丁のみね

山入り・サク入りを六日とした。

山へ行き紙をさいて幣束を作つて木に下げ、米・ゴマメをますに入れて供え、酒をあげる。(大原)

六日は山はじめ、この日は、近くの山へ行つて、山の神様をまつてからあそんだ。

アキの方の山林に行つて山初めをする。三階松に紙の幣束を下げて山に立て、おサゴ・餅などを供えた。鍵でいくらか刈り払うまねをした。(大久保)

できりながらとなえた。ナズナを、四日のおなきがしのときにさげたそなえものと一緒にしてかゆをつくつてそなえた。(大久保)
爪切り 七草をどんぶりの水に入れて、その水に爪を付けてから爪をはぎると、生爪をはがさないという。(大原)

初祈禱(九日)

御岳講の人々が組んで、先達と講員が一か所に寄つて、一年間の祈念をする。今年の作物の豊凶を占い、お伺いをたつて神様のお告げを聞く。ナカザ一人、シテン四人、前師一人の計六人で構成し、潔斎してナカザを中心にしてシテンが四方を固め、前師(先達)が前につく。先達がしっかりしていると、不動様などのいい神が降臨する。ナカザに神が降りて、伺うことに対する回答を出す。今年の作物や霜、気候、蚕などの豊凶、多少を占う。(大原)

十一日

藏びらき 蔵のある家で何かやつたらしい。(湯ノ入)

正月に俵に供えたお供えをさげる。

正月に俵に供えた餅を下げる。

この日にサク立子もやる。畑へ行って三サク切つて、中ザクに弊束を立てて、オサゴ、頭付きを供える。(滝ノ入)

十一日、倉のあるうちは倉を、ないちは物置を開ける。畑へ行って、サクを三サクばかり切つて、クワダテをする。その前には、麦踏みにいられない。(山ノ神)

(大原) 「セッチングラでもあけべえや」というくらいで、別にしなかった。

正月十一日は倉開きというが、倉のある家はほとんどないので、ゴマメと神酒と松をもつて畑にいき、サクを三サクまねごとに切つて祝つた。(大原七区)

サク入レ 畑に行つておさご、お供えと弊束をたてて、三サク切る。紙を破いた弊束を松にしばりつけ、畑に立ててオサゴ(米)・ゴマメを供え、酒をかけて祝う。三サクほど短かく手鋸で切る。(大原)
年神様の松をはずして畑に立て、一サクでもサクルまねをした。(六千石)
五日がサクダテで、畑に弊束を立て、鎌を持って行つて立てる。サクは切らない。

十一日がクワダテ、倉開き、朝、年男がはたけへ行つてお松をたて、くわでサクを三サクぐらいきつてきた。おさご・おみき・おかしらつななどをそなえた。

クワダテ以後、自由に畑に入つてよい。その前は畑に行けないので、幕のうちに正月用のネギ・大根・ニンジン・ゴボウなどを畑から掘り出して、屋敷うちにふせて置き、正月の食事に用いる。(大久保)

モノツクリの用意 十一日に自分の家の山へ行つて、ナラやニワトコの木をきつてくる。

小正月のボクにする木の株は、三年ぐらいかつて仕立てておく。これもこの日にとつてくる。ここではナラの木の株をボクにしている。(大久保)

十四日

小正月の飾り替え 十四日に松とハナ木とを飾り替えた。ハナ木はニワトコの木で、それをきれいに削り、ハナをかいだ。マユモもさした。十六大きなものをつくり、形もマユの形につくつた。また、縁起物のお飾りもした。(大原七区)

モノツクリ 十四日に作るものは次のようなものがある。

松飾りのかわりに、茅のついたハナ木をさしておく。(六千石)



ハナ飾り（大久保）

（開口正己 撮影）



神棚のマユ玉とハナ（大久保）

（開口正己 撮影）



カユカキ棒（中原）

（藤生昌弘 撮影）

カユカキ棒 苗代のネーマに、上を十文字に割ってマイダマをさして水口に芝を切つてとめておく。
マイダマ 正月 十一日にボク切りをしてくる。山桑、ナラのカブツを長いのを供える。（滝ノ入）
マイダマ 正月 十一日にボク切りをしてくる。山桑、ナラのカブツを長いのを供える。（滝ノ入）

十四日の朝、おさこをまいてお供えをあげてから門松をとり、次のもの
マイダマ 三升位作る家が多い。十六玉はボクにさして、エビス様に供える。マイダマをゆでた水を家のまわりにまくとはやり病いをわすら
わない。
オミタマ様 重箱に飯を一杯盛つてノーデンボーの箸十二本さして、年神様にさす。
この箸は小正月後、もぐらよけとして畠にさしておく。オミタマ様は百姓の作神だという。
ボク マイダマをさす木で、山桑、ナラの木を当日切つてくる。座敷に一番大きくて立派な木を飾り、蚕室などにもさす。
ハラミバシ ノーデンボーで作る。
カユカキ棒 ニワトコの木を作る。後でネーマにヤカガシの頭と年神様のマイダマをつけて立てる。

ハナギ ニワトコで作り墓地にまで供える。本当はハナカキナタで木を削るのだけど、芽の出ているもので間に合わせる。大体は三段で、十六玉の所に月の数だけ（ふつうは十二、閏月のある時は十三）芽のある長いのを供える。（滝ノ入）

マイダマ 三升位作る家が多い。十六玉はボクにさして、エビス様に供える。マイダマをゆでた水を家のまわりにまくとはやり病いをわすら
わない。
オミタマ様 重箱に飯を一杯盛つてノーデンボーの箸十二本さして、年神様にさす。
この箸は小正月後、もぐらよけとして畠にさしておく。オミタマ様は百姓の作神だという。
ボク マイダマをさす木で、山桑、ナラの木を当日切つてくる。座敷に一番大きくて立派な木を飾り、蚕室などにもさす。
ハラミバシ ノーデンボーで作る。
カユカキ棒 ニワトコの木を作る。後でネーマにヤカガシの頭と年神様のマイダマをつけて立てる。



神棚のマユ玉とハナ（大久保）

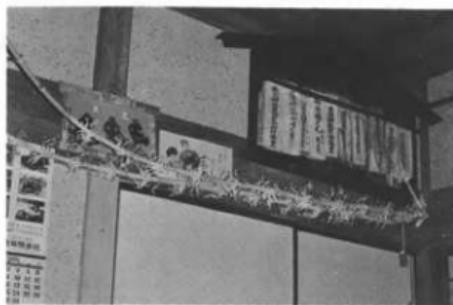
（開口正己 撮影）

ハナギ ニワトコで作り墓地にまで供える。本当はハナカキナタで木を削るのだけど、芽の出ているもので間に合わせる。大体は三段で、十六玉の所に月の数だけ（ふつうは十二、閏月のある時は十三）芽のある長いのを供える。（滝ノ入）

ハナギ ニワトコを一芽ずつ切つて、マイダマと一緒に供える。大神宮には十六芽のある長いのをあげる。ハナにする代りに芽のあるのを切つてくる。
カユカキ棒 苗代のネーマに、上を十文字に割つてマイダマをさして水口に芝を切つてとめておく。

マイダマ 門松をたてた跡に全部たてる。以前は「三升から一斗じやきかねえ位作つた。大体は蘭形のをボクにさし、他に鳥や動物の形のも作つた。特に大きなのを十六個作り、「一升位使う」十六玉という。三宝荒神は丸いのを三つ）。

ホシノタマ にぎりめしにノーデンボー（町田イツケは松）の箸を立てて、オミタマ様、年神様に供える。
箸がかかるとその年は豊作になるといい、にぎりめしに浅くさしておく。



十二段バナと十六段バナ（大久保）（関口正巳 撮影）



マユ玉とカキ花飾り（大久保）
（永田隆一 撮影）

のようすに鍵でかけて供える。ハナ木を作つて松飾りとともにかえる。（大原）

十四日のモノヅクリには、ニワトコの皮をむいて、ハナカキナタ（長さ一五、六センチ）で削りバナを一段にかけて、お松を供えた所に取り替えて供える。肥やし場には竹に小さいハナを幾つもさしたもの（名稱不明）を立てた。この辺では烟の境木にニワトコやウツギを植えて置くので、それを使つて置き、家族が使用分作つて置き、家族が使用

する。長さ二十一二二十四センチ、太さ一センチほどもあるので、使いづらいためまねごとだけで、実際はふつうの箸を使う。

ニワトコの長い枝を一本取つて、一方は十六段、他方は十二段にハナをかけて、神棚の前のなげしに供えておく。（大久保）

マユ玉 十四日のモノヅクリの日にマユ玉を作る。十六マユ玉は桑の木につける。ほかの形のものは面倒くさいから作らない。この日桐生から九十二、三になる老爺が小判を持って来るのを買う。あわいは来ないけれど、この小判と初午の旗と盆花（仏様にあげる造花の蓮の花）を売りに来る。マユ玉は、あとはふかして、小豆を煮て団子にしたり、砂糖醤油で煮たり、いやならしそつぱくしたりし、うちでも食べるし、遊びに来たものに、団子食わねえかといって出した。食べると、いいマユがとれるようになる。（三島）

十四日はものづくり。山桑のぼくに、マユ玉を一斗ぐらいたつけた。いいマユがとれるよう、十六マユ玉は大きく、あとはこまかい。（山ノ神）十四日に松飾りを取り払い、マイ玉をさし替える。マイ玉はマユの形の大きい物を十六玉といつて、親玉を十六個作つたほか、丸形やキノコ・鳥の形なども作る。



カキ花を作る ニワトコをけずり、ハナをかく。（大久保）
（永田隆一 撮影）



ハナカキナタ（大久保）
（関口正巳 撮影）



カキ餅とマユ玉（大久保）（開口正己撮影）

マユ玉はマユ・キノコの形を作り、根っこがついたボクに飾る。ボクは山グラの木やケヤキ、エゴ、ナラの木を用いる。ボクを床の間に飾ると正月気分になる。（大原）

十六玉といって、マツタケの形に作る家もある。

（六千石）

マユ玉を小枝にさして、家の神様やお松のある所に上げる（農耕儀礼の項参照）

朝ご飯がすんだらお松を下げて、マユ玉と取り替えた。

クワの株の枝に十六個のマユ形のマユ玉をさして、

座敷の天井に吊るす。マユ玉はなぜ十六個なのか不明。（大久保）

成り木賣め マイダマをうでた湯を枯る木などの根にかけて、「早くなれ、ならぬとぶつたぎるぞ」ととなえる。（台）

小正月にマイダマをうでた湯を家のまわりにまいておくと、長虫が入らない。また、成り木にまく。「成らない」と切るぞなどと言いながら、

一枝位切つた。（湯ノ入）

行事の名前はわからぬいが、この日カキとかモモなどの木に、なたで

さすをつけれる行事があった。はずした弊築の紙をカキなどの枝に吊るし

てなたでさすをつける。このとき「ナルカ、ナラネエカ、ナラナキヤブツ

キルゾ」といってさすをつける。もつひとりのものが、「ナリマス、ナリ

マス」といながら、まゆだまをゆでた湯を、木のきり口につけた（か

けた）。これは子どもがやった。（大久保）

十三日にマユ玉をゆでた水を柿の木にかけて、

なたを持って「成ルカ成ルカナイトコ

レデブツタ切ルゾ」「成ル

成ル」と唱えた（六千石）

正月様にあげた弊築の

紙をたばね、柿の木に吊

るして、実がなるように

折る。（大久保）



カキの木に下げたご弊築（大久保）
(開口正己撮影)

蛇・ムカデ除け お飾りのわらで、マユ玉をゆでた水を家の回りにまくと、蛇・ムカデが入らない。（大原）

十五日の朝、小豆ガユを盛つて年神棚に供えた神の体を、下げて洗つた水は家の回りにまいて回った。蛇・ムカデが入らないよう。（大久保）

若餅 正月十四日には、「寒餅になるから、余計揚んべえ」といつて、若餅を揚きお供えも作る。（三島）

若餅を供え餅のように丸めて十二個（うるう年は十三個）作り、柿の枝にさして座敷の天井に吊るして置く。花が咲いて実がなるよう祝うもので、柿餅という。以前は木綿の花の形を十二個作つた。餅を小さく茶碗のように手でこねて形を作り、下から枝にさした。（大久保）

餅をつく日 正月、小正月、節供（三月と五月）、カワツビタリ、十日夜。（台）

オミタマママ 年神様に、そこのうちの主人が年中盛つて食う茶碗に、一杯米を盛つてといで、それだけ炊いて、重箱に入れて、うつぎを十二

本、うるうがあれば十三本挿して、オビタマママにあげる。小久保・伊藤・小川家はやり、大川家はやらない。（山ノ神）



オミタマ様・オタキアゲとも
（永田隆一撮影）

オミタマ様は年神様のこと
で、わらで丸いシメ飾りを作
つて供えた。（六千石）

「オミタリ様は年神様と夫
婦だ」とい、年神棚と相
向かいに棚を吊った（大久保）

オタキアゲ 米を煮て「オ
ミタリサマにあげます」と言
つて供える。むすび十二二、
ウツギの箸をそれにさして供
えた。

十四日の朝、オミタマの二
飯をたいて上げた。箸を十二本、ご飯に立てた。箸は漁戸家ではオツカ
ド、永田家ではウツギ、清水家ではマメガラの木。オミタマとは先祖のこと。

十四日の夕食後、オミタマ様に供えるだけの米を年男が鍋に入れ、豆

がらをたいて白飯を煮る。その飯をオテマル（握り飯）にして十二個作

り、ウツギの箸を十二本作つて一本ずつさし、お膳に紙を敷いてのせ、
オミタマ様に供えた。今は略して、鍋で煮た飯へ十二本の箸を立てて、
そのままオミタマ様に供えている。（大久保）

シラヤ 十四日夜、シラヤを作つて「オシラ様へ上ゲマス」といつて、
神棚へ供える。

シラヤはとうふをしばつて、すり鉢ですつて塩をませたものに、ニン
ジン・大根・コンニャクを味付けしたものを入れて、ませて作る。なお、
シラヤはシラバツクリから、ご祝儀には使わない。とうふも使うなど
いうが、キラズ（とふうから）はキラワズといつて使つてもよい。ゴマ
もゴマカサレルから使わない。（六千石）

道祖神 ドンドン焼きなどしない。特別の行事はない。道ロク神様に馬

のワラジを上げたり、竹ンボに酒を入れて供えたりした。（大原）

道祖神に馬のわらじの大きいのと竹筒に酒を入れて供えした。日は
いつかわからない。ドンドン焼きはしなかつた。正月の飾り物は家々で

燃した。（大原七区）

正月の飾り物を、十三日にハナギやマユ玉に飾り替える。はずした物
は、各家々が、いろいろで燃やす。マユ玉には小判などの菓子も吊り下げ
た。（六千石）

お松は十四日から十五日にかけて、むらの子どもたちが各戸をまわつ
て集めてあるいた。上級生が指団して下級生は荷車をひいてあつめた。

このとき、いくらかのお金をおひねりにしたのを、各戸からもらつた。
この金で菓子や酒を買って、食べたり飲んだりした。もらつてきたお松
をあつめて小屋をつくつた。十五日の朝飯を食べてから小屋をつくりは

じめ、一日がかりでつくつた。小屋の心棒には門松の心棒をつかった。
小屋は大久保では一ヵ所しかつくなかった。場所は毎年まつていた。

子どもたちは小屋の中で飲み食いをし、十六日の晩に焼いた。

十六日はドンドン焼き、この日、うまやこいを出した。

子どもたちは夕方まで自由行動。晩になつてから小屋のところに集つ

て來た。親方が小屋に火をつけた。小屋に火をつける前に神社の太鼓を

鳴して合図をした。このようにお松やおしめをあつめて小屋をつくり、
それを燃やすことをドンドン焼きといつた。ドンドン焼きの火でもちを

焼いて食べるとは、やはり病にいからないという。この行事は昭和十年
ころまでやつていた。

なお、近くの佐波郡東村の六道というところで、明治四十三年か四年
のころに、ドンドン焼きの火で一つの集落が焼けたことがあり、それから
ドンドン焼きのときには、消防手がでて警戒するようになつた。（大久
保）

十五日

アズキガユ 神様はアズキガユを一番好む。赤飯よりも好む。(吉) アズキガユをカユカキ棒でかきまわすと糸を引く、糸が出来るという。 ハラミバシで食べる。このカユは吹いてはいけない。田植えに風が出るから。

最初の一箸位ハラミバシで食べるが、食べにくいのでふつうの箸にしてしまう。熱くて食べにくいので子供は嫌やがつた。(泡ノ入)

十五日ガユを吹いて食べると初田植に風が吹く。(湯ノ入)

十五日正月を小正月とはいわない。十五日の小豆粥を吹いて食べると、田植の時風が吹く。またご祝儀の時に風が吹く。ノーテンボ(ヌルデ)で、家中の箸を作つてお粥を食べる。歳神様にあげたマユ玉をつけて来て、ノーテンボにはさみ、お粥をかんましたあと、歳神様にあげておく。しまっておいて五月にましに食われねえように、水口にさす。(三島) お飾りのわらをたいて、十五日カユを煮る。(大原)

アズキガユに塩で味をつけたり、餅を入れる家もある。吹いて食べると田植えに風が吹くといわれる。箸はふつうのものを使う。(六千石) カユカキ棒 ハナ木にマユ玉をさし、お粥をかんまして、なままでさした。(西野)

アズキガユを吹いて食つと、田植の頃、風が吹いて、穂が倒れる。アズキガユを、カユカキ棒で三まわりかきまわし、米つぶがたかると、大神宮にあげて、苗代の水口にさしておくと、水がよく入る。(山ノ神) オツカドの先を四つ割りにしてマユ玉をはさんだカユカキ棒で、十五日のアズキガユをかん回しながら何か唱えた。カユカキ棒は紙に包んで神棚に上げて置き、あとで苗代の水口に立てた。(大久保)

嫁の年始日 嫁と婿が、嫁の家へ年始に行く。もつていく土産はいろいろ。この日はゆつくり泊つてこいといわれた。嫁と婿が二人で行つて泊つてくるのはこの日だけである。子どもでも沢山あるようになると行

かなくなる。(大久保)

小泉の稻荷神社 一月十五日に願いことをかけて月参りする。オ願シヨかけて上げた旗を西瓜畠に立てて置く。うつかり他人が入ると、とびかかる。(大原)

十六日

五目飯 赤ツツラ飯(五目飯)を作つて仏様に供えて、食べた。(六千石) マユカキ 十六日の夕方、マユ玉を取つて、お汁粉にして食べる。(六千石)

正月送り 十六日のマユ玉正月で、「年神様を屋根に上げろ」とい、お棚板に年神様の弊束やオシラキをのせたまま、屋根に投げ上げた。(大原)

馬肥え取る日 昔は荷馬車ひきがさかんで、十二、三軒も運送屋があり、一戸に一頭の馬は普通だった。農家では冬、山の木の葉ざらいをして、うまやの中に入れて、馬に踏ませたり、馬の寝る所に雨がしみないようにした。馬の踏んだ木の葉を大晦日に取り出して、新しいのを入れるが、一月十六日にも取り出した。十六日になると、馬がケガをしないというので、形だけでもよかつた。これは肥やしになるので、馬車ひきの家にも頼んで「馬肥えを出して下さい」といつてもらった。(大原)

十八日

馬の親音様 一月十八日、石山の親音様に馬の支度をしてつれていった。広沢のだいおう院の鐘撞き堂の側へつれていって、鐘をガンとさせると、馬の度胸がすわる。(三島)

馬をもつていた人が、石山の親音様(佐波郡赤堀村)へ、馬をひいて

お参りに行つた。(大久保)

二十日

二十日正月 半日くらい休んで、てんでんに仕事にかかる。夜なべ仕事は休む。(六千石)

二十日は二十日正月、初えびす。しまい正月といって、正月棚をはす。さくたてなわとか、かたかけなわなどをなつた。一年中使うだけのなわをなうといつた。えびさまを神棚からおろして、おまつりをした。この日のごちそつは家によつてちがうが、漸戸家では、朝えびすといって、朝しるこをこしらえて、えびすぎまにあげた。(大久保)

エビス講 正月は百姓のエビス様、作エビスともいう。十月は商人のエビス様、作エビスだから何か作れと言われ、繩をなつたりした。(台)

机に白飯・お頭付を三膳供える。それに金も供える。エビス、大黒に供えるのである。

エビス様はかたわものである。かたわもの家のには金ができる。(二十日正月頃から仕事を始める。(湯ノ入))

神棚の下にエビス、大黒をまつり、一人分の膳を供える。有金全部とそろばん、カケエといい生き魚と一緒に供える。

エビス講で正月はしまいになる。昔は普段は麦飯だったが、正月二十日までは麦は使わなかつた。(湯ノ入) 床の間にお膳を一つ用意して、笑と並べて供える。油揚しを作り、カンピヨウでしばつて俵の形にしたものや、芋・大根などを煮付けたもの、サンマのお頭付などを、トリ膳に盛つて供える。御飯はふつうに盛る。

ますにお金を入れて、「お金を働いてくれ」と供える。笑いつぱいにしてもらいたいといって、笑にのせて供える家もある。(六千石)

こむように、熊手や簪を飾つたり、お金を上げる家もある。斗柄の上にエビス・大黒を飾る家もあり、財布を縫つて供えると、お金がたまるともいう。財布は秋に作るとアキッボイので、春か夏に作つたり買つたりするといよいとい。(大久保)

トリノ市 太田の生品神社にエビス講市、西ノ市で、エビス・大黒の掛け軸や、箱入りの本像、お宝などを買ってくる。(六千石)

二十日祭 歳神様の下で、シラジ(すり鉢)をかぶつて糞をする。

頭を病まない。(三島)

二十一日

地藏様 每月二十四日が縁日で寄つて念仏を唱えた。焼きまんじゅう屋も出た。(大原)

二十二日

しまい正月 名前だけで、別にこれといったことはしない。(湯ノ入) おしまい正月は二十八日で、餅を揚ぐ。貧乏だから三回に揚ぐのだと。(三島)

「きょうは二十八日、尻つたくなりで用心」といつて、子供が遊んだ。(大原)

不動様 寺の不動様へお参りに行く。(六千石)

この日の晩は不動様がとくにぎやかであった。近在からわかいものが、お参りに来た。不動様にお願いすれば、なんでもかなうといわれた。不動様に対する供物は現在もさかんである。(大久保)

次郎の朝日（一日）

栗のこわ飯で祝う。（台）

次郎たちが赤飯を炊くだけの内祝い。（湯ノ入）

二月一日は、次郎の一日といって、栗のこわ飯を炊く。（三島）

一日は次郎の朝日、一般的には、この日は特に行事はないが、大久保の漸戸家では次郎の餅をついた。同家では小正月のワカモチをつかないかわりに、この日に次郎の餅をつくという。その理由は、むかし、ワカモチをついていたときに、こねどりをしていた人が、きねで頭をたたかれたことがあつたためという。

永田家ではアワ餅のつき初めて、必ずアワ餅をつく（正月、うちにはアワ餅がつけない）。（大久保）

節 分（三日）

ヤカガシ 節分にトシコシイワシの頭を豆がらに差して、「四十八種の虫を焼きます」と唱えて、つばきをかけながら、豆がらで焼く。

猫に食われないような、大神宮様などにあげておき、苗代の時、水口に差す。いい苗がとれるように。（台）

豆をいる下でヤカガシをする。「四十一色の虫の口を焼きます」と言ひながらつばをかけながら焼く。年神様に供えておいて初午にオタナをくずす時に、終と一緒にトボロにさす。（湯ノ入）

ヤカガシはイワシの頭につばをかけながら焼いた。色々の作物の害虫を焼く唱え言をした。トボロにさした。（湯ノ入）

「借金なす（返済）がら、いいこと聞くがら」というので、ナスと菊のからを燃して、豆をいる。その時ヤカガシといつて、作物の名をいい、「四十八か村の虫を焼きます、ベッベ」と、つばを吐きかける。（三島）

蠍の頭を、菊のざんまに挿し、豆をいりながら、つばきをつけ、「四十九の桑の虫の口を焼く、米の虫を焼く、麦の虫を焼く、四十八さくの虫の口を焼きます」という。（山ノ神）

豆をいる時には、「借金なすがら、いいことを聞くがら」というので、ナスと菊のからを燃す。（山ノ神・台）

イワシの頭を木のまたにさして、豆をいる時に焼きながら、「五穀ノ虫ノ口ヲ焼ク、ビユッビュ」とつばをかけて唱える。それをいつた豆の上にのせて年神様に供えてから、魔除けに軒下にさして置く。

ヒライギの枝もトボロへさす。（六千石）

節分 この日いろいろで、イワシのあまを桑とかめがらの二又にさしてやく。これをヤカガシという。これを焼きながら、作物の害虫の名をあげて、それを焼くという唱えごとをする（農耕儀礼「節分」の項参照）。ヤカガシは一本づくって、かぎ竹にしばりつけておいた。それを苗床をつくるときに粉にもんで、堆肥の上にふりかける。そうすると害虫がたからないと。（大久保）

豆マキ 大神宮様から豆をまく。鬼が逃げて行くように一か所あけて「福は内、鬼は外」という。年男は初湯に入り、提灯をつけ、神社に行つて豆をまく。近所の者が寄つて恥やかだつた。天神様・二十三夜様・太子堂まで、豆をまいて帰つた。（山ノ神）

「福ハ内、鬼ハ外」と唱えながら、豆をまく入れてまく。（六千石）

節分の豆 豆茶を入れて飲む。

また豆を自分の年令の数だけ拾い井戸に入れると目が悪くならない。

初雷の時食べる。

上簇の時にマブシに豆を一粒ずつ入れるといいマユがとれる。（台）

節分に豆まきをする。

その豆を年令の数だけ井戸神様に供える（井戸に入れると病いにかかるない、目を病まないといふ）。（湯ノ入・湯ノ入）

節分の豆をとつておいて初雷の時に食べる。（湯ノ入）

豆占い 十二の豆をいろいろの中で焼いて、焼け具合によって、その年の天候を占う。(湯ノ入)

節分のとき、豆焼きといって、うらないをした。これをする家は、大久保では何軒かあった。おきの上にマメをじかにくべてマメのやけ具合でその年の各月の天候を判断した。マメは一粒ずつくべ、一月から順にけむりと水の出かけんをみて判断した。平年は十二粒。(大久保)危落し 厄の人は辻にお金を落しておく。女は反町の薬師様へお参りし、桶など髪のものを落して来る。(山ノ神)

初午 午(午の日)

初午 丙午の時は次の午の日にやる。団子を作る。(西野)

初午には赤い旗を立て、団子を作る。午前中は火を使うな、風呂をたてるな。(山ノ神)

稻荷 「氏神稻荷大明神」と書いた旗を上げて祝う。赤飯や初午ダンゴ、油揚、スミドウフを屋敷稻荷に供える。トウフの四角の隅を四つ落として、小皿またはツケ木に二ヒラづつ載せてスミドウフとして供えた。二ノ午、丙午は早いといふのである。(大原)

(大原) 稲荷様に赤飯・油揚・とうふを供える。屋敷稻荷へ「正一位稻荷大明神」と書いた色紙の旗を作つて上げた。(六千石) 屋敷稻荷はふつうイナリ様といい、ウジカミ様ともいう。稻をサス(棒)で扭いでいるお姿があり、物にのつてゐる。

初午と稻荷祭りに祭る。(大原)

赤飯をつくって屋敷の稻荷様にあげた(農耕儀礼の項参照)。また、マユ玉を作つて供える。(大久保) ミツカリは知らない。(六千石)

コト八日(八日)

メカイ コト八日に魔除けとしてメケーを竿の先にたてたり、ヒイラギを出入口にさした。鬼の来る日だ。(湯ノ入)

二月八日と十二月八日に、ダイマナクを立てるといって、メケーに、格をさし、竿につけて立てる。この日赤城山から鬼が来るという。(三島) コト八日に格をとぼ口にさす。メカイにも格をさし、竿につけて立てる。悪魔よけ、鬼よけと、親にいわれた。

コト八日に格をうちの廻りに持す。メケーの中に格を入れて、庭先に立てる。ダイマナコ立てろといわれた。鬼が金ぶつこんでいくんだ。「朝起ききて見ろ」といわれたが、格へえで何も入っていなかつた。「水も流さぬコト八日」といつて、夜なべを休んだ。夜なべ休みが寒しみだ。二月

八日に、鬼が帰つて来る。(西野)

こと八日には、格をミケーボを逆さにして持す。晩方練習に草履・下駄だの脱ぎすてにして、夜までおくと、鬼がはくので、はかれねえよう

にする。はかれれば厄病神が来る、ダイマナク様が来るぞといつた。ミケーボは竹の先に挿したり、三本股の上においたりした。ゆうべ金がおりたかつて親にいわれた。めかに金が入つていて、親が入れたんだね。二月がコト始め、十一月がコトしまい。(山ノ神)

竿の先に鎌をつけ、その下に籠を結びつけた庭に立てた。この籠にヒイラギを入れておいた。ヒイラギはトボロや裏口にもさした。(大原七区) 竹竿のウラ(先)へメカイを付け、ネギやヒイラギを入れて、夕方カイドへ立てる。鬼が来るので、ヒイラギで痛くて来られないように魔除けにするという。あしたの朝、コガネが入つてゐるという。

「水モ鳴ラサヌコト八日」といつて、この夜は静かにして、夜なべ(夜仕事)をするなどといふ。(六千石)

コト八日には鬼が来るといふので、メケエヒヒイラギを入れてケードに立てた。ダイマナコとはいわない。(大久保) 针供養 二月八日には針供養といい、つかつた針とかかけた針を豆腐にさして、川へ流した。これは女の行事で、ごちそうをつくつて祝つた。

(大久保)

お針の師匠の家に針子の娘たちが集まり、古い針をとつぶにつつし
て供えた。(大原)

天まつり(十二日)

天まつりは二月十二日に各組でやる特別な神仏をまつることではなく、
当番の家に集まり、その年の組の役員を決める。

前は子供も来て、飯や神酒を出した。(湯ノ入)

天祭りには豆腐汁と油揚げを入れた五目飯を作る。字の西と東から一
人ずつサシ番がでて祭りの世話をすると、天祭りの時には上番・下番(役
をおりる人)四人でやる。天祭りは二月十五日。サシ番は神社の旗のあ
げおろしや生品神社の祭礼の時の酒番をやる。(台)

天神講(二十四日)

以前は、子供が米・しょうゆを持ち寄って宿で五目飯を作つて供えた
り食べたりした。

習字を書いて、鎮守の森の天神様にお参りして供えて来た。字ができ
るようになるといわれた。(六千石)

小学生たちが宿をたのんで、そこに天神様の木像(大正時代になつて
からつくつたもの)をかぎつておがんだ。宿ではごちそうをつくつてく
れた。宿で、半紙に「天満宮」と書いて、それをもつて神社へお参りに
行った。天神講のときは宿に泊らなかつた。(大久保)

三月

ヒナの節供(三日)

五節供 正月・三月節供・五月節供・八朔の節供・暮の五回を五節供

という。「仲人三年、親元八年」といつて、その間は五節供に供給から贈
り物をする。五回もらつても、お返しは一回返すだけよい。(六千石)

三月の節供 お雛様は坐り雛で、大間々から買つものが多い。今の雛
は塗りが悪い。菱餅・草餅に、煮しめ・ツツコ豆腐(豆腐をしばつて、
ツツコにして、竹輪のようになつたのを煮る)を作る。初節供には、
近所のものを呼ぶ。(三島)

ひな祭りの時のごちそうは、すしに餅(ヒシ餅は白・青・赤の三色が
ふつう)。おひな様が飾つてあるうち、すしと餅を供えておいた。(大
久保)

ヒナ市 イチロクといって、一と六の日が市日だつた。大原では四月
六日がヒナ市だつた。ヒナ市で飛磨なども買った。大原の節供は十日
遅れの四月十三日だつた。当時は桜の花を見なければお節供ができるな
かった。(大原)

二月二十六日にヒナ市が大原にたつた。そこでひな様や、節供に必要
なものを買ってきた。(大久保)

節供ビナ 以前は古くなつたヒナ様は川(岡上用水)へ流した。「みや
げを持たせてやれ」とい、草餅などを一緒に流した。行事は特にない。
(湯ノ入)

座敷にヒナ人形を飾り、ヒシ餅を供える。

古くなつたヒナ様は、「島流シニスル」といつて、家の裏の稻荷様に納
める(川がないから)。

おひな様を飾るのは二月二十八日ころからで、三月一日に飾るのは遅
い方。(六千石)

金魚 子供が無事に育つように、金魚を川へ流す方がよいという。(六
千石)

初節供 三月には親王さま、五月には吹き流しをおくる。吹き流しに
は、上に実家、下にその家の紋をつける。(三島)

女・女の初節供にはヒナ様をもらつ。

男の子は五月節供に鯉ノボリをもらう。(六千石)

おひな様は、子どもが生まれた時に、母親の親元からは内裏様、親戚や隣近所からもひな人形が贈られた。お返しは桜餅。(大久保)

八日節供 三月八日は八日節供といつて、この日はすしをつくった。九日におひなさまをしまうことになっている。しかし、その日が雨の場合は、おひなさまをしまうのを「日とか」一日はのばす。

いたんだおひなさまは川へながす。(大久保)

山 神 (六日)

山神様の祭り 常永寺の裏に石祠があり、部落中の人が賽錢を持っておまいりに行つた。(湯ノ入)

馬頭観音 (十八日)

赤堀村石山の観音へお参りに行つた。宝泉村脇屋にも観音があつた。別所の観音も古い。どちらも馬頭観音だった。運びき人は埼玉県神岡の観音へお参りして、お守りを受けて馬屋へ貼つた。(大原)

彼 岸

墓参り 分家は本家の墓地に油揚げ、とうふを持ってお参りに行き、本家は分家の墓場に互いにお参りする。(寺下)

「中日ボタ餅食いたかないが、ならば半日遊びたい。」(湯ノ入)親もとへ墓参りに行き、墓に線香立てて回る。花や水・ダンゴなどを供える。初彼岸には線香立てに行き、新仏に三重ねあげる。(六千石)彼岸の入り口、中日、はしり口の日にはばたちをつくって仏様におそなえした。はしり口の日には米の粉でだんごをつくって、墓参りに行く。本家株の家では、先祖様があるので、彼岸の行事は特にきちんととした。

石塔をたてるのは、彼岸か命日である。(大久保)

社 日 (戊の日)

社日様 「社日の金物切れっこなし」で、社日様にいろいろ店が出るが、どれも一時の間に合わせには間に合うが、いいものは少ない。桑苗も種類が判らない。「社日の日は、砂を動かすな」という。

大泉にある社日様で、笊や簾の農道具を買って来ると、繁昌する。(三島)

社日は彼岸のうちに大概ある。彼岸より早いとその年は秋が短いとう。

小泉の社日さまにお参りに行き、お札や土をもらつてくる時もある。(千石)

この日は小泉(邑楽郡大泉町)の社日様へお参りに行つた。むかしは社日講があって、地神様をおまつりした。

社日の日にははだけへ入らないようにといわれていた。(大久保)

四 月

花 祭り (八日)

花祭り 常永寺で甘茶を出してくれた。この日、各家では軒下に藤の新芽のついた枝をさした。(湯ノ入)

山から藤の花を取つて来て、軒下、大神宮・床の間・仏壇・エビス様へ飾る。(六千石)

お萩巡様 四月八日にお寺へお参りに行つて甘茶を貰う。ツツジを軒に挿す。(山ノ神)

八日はお萩巡さまの誕生の日。

旧の四月八日には春にお祝いをさせて、むらの子どもがお参りに行き、お祝いを甘茶をかけ、また、甘茶をもらつてのんだ。甘茶はわけでもらつて来た。これは子どもの虫ぐさになるといった。(大久保)

三夜沢の赤城神社 (旧四月八日)

赤城山の山開きには登らないが、牧場の山開きで牛などを頼んだ。春は代参で、秋は個人々々がお参りした。(大原)

春祭り (十日)

花見 大原名物桜の花見でにぎわい、ドンス開きをして芸者衆が出張して来たり、太田の医師会が来たりした。

大原の桜は界隈の名物だった。明治二十八年の日露戦争のがいせん祝いに、県道の両側十八丁(県から桜苗を配つて植えたもので、各戸一、三本ずつ依託)になつた。これが名物で、大原に親戚のある者は年始代りに花見に来た。家々では花のあるうちは誰かがお客様に来るので、十日も二十日もシンをつけてもてなした。花の下は歩くのも容易でないほど狭わたった。大原では「貧乏桜」と呼んでいた。この桜も舗装工事のため昭和三十年ごろ伐採した。

大原の桜は名物で花見で大変なにぎわいだった。この桜は明治三十八年、日露戦争が終らないうちに勝利祝いに植えたもので、一戸五本ずつの苗を分けて、三五五本(二七一本ともいう)植えたという。ヒガ・ン・ザ・クラ・ヨシノザ・クラを交互に植え、あとでシダ・レザ・クラも植えた。勝利祝賀に、造花を飾つて一晩で桜の花を咲かせた。各戸一本ずつガス灯(石油ランプ)に灯りをつけた。戦後、自動車が増加し事故で三人も亡くなつたので、ついに桜を伐ってしまった。桜もかなり老齢化していた。(大原)

節供 桜の花見に合わせて十三日に節供をやり、毎日のようにしをつけてお客様をもてなした。近在の親戚は一年始のお返しとして、花見の

時期に大原へ来たので、十日間も仕事にならなかつた。これで貧乏したので「貧乏桜」と呼ばれた。(大原)

春駒 昔は春駒という門付がミカボ山の方(?)から来た。(六千石)

赤城神社 十五日は大久保の赤城神社の祭典である。神社からは各戸にお札を出した。

この日は、赤飯か餅をつくつた。このむらからよそへ出ているものは、この日は実家へお客様に来た。(大久保)

温泉神社 昔は旧三月二十五日に祭つていた。今は四月十五日。神官が来ておがむ位。(湯ノ入)

八丁ジメ

道祖神の所の両端に竹を立てた。四月二日赤城様や権現山のお札を箱除けに立てた。(大原)

五月

端午の節供 (五日)

のぼり のぼりは四月のなからごろから、五月のなからごろまで立てておく。からざおをいつまでも立てておく家もある。

初節供のときは、嫁の親元からはのぼりとか吹き流しが贈られる。吹きながしには、紋所をいれる。嫁の里方の紋は赤、もう一方の紋は黒にして、両家の紋を引きあわせつけた。また親戚からはのぼりとか、棚かざり(かぶと・太刀・よろい・槍など)が贈られるが、これは親戚が共同で買つてくれる場合もある。

嫁は、タラの干物と柏餅をもつて里へお客様に行つた。また、親戚へも柏餅をくばつた。五月四日の晩にはショウブ湯をたてる。(大久保)

ヨモギ・ショウブ ヨモギ・ショウブを軒下にさす。蛇よけとも女の

魔よけともいふ。(淹ノ入)

この日にショウブ湯に入るか、ショウブ酒を飲むかすると、蛇の子をはらんでいたのがおりるという。

ヨモギ、ショウブを軒下や屋根にさす。(湯ノ入)

五月節供にショウブ湯をたてる。ショウブとヨモギを軒にさす。長虫が入らない。ショウブ酒を飲む。ショウブで腹の虫切りをやる。帯のところに、ショウブをはさみ、つばをつけてくと、ビーピーと伝わり腹ん中をかんまさるほどおかしく、笑わないではいらなくなる。

ショウブで頭をしばると頭痛がしない。お酒の中に、ショウブを入れて、その酒を家中で飲む。ショウブを入れて、風呂を立てる。(三島)

蛇 五月節供のショウブ湯は、蛇に見こまれないように入るものだという。(大原)

ショウブ・モチ草を取って来て軒下にさす。蛇が家に入らないようにさすといふ。

ショウブ・ヨモギを入れてショウブ湯(風呂)をたてて入る。

ショウブ酒を作り、女は蛇に見こまれないように、たとえ一チヨコでも酒を飲む方がよいといふ。

娘が蛇にはいこまれ、ショウブ酒を飲ませたら蛇が出たという。赤堀村の本間家の娘が赤城山へ行きたいといふ。蛇に見こまれて沼に入ってしまい、親にあきらめしてくれといった。赤飯を供えると沼の中に消えてなくなるという。(六千石)

ショウブの昔話 五月五日には、藤のつる(枝)とヨモギとショウブをとつてき、軒先にさしたり。ヨモギとショウブを神様にあげたりしむかし、あるところの娘がヘビに見込まれた。家のものは、どうもこの頃娘の様子がおかしい。誰か男が来るようだが、姿がわからない。娘の体がおとろえていくようだが、たゞの男ではないとて、今度男が来たら、針にきぬ糸を通して着物のそそを三針ぬつてそのままほうつ

ておけといつた。娘はその男が来たとき、着物のつまへ針をぬつてやつた。そして、つぐ朝その糸をつけていった(たどつていつた)。するど、山奥にはほこらがあり、その下でうなり声がしていた。その話を聞いたところ、ヘビの親は「てめえは畜生でありながら人間様に恋をするからこんな目にあつたのだ」という。するとそのヘビがいには、「おれはこれで死んでも後悔はない。おれの子どもは何千匹となくたねを宿しているから思い残すことはない。」といった。ヘビの親は「もし人間であるかぎり、薬をのまされたら、たねはくだつてしまつだろう。子どもを流産させるには、川端にはえているショウブを酒の中にたてて、それを神様にそなえてから、その酒を娘にのませればくだるのだ」といった。それを聞いてきたので、早速その酒を娘にのせたら何千匹というヘビの子を生みだした。それで娘は快復した。そのため五月五日のショウブ酒は男も女も飲むようになったという。(大久保)

八日節供 (八日)

鯉ノボリや人形は二十八日に出して飾り、八日にしまう。

節供の翌日を「節供カラ」といつて遊ぶ。(六千石)

八日はからざお節供、この日はなにかごちそうをつくつて祝う。これからさをおをします。(大久保)

六 月

麦の刈り入れ

ニアガリボタ餅 麦を刈り入れて、脱穀して俵に入れた時にボタ餅を作つて祝う。(大原)

天氣祭り

長雨が続いた時には、麦わら束を一つずつ持ち寄って神社の拝殿前に山と積んで、燃やして天気を折った。(大原)

雨乞い

日でりが続くと、雨乞いをした。代表が赤城様(三夜沢の池の水)か椿名様(御師の家)へ行き、お水をもらって竹نبに入れ、途中止まらずに自転車でリレー式に運んで来た(途中止まつた所に雨が降るといふので)。水は馬のソソだらい(足を洗う盤台)の中に垂らして、村の人手でかき回しながら「サーンゲサンゲ 六根シヨウジヨウ」と唱えて、神主が抨む声に合わせる。ふんどし「一つのはだかで、興奮してくると手で水を回りの人にかけっこする。また、盤台を天王様の御輿にしばりつけて、狙いでもみこんだりした。

山の神の集会所に役員が寄つて、昼間も夜も休まずに太鼓をたたいて雨乞いをした。(一日も三日も、雨が降るまで続けた。(大原))

マンガアライ

マンガアライを田植が終るとやつた。オカマ様に最後に田植をした田の水口の苗を三束抜いてよく洗つて供えた。のどがつかえた時にオカマ様の穂でノドをなでると、つかえがとれる。(湯ノ入)

初なり

キュウリ キュウリの初ナリは天王様に上げないうちは食べられない。神棚へ上げて「天王様ニアゲマス」という。(六千石)
ナス 初ナスはクワの棒にさして、畠の真中にさして「お天道様ニアゲマス」という。(六千石)

天王様

むかしは、久宮の四天王様のお札をうけてきて、それを毎戸くばつた。伝染病が流行したときには、天王様のお宮をかついでむらの中をまわつた。このよくなことをしたのは、おはえて明治四十年に一回、その後三回(大正時代は一回)、昭和になつてからはやらなかつた。

天王様はキユウリが好きという。天王様はキユウリばたけにはいつて目をつけたので、自分の家のものにはキユウリをつくらせないという。キユウリの初物は天王様にあげるもの。キユウリはそのあとに食えとう。キユウリの初物をあげないうちに食べると、カツバに川へひきずりこまれるという。キユウリはカツバの好物である。(大久保)
天王様の祭りには、大原と組んで、タライ御輿を担いだこともある。(六千石)

七月

八丁ジメ(旧六月一日)

先を切つたものに、割つてはさむか又は、吊して村の入口に立てる。この世話は「年番」という部落の年中行事を一さい扱う人が旧七月に行なつた。(寺下)

八丁ジメは旧の六月一日に、村の入口三、四カ所に立てる。竹一本に繩を張り、シメカザリをさげる。(湯ノ入)

八丁ジメは旧六月一日にした。他村から悪病が入つて来ないようす。八丁ジメは七月一日にやる。旧六月一日にしていた。先達がお札を作つて、大通りの村の二カ所の入口の辻に立てた。悪病よけという。(湯ノ入)

八丁ジメは旧六月一日、今は七月一日にやる。八坂神社のお札を部落の境内に竹竿にシメ縄をはり、それをさげる。疫病神が入らないように。

テイシヤバ、山ノ神では今もしている。(湯ノ入)

七月一日、村の四方の境界に、八丁ジメを立てた。「八丁ジメを越えて、でけそこというな」と、よくいう。この日から七日までナナバンゲをやつた。新しい大麦のわらを燃した。終戦後は九分九厘、麦を作らなくなつたので、やらなくなつた。(西野)

八丁ジメは厄病神が入らないように、道の両端に竹を一本立てて、シメを張つた。「八丁ジメを越えて来たらしかりしろ」「八丁ジメを越えちやそんな話は通らないよ」といった。(山ノ神)

村境の道の両側へ籠竹一本立てて、シメ縄を張り、お札や弊東を付けて飾る。役員がする。「よそ者は八丁ジメを越えて来たら、おく威張るな」という。(六千石)

旧六月一日に八丁ジメをした。(大久保)

七晩ヶ

(七月一日～七日)

七晩ヶは七月一日から七日間、七夕までやつていた。門口で麦藁を燃やす。(湯ノ入)

七晩ヶは旧六月一日から七日まで、門口で麦藁の小束を燃す。消す時に「ケツにネブツができるないように」と唱える。

八丁ジメの日から始まる。麦藁のタバの頭を結わえ、スソをひろげてころばぬようにして燃やす。子供達は「七パンゲ、パンゲ、シリにネンブツができるな。頭にガンガサができるな」といて、火が燃えて灰になるまで尻をたたいた。(湯ノ入)

七晩ヶは七月一～七日で、祇園の前一週間は、夕方、カドで小麦わらをくびつて(束にして)、燃した。天王様にあげるかがり火だという。そのあと祇園祭りになる。(大原)

七晩ヶは旧六月一日～七日で、家のカドで、麦わらを束にして立てて燃

した。「七晩ヶ八晩ヶ オ尻ニネンブツデキンナ」と唱えて、火を消した。(六千石)

七晩ヶは旧六月一日より七日まで。子どもたちが村内をまわって、毎戸の門で薬束の火をもす。子どもたちは、鉢に大きな数珠を持ってまわり、三本辻に行くと、七まわりして「ナムアミダンブツ、ナムアミグ」などと唱えた。なお子どもたちは、門火をたきながら

「ナナバンゲ ヤバンゲ
ケツニネンブツデキンナ
アタマヘカサガヌケンナ」

などと唱えた。火を燃したあとへ線香をあげた。

旧六月一日から七日まで七晩ヶをした。各家ごとに、夕方からでムギワラの束を、「ケツにねんぶつできんな」といながらもやした。このあいだ、子どもたちは大きな数珠にそれぞれなわをしばつて、それを「十人ぐらの子どもがひっぱり、中にひとり子どもがはいつてかづぎ、もう一人がかねをたきながら「なんまいだ、なんまいだ」といながら、むら中の道を走るいた。このころは仕事がいそがしいので、子どもたちでやつた。辻へ行くと、かねをたきながら「なんまいだ、なんまいだ」といながら、七まわりまわつた。これは午後からはじめても半日ぐらいいはかつた。むらの上から下まで「キロほどあり、子どもたちは数珠をひっぱりながら上から下へとまわつた。この行事は終戦前まではやつていた。

ムギワラの束へは、夕方暗くなつてから火をつけた。
旧の六月の月は天王様の月といった。天王様はやくよけの神様で、悪い病いは天王様がよけてくれるといった。(大久保)

石 尊 様

セキゾン様を旧六月一日から盆の十五日までまつた。湯ノ入には王子山に一つあり、ワカレンの世話をあげた。各家ではアフリ

様をまつた。（湯ノ入）

半夏（二日）

ハンゲには田植をしない。ハンゲ様が笠をかぶって田植をしていて、風にあおられて八丁ジメにひつかかったので、この日に田植はしない。（湯ノ入）

赤城神社（十二日）

赤城のモチクイ 七月十二日に三夜沢の赤城神社の神主の家へ、餅米を一升背負って餅食いに行つた。一晩泊りで行つた。（湯ノ入）

お中元

お中元は、親と仲人のところへする。盆よりもつていくものとされている。日はとくにきまつていらない。お中元はいわば暑中見舞ということである。（大久保）

七夕（十七日）

七夕は七月十七日にする。赤飯がまんじゅうを作つた。

朝、里芋の葉の露を集めて短冊に歌を書いたりした。

「七夕のとうがどる船のかしの上に ならいぞつらき天の川
おせはしごれて渡りなれども 露の玉々年に待つ」

朝早く水あびに行く。髪を洗うと髪がきれいになる。

竹は川に流す。

七夕に雨が三粒でも降ればいい。

七夕にメズラ煙に入つてはいけない。疫病神がメズラ煙に隠れているから。又、七夕様が煙で縁結びをするから、じやまをしてはいけないと云う。

七夕に仕事をすると病気になる。（湯ノ入・台）



七夕の夜の仕事、地蔵堂境内に納めてある。（湯ノ入）

（丑木幸男 撮影）

七夕には七回水をあび

ろという。「ねぶつた流れ
ろ豆の葉はとまれ」と
いつて水をあびた。岡上

用水までいたた。
七夕の時に髪を洗うと

よい。

七夕は前は七月七日に、

今は七月十七日にする。
盆の一週間前にする。

七夕に墓掃除をする。

七夕に三粒でも雨が降
ればいいとも、七夕は荒
れ日ともいう。

この日のメズラ煙に入
ってはいけない。七夕様

がメズラ煙でいい話をし

てているのでじやまになるから。（湯ノ入）
芋つ葉の露を、硯ですつて、天の川、七夕などと書く。ゆで麩頭を作
る。山へ行つて、ネブタの木を取つて来て、お天道様のあがらないうち
に、川へ行つて、ねぶたかねえようつて、目をこすつて流した。十二
時過ぎれば、今日の分だつて、呼びつこして大勢で、おつかないのを我
慢して行つた。「七夕の日は、厄病神が、厄病をしょって来る」というの
で、朝草刈りにものいかない。「メズラ煙に入る、厄病神が生んでる
から、ちやならないねえ」という。当日は、三粒でも雨が降る方がいい。
悪い病がはやらないという。竹は川に流す。短冊はとつておいて、子ど
もに、「くさができた時に、短冊を焼いて、その灰を胡麻油でといてつけ
るとなおる。七夕に髪を洗うと、一年中よくおちる。」（三島）

筆に五色の紙。短冊・あみ・風船などをつけて立てる。短冊には、「七夕」・「天の川」などと書く。筆の下へ行って、露を浴びると頭が痛まない。ミズアビック（ねぶたの木）の葉を、川に流す。髪を洗うと、黒くなる。雨は降らない方がいい。（山ノ神）

七夕飾りは芋の露で墨をつて短冊に字を書いて竹の枝に付けて飾った。ネブタは付けなかった。うでまんじゅうを供えた。

七夕には十時前に髪を洗うとよく落ちる。

十時前にメズラ烟に行くと、七夕様が恋をしているので、入ってはいけない。その時に行くと病気になる。必要があるなら、前の晩方に行って取つておけという。

七夕様は女神で、雨が降ると天の神が溢れて、出会えない。会つと

よいことはないので、七夕には雨が降つた方がよい。（六千石）

七夕の日の午前中は家ごとに墓掃除をする。

七夕にはかぎり竹をたてる。女の子などはおかざりの前に机を出して、

新しい着物をその上におそなえしてから着ると、そのあとは、いい着物

をちよちよく着られるという。（大久保）

七夕の竹をスイカ畑に立てる。カラス除けになる。（大久保）

盆の墓掃除 七夕の日の午前中に、自分の家の墓掃除をする。この日

は、早く墓掃除をして、ゆっくり休めといった。（大久保）

カワツビタリ 盆前に餅をついて、川の端の橋のたもとあたりにお供

えをあげた。仏様がお客様に来るので。（台）

土用

土用念仏 土用の三日目から一週間やつた。集会所でやっていたが、

その前は薬師堂でやっていた。百万篇をやつた。老若男女を問わず四、五十人位集まつた。太平洋戦争中位までしていた。（湯ノ入）

土用の三日目にやる。村の人で好きな人が、大きな数珠でやる。地蔵山にお堂があり、十畳があつた。そこでやつた。その辺をリョウといつ

ていた。リョウ坊主という言葉を聞いたことがある。地蔵山の後に觀音山があり、そこでの觀音様が昔さかつたという。（滝ノ入）

土用念仏にはでかいじゅずを十二人ぐらいで廻した。（西野）

丑の日 丑湯といって、朝早く入りに行く。ウナギを食べる。（三島）

土用の丑の日にはウシユに行くべえじやねえかいといつて温泉に行く。（滝ノ入）

土用食 土用になると、灸をすえた。（三島）

豊湯 豊間風呂をたてて薬草をせんじて入れ、近所の人を呼んで風呂に入った。（六千石）

薬草取り 土用三ツ目にセンブリ・ゲンノ・シヨウコなどの薬草を取つて、陰干しにするとよい。（六千石）

トリ草といつて土用の湯に入れるときく。（滝ノ入）

三日目に百種の草をとつて湯に入れるときく。

梅干し 梅干しを「三日三晩ノ土用干シ」といつて、夜露にかけた方がよい。（六千石）

農休み（二十日）
（二十三日）



天王社 7月29日紙團祭でにぎわつた。（大原）
(開口正己撮影)

小麦が取れたので、うでまんじゅうを作つて食べ、仕事を休む（六千石）

天王様 紙團祭で天王様がにぎわつた。みこしを担いでねつた。（大原）

盆（二十三日）

盆の日取り 七月二十三日、八月十三日、八月二十四日、九月一日など、産業のやり方によって日取りが違つて来た。（六千石）

墓掃除 大体二十二日頃やる。今井イッケは七夕に、植木イッケは二十三日にやる。（湯ノ入）

盆棚 座敷に竹で四本の柱を作り、チガヤの繩に、杉の葉、色紙、高野山などの掛軸を下げ、盆花や白ユリをあげ、ご先祖様の位牌を盆棚に水鉢に水を入れそれにつけてミズハギで蓮の葉をたたき、水をひたす。（湯ノ入）

盆棚は竹を四本立ててチガヤの繩で囲い、棚を作つて新ござを敷き仏壇から位牌を移して置き、盆花や果物を供える。うどんをチガヤの繩に掛け、荷繩にするといふ。

迎え盆にかけておく。ナスで馬を作り、馬の餌としてナス・メズラを刻んで芋の葉に盛つて供える。（六千石）

カツモ（マコモ）で、方一尺ぐらゐの盆ござを作つてのせる。（大久保）

無縫仏 身内の者でなく、非業の死をした人で、



盆棚（組立式）下の段に無縫仏をまつる（大久保）
(井田安雄撮影)

誰もかまわない仏を、盆棚の下へまつる。芋つ葉の上に、カワラケ（土器）にばた餅をのせて供える。無縫仏の供え物は下げるものではない。盆送りの時に送り出す。（六千石）

ショウリョウ様は子供の神で、盆棚の下にまつる。カワラケに芋の葉を敷いて、供え物をのせて供えた。この供え物を食べると、連れて行かれという。（大原）

お盆のときに、そりょうさまを盆棚の下にまつた。古い盆花と今までつくったうま（これに盆花をさした）をかざした。ここにはばたもちを小さくつづってあげた（こちそうはかわらけにのせてあげた）。ごちらうは盆のうち三日間さげずににおいて、盆おくりのときに、カイドとか墓地へもつて行った。（大久保）

ルスンギョウ 盆棚に位牌を移して、あいだ仏壇の方に供えることをいう。（大久保）

生き盆 盆のいく日か前に、新しい嫁には、もらい方の親が、新しい着物（ろの着物・長じゅばんと着物）をつくるてやつて、里へやつた。このときもつて行くものは新粉（重箱に入れていく）。これでうどんをつくて食べてきただ。親の生きているうちは、嫁は里へ行ってこの行事をした。それを生き盆という。現在はやっていない。（大久保）

迎え盆 七月二十三日に長円寺からひき茶を貰つてくる「灯明を貰つたら道草を食わずに来う」と言われた。

盆棚を作りそれに位牌を出す。新盆は盆棚の脇に飾る。別に飾る家もある。盆棚の下にソーリョウ様を飾る。（湯ノ入）

盆には提灯を持っていく、お寺の仏壇から火をもらつてきて、家の燈明につける。盆棚の上は先祖様で、下は無縫仏である。（台）

盆はお墓へ鉢を叩いて迎えに行く。お寺で提灯に火をつけて戻る。昔は名入提灯だったが、今は「今晩は提灯」になつた。お寺でお茶漬子と、マツチを貰つて来る。茄子で馬を作る。メズラが馬のけーばになる。また巾の広いうどんを作つて、仏様の荷繩にする。盆棚の下に、おしおう

ろ様を飾る。「盆にやばた餅、昼間はうどん、夜は米の飯、とうなす汁よ」という歌の通りだつた。新盆の時は、「お静かなお盆様で、おめでとうございます」と、挨拶した。盆送りは「仏様がおそらく大事だから、早く送れや」と、あげたものを皆持つて送り出した。お盆だから、セミやトンボを殺すなどといふ。(三島)

お盆の二十三日に墓の掃除をし、盆棚を作る。チガヤで結う。しようと様を下に飾る。金運を飾る。仏様のよい縁に、ひもかわをかけよう。盆迎えには提灯を持って行く。お墓まで行き、お香をあげ、「おじいさん、おばあさん迎えに来ましたから、おぶつてきます」って格好した。送る時は、お昼食つてから、「早く行かないと、行くとこへ行きつけない」といつて、早く行く。うちによつては、おそいうちもある。益様にあげたものは食べる。しようう様のは、かいどうに出す。益が来る時分に死ぬと、シラジ(摺鉢)をかぶせる。「お客に行くのに、こつちに来る」つて閻魔様になぐられるから。新盆見舞には、「うどん三、四把を持ってて、結論なお盆様でござります、新盆見舞に来ました」という。

(山ノ神)

盆迎えは提灯持つて寺へ火薙いに行き、墓場へ回つて、線香とあかりを十三本ずつ供える。線香の煙に乗せてお盆棚を連れてくる。あかりを家の盆棚につける。(大原)

盆迎えは十三日に寺へ盆迎えに行き、灯りをもらつて来る。迎え火はたかない。(六千石)

盆前に、荒物屋でゴザ・提灯・盆花などを買って用意しておく。十三日に盆棚をつくる。盆棚に新竹を柱にし、チガヤでなわをつくり、まわりにしめをはつた。山からとつてきた花と、買つてきたつくりばなをかざる。前の年にかざつたつくりばなは盆おくりのときにナスのウマにさして、幕へもつていく。

盆アチ(盆むかえ)にお寺へ行く。お寺ではひき茶をくれる。それを棚にそなえておく。夕方、提灯(弓張提灯、家紋がついている)をもつ

てお墓へ行く。主人が行くのがふつうだが、子どもが行く場合もある。お墓で火をもやして、その火を提灯につけてくる。その火を盆棚にうつす。むかしは門火をたいだといふ。現在ではたかない。

この日から「ちそうをつくつて仏様におそなえした」。

ソウリヨウ様は盆棚の下にまつられた。ソウリヨウ様というの子どの仏様といふ。位牌を盆棚にうつしてまつてあるので、仏壇はからになつてゐるが、それを留守神様といつて、そこへも「ちそうをあげた」。

(大久保)

ヒキ茶　迎え盆の時に寺でヒキ茶をよこす。このお茶を入れて盆棚に供する。盆送りの時、仏様はこのお茶を飲んで帰るので、送った時にお墓へする。

三度三度上げた物はどこに棄てもよい。お供の大のこととはいわない。

(六千石)

仏の野回り　田畠を先祖様にみてもらう。田畠をきれいにしてみてもらう。先祖の位牌を背負つていく。(台)

新盆　盆棚の一段下にまつる。



新盆棚　外側に新盆提灯を吊るす
(大久保) (井田安雄 撮影)

人が線香あげに来るから出られないのはあたりまえだが、墓にいるとかは言わない。(湯ノ入)

新盆「さあいはするもんじやない。近い親類が行つたり来たりする位。

(湯ノ入)

新盆の時、「お静かなお盆でおめでとうございます、結構なお盆様で」といつて挨拶する。(三島)

新盆は別に新盆棚を作り新盆提灯を飾る。寺へ米一升持つて「盆アチ」に行く。(六千石)

新盆のときには、そつりよつ様のよつた棚を、盆棚の下につくる。これは家によつて多少のちがいはある。

新盆見舞には、近所の人や身内の人人が来る。このときのあいさつは

「〇〇新盆で誠におさびしうござります。(くやみ申しあげます)」

という。新盆見舞には、女衆が行くのが多い。(大久保)

盆おくり 十六日の午後、ナスのウマをつくり、ウマのえさとして、ナスをサイの目にきつて、盆むかえのときにお寺からもらつてきたひき茶のこりをかけて、ダンゴやウマと一緒に墓へもつて行つた。



盆送り 竹、ハナ、水、線香を持って墓地へ行く。(大久保) (井田安雄 撮影)



盆送りの馬 ナスの馬を、カツモのござにのせてカドへ出す。(山ノ神)
(朝岡紀三男 撮影)



八木節祭 (中原)
(阿部 孝 撮影)

盆踊り歌 「朝ハボタ餅、
昼間ハルス 夜ハ南京飯
(米ノ飯) トウナス汁ヨ。」
(大原)

十五のつらよごし 盆
十六日の晩に、盆様をおくつて、盆棚をかたずけてから、女衆が五目めしをつくつた。これを「十王のつら

盆おくりは、墓地が近い場合には、墓までおくつて行くが、遠い場合には、家の門先までおくつて行く。おくつて行くときには、盆棚につかた竹も一緒にもつて行く。

門先でムギワラをもやして門火をたいだ。この火は盆棚から提灯にうつしてきたもの。門火をたいてから墓へ仏様をおくつて行った。家族のもがおくつて行った。(大久保)

送り盆にはメシコ(うどん)をぶつて、しょい繩としてナスの馬に引つかけて、送り出した。(大原)

盆中の食事 植木イッケでは盆中の食事は次のように決まっている。

二十三日 アベカワ 二十四日 アンコロ餅

二十五日 ボタモチ(甘い) 二十六日 キナコのボタモチ

なお、昼はうどん、夜は御飯。

二十三日の餅つきの音を聞いて、ご先祖様が来るといふ。(湯ノ入)

盆おどりの唄の文句に、「朝はばたもち、お昼はうどん、夜は米のめし、トウナス汁よ」とい

うのがあるが、このように、朝はばたもちをつくつてあげ、昼はうどん、夜はうどんをつくるてあげる。

また、「盆のばたもち、嫁と姑の仲なおり」ということばもある。
盆中の盆のうどんを「ヒルバテ」という。(大久保)

よこし」といった。これで盆は終わりだという意味であるという。(大久保)

八月

カマップタ(旧七月一日)

カマップタ 旧七月一日。うでまんじゅうを作る。カツバにひかれるから水をあびるなど。(湯ノ入)

地獄の蓋を開ける日(六千石) かわらけ 盖の口開けから盆に死ぬと、「地獄からお客に来るの」というに行く」というので、かわらけを頭にのせてやる。(三島)

盆や彼岸に死んだ人には、スリ鉢をかぶせて埋めた。わけは不明だが、後生がいいともいう。また、これだけの寿命だともいう。(大原)

焼キ餅 粉をこねて握って、平たく丸くして、ネギやニラなどを入れて焼き餅を作り、ホウロクで焼く。ここは、焼き餅の産地だった。(六千石)

八海さん

竿の先に、蠟燭を立てるとき、向う(越後の八海さん)から見えた。(西野)

九月

八朔(旧八月一日)

八朔の節供 旧八月一日に赤飯を炊く。新嫁がショウガを持つて里帰

りをする。「ショウガネエ嫁ダ」という意味である。

里から帰る時に箕を持たせる「みこもるよう」といふ意味である。ショウガの節供ともい。(湯ノ入)

八朔には早く身ごもるよう、箕をやる。「ますます繁昌」というので、一升杵を貰う。(山ノ神)

ショウガ 嫁はショウガを持って、実家の親の所へ行く。親が生きているうちに行き、タナモノガエシに、箕やマスをもらってくる。(六千石) タナモノガエシ 嫁に行つた年のタナモノガエシは一合マス、二年めは一斗マス、三年めは一斗マスと、だんだん大きくなり、箕を返すようになる。

「一生マスマス、ゴハンジョウ(繁盛)」などという。(六千石)

旧八月一日を八朔の節供とい。嫁はショウガと赤飯をもって里へお客様を行つた。里からはおかえしに箕をよこした。これをタナモノガエシ

という。(大久保)

二百十日(一日)

あまり行事はない。ちょっととした「ちそくをつくる程度。(大久保)

十五夜(八月十五日)

供え物 オマルという玄米の粉の団子を作り、供える。

十五夜に雨が降ると麦がはずれる。

十五夜に雲が降ると麦がはずれる。(湯ノ入)

十五夜には柿・栗を箕に入れてしんぜる。下げるのをおつとばさざれても、いつの間にかなくなる。下げられると、麦が当る。(西野)

コガネガヤ 三島神社の境内に生えているのを、十五夜の時刈つて来て、しんぜる。小遣いに不自由しない。(三島)

八月十五日・九月十三日には、オマワシ(団子)を作る。野菜を供え、子どもの時は、オマワシを盗むのを、オンカニやつた。盗まれた方



コガネガヤ（三島）（上野 勇 撮影）



神棚とコガネガヤ（三島）（朝岡紀三男 撮影）

あれど、十三夜に豊りなし。（山ノ神）
オテマルといふ米の粉のダンゴを十五個と、生グリ、カキ、ナシ、り
ンゴ、ススキ十五本（または五本）をお月様に供える。お明かりとオミ
キを上げる。子供が竹の棒の先に針を付けて、供えた物を下げに回る。
取られた家は縁起がよいといふ。

蚕が当るよう供え物を人に盗ませる。（大原）

縁側に机を出して、その上に箕をのせて、その中にそなえものをなら
べる。スキをとつて来て十五本あげる。そなえるものはサツマイモ、
大根・里芋・カキ・クリ・ブドウ・ナシなど。それにおまるを十五個あ
げる（白米一升で十五のおまるをつくるのがふつう）。おまるの代りにふ
かしまんじゅうをつくってあげる家もある。
永田家ではオテマルでなく、うどんを供える。

秋 の 彼 岸

春の彼岸と太体同じ。墓参をする。

秋の彼岸は忙しいので、もしばたもちが出来なければ、里芋をとつて
煮て仏様にあげればいいという。

里諺に「彼岸ばたもち食いたくないが、せめて半日休みたい」という
のがある。

親がなくなつていれば、よそへ嫁いでいるものも里へ墓参りに行く。
(大久保)

十 三 月

十三夜（旧九月十三日）

スキ ススキを三本供えるほかは、十五夜と同じように供え物をす
る。

スキを十三本あげる。そなえものは十五夜と同じようなもの。この
ときも、子どもがそなえものをさげに来る。これも公認の行事であった。
片見月をするものでないといい、十五夜をすれば、必ず十三夜もある。

十五夜には、近所の子どもが竹の棒の先に釘をつけて、そなええた果物
などをさげにくる。子どもにさげてもらうと、お月様がそなえたものを
受けとてくれたといって、縁起がいい。カイコがあたるという。

「十五夜に豊りあれども、十三夜に豊れば小麦が不作」という。十五夜に豊れ
ば大麦が豊作。十三夜に豊れば小麦が不作という。

十五夜が彼岸の日とかさなると、十五夜はとりやめにする家が多い。
十五夜をべつの日にやりなおす家もある。（大久保）

のであるという。（大久保）

箕 十五夜・十三夜の供え物のウデマンジュウや、果物は箕に入れて供える。（六千石）

片見月 十五夜をお客に行った先で迎えると、十三夜にも行ってよそで迎えねばならない。「片見月ハスルナ」といって、嫌がられる。（六千石）

芋 「名主ノアトハ芋畠」といって、屋敷に芋をつくるものではない。（六千石）

オ ク ナ チ

秋祭り 旧九月二十九日は、今は十月十七日に、母衣輪神社でかま番が世話を甘酒を出した。（西野）

中九日に、神社で一晩中焚火をしてこもった。誰が赤飯を早くあげに来るか待っていた。（山ノ神）

以前は十一月二十三日に、家の神棚を掃除して古いお札をまとめ、神明宮の白山様の前に持ち寄って燃やした。家ごとにマキを一、二束ず軒下にしておくと、青年が集めて来て、山に積んで燃やした。鎮守

の境内のくばんど（くば地）で一晩中燃やすが、青年たちがしまいには、そこらの家の農道具などを持ち出して燃したり、マキザボンに火をつけでお互いに投げ合つたりした。火の神祭りだった。（大原）

幕（旧十一月二十五日、後に十月十五日）に神明宮境内の白山様の前でオタキアゲをした。このときは宿の家々から薪を一把持寄り、若衆が世話を燃した。（大原七区）

オクンチは旧九月九日、嫁が実家へお客様に行く日で、アキアゲとオクンチをかけてお客様に行く。（六千石）

鎮守の秋祭り

ヒヨツトコ踊り 明治時代まで、鎮守の祭りには神イサメのため神樂

をした。山田郡韭川村沖野郷から師匠を頼んで習った。オカメ・ヒヨツ

トコ・笛吹キ各一、太鼓二で構成し、オカメは鈴、ヒヨツトコは紙を持って、豊作踊りをした耕作のまわしをした。「信田ノ森ノドラ狐」や、「カツバニケツヲ抜カレタマネ」なども演じた。（大原）

秋葉神社 戰削はオクンチのお祭りがにぎわった。たき木を集めて火をどんどん燃して、オコワ（赤飯）を上げて来るの待ち、下げて食べたりした。燃え盛るたき木を取って投げ合いをした。（大原）

ドンドン焼キ（旧九月九日） 鎮守（赤城神社・秋葉神社を合祀）のオクンチ（秋祭り）には、境内を掃除して集めた木の枝を一晩中燃して、回りで飲み食いしてどんちゃん騒ぎをした。その火で柿の実を焼いて食べた。（六千石）

旧九月十九日の中のクンチである。子どもたちは車をひっぱってモシンキをもらい集め、それをたいて一晩中起きていた。早朝村の人が赤飯を供えに来るので、それを貰つて食べた。村の人も、明るくなつてから供えに行つたのは貰い手がなくなる、といつて、早く行つた。

旧九月十九日（大正九年から十一月二十三日）にオタキアゲをした。中グンチ（旧九月十九日）に、赤城神社の境内でオタキアゲをした。

子どもが中心になつて燈籠を立てた。毎戸、小さい燈籠をつけた。十八日昼間、子どもたちは、大八車（むかしのこと）をひいて、各戸をまわつて「もし本をくんねえかい」といながら、大きな根っこなどをもらつた。むかしは開墾したので、根っこがあつた。十八日（二十二日）の夜にもらいあつめたもし本を、神社の境内に積んでもやした。十九日（二十三日）になると、早朝にむらの人たちが赤飯をもつて神社にお参りに来た。早くお参りに来たほうが縁起がいいといった。早ければカイコがあたるといった。子どもたちは一晩中火にあたっていたが、お参りに来た人をみて、どこの家が赤飯をもつてきたといつたりした。寝たいものは、神社の拌殿で寝ていた。赤飯は神社の末社にまでおなえした。

いりに来た人にその中に赤飯をいれてもらって、あとで食べた。

神様にあげる赤飯は、ノラボウズ（乞食）がやつてきて、さげて食べた。これは戦前の話である。（大久保）

十一月

神無月（旧十月）

神立ち 十月一日に神様が出雲に行く。留守としてオカマ様、エビス様は行かずには残る。（湯ノ入）

十月一日に八百万の神々は出雲へ神立ちをする。お釜様は子供が多いので行けずに、留守居をしている。だからオカマの団子はタント（たくさん）ある方がいい。（湯ノ入）

十月は神様が出雲へ縁結びに行くので、娘たちはよい旦那と結ばれるようだ。朝早く暗いうちに神社へお参りしてよく頼んだ。オサゴ（米）を紙に包んで持て行き供える。（大原）

オ神ノオタチで神様が出雲国へ出かける日には、「餅を神棚や床の間に供える。神社へお参りはしない」。（六千石）

九日夜 蔵塚の田んぼでは、九日に餅をつく。イノコ餅というのも聞いたことがある。畠方では十日に祭る。（大原）

十日夜 九日にする。大原より東が九日、西が十日にする。

朝、餅をついて藁をすくしたもの（俵）を束ねてその中に入れて神棚にあけておく。神様がそれを出雲へかつて行く。翌日さげて餅は食べ、俵は堆肥に入れたりして処分する。イノコモチとはいわぬ。子供がわら鉄砲を叩きながら「十日夜わら鉄砲・朝さりそばに昼团子、ようめし食つちやひばたけ」と歌う。（台）十日夜に子供がワラデッボーを叩きまわる。餅をついて倉、物置にある米俵の上に一升枡にイノコ餅を月の数だけ（ふだんは十二）、閏月のあ

る年は十三）供える。（瀧ノ入）

十日夜は十月九日にする。庭先でワラズトを子供達が叩きまわった。モグラが出ないようとも、大根が抜け出す、大根のトシリとも言う。

ワラズトを叩くのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の前祝いにやつたのが始まりだという。

また、この日に正月のお供えの下位の大きさの餅を稻わらのツツコに入れて、大神宮様に供える。月々の餅といい、普通は十一、うるう年は十三個供える。イノコロモチという。（湯ノ入）

わら鉄砲 わら鉄砲の中に芋がらを入れてつくとトカントカン音がいい。「十日夜のわら鉄砲、よつめし食つちやひばたけ」といつて、うちのまわりを叩いて廻ると、もぐらがもたねえ餅をついて、餅を刈つて作ったニユウの上に、お供えをあげる。（三島）

奥羽征伐の時、八幡太郎が九日に通つた。それを餅ついて祝つてやるんで、九日にやる。「朝めしそばに昼团子、大めし食つてぶつばたけ」つて、わら鉄砲の中に、音がいいように、芋がらを入れて、叩いた。その餅を早くつけば、子どもの縁組が早い。おそらくつけばおそい。餅切り唄のいそがしい時なので、なかなかつけない。子どもができた時は一番早い。

十日夜の餅が一番うまい。（西野）

わら鉄砲の中に芋がらを入れ、「十日夜のわら鉄砲、餅食つちやぶつばたけ」と唱えながら、うちのまわりを叩いて廻る。もぐらがもぐらない。

わら鉄砲は、叩き終れば捨てる。餅をつく。からみ餅を作る。初餅でうまい。早くつくと縁づくのが早い。（山ノ神）

わら鉄砲は、ワラを束ねて作り、芋がらを入れてよい音が出来るようにして、子供が毎戸の地面をたたいて回る。モグラがもぐらない、ネズミの穴をふさぐ行事だという。（大原）

わら鉄砲はワラを束ねて作り、地面をたたくとモグラが地をもぐらないうといふ。たきながら唱えることば。「十日夜ワラデッボウ 夕飯食ツチヤブツタケ」（六千石）

十日夜の餅 子供が生まれた年の十日夜には、早く餅をつくと、その子が早く結婚できるといふ。

一白餅をついて、ひろげてそのまま神様に供えたり、ワラツトッコの一方をしばりワラを広げた上に餅をのせて、糞に上げて供えたりした。神様が餅を持って行き易いようにツツコにのせて供える。十日夜の餅は早くつくと、早く嫁がもらえるといふ。

廊下にお明かりをつけ餅を供える。(大原) 夕方餅をついて、お供え餅を一つこえて、オシラキに半紙を敷いてのせ、床の間に供える。あん餅を取って糞に入れて供える家もある。庚申様の餅だという。庚申様は百姓の神である。

若い者のいる家は、十日夜の餅を早くつけ、遅くつくと方々で餅の音がするので、神様がアリヤコリヤとなつて、よい縁組ができるといふ。

(六千石・大久保)

十日夜に供えた餅は若い者にくれら、早く縁組ができるといふ。(六千石) 十日夜には縁組み餅として、米と糀の餅をつく。出雲の神が縁組みをしてくれるので、早く舞をつかないといい縁組みができないといふ。子供が初めての時はとくに夕方早くつくようにする。お供え餅を十二個作つて膳にのせ、神棚に供える。大根の年取りなので、大根を一本こいで添える。

十日夜の餅は、カエルが背負つて出雲へもつて行くといふ。あんななしのおそなえ餅を十二っこしらえて、そのほかに大きい餅を一つつくつて、一升ますに入れて、大神宮様にあげた。(大久保)

大根の年取り 十日夜に大根は供えないが、「大根の年取り」といって、この日を過ぎると大根取りが始まる。ワラデッポウの音を聞けば、大根が首を持ちあげるといふ。(大原) 二又大根があると、八幡様へ上げるといふ。「八幡様へ上げマス」と名ざして、神棚へ供える。(六千石)

赤城神社 (秋不定日、旧十月十日ごろ) 取り入れが終ると、豊作

の御札に三夜沢の赤城様へ餅食いに出かけた。新米一升とアズキを持つていくと、神社でふかして餅についてくれた。アズキも水のせいか短時間で煮えた。そこで餅をついて丸めて食べる。湯ノ沢の水はせっけんを使わないので汚れがよく落ちた。(大原)

薬師様 (十二日)

十二日が薬師様の縁日で、十一月は終り薬師、桔薬師でとくにさかつた。貨機も公休で、オンカデ(公然と)遊びに行く。縁結びの「利益があつた」(大原)

七五三 (十五日)

七つの子に着物を作つたが、大尽子だけだった。昔は今のように派手にはしなかった。(六千石)

七五三の行事は、最近のはやりもんである。むかし、女の子は七才になると、振袖を作つてもらつて、神社へお参りに行つた。男の子は五才になると、「はかま着」といつて、はかまを着る行事をする家もあつた。

旧の十一月十五日には、はかまをこしらえてやつた。帯ときは、大安の月と、大安の日といつて、十一月十五日にした。(大久保)

えびす講 (二十日)

十月は百姓の恵比寿講、正月は商人の恵比寿で、うんと祝つた。桐生、太田・足利のお恵比寿様へ行つた。(三島)

恵比寿講には桐生・太田・足利のどちらかへ行く。太田はのぼるからいいといふ。秋刀魚をあける。けんちん汁、お出しを作る。俵がタント(たくさん)とれるように、油揚しの大さきのを作る。(山ノ神)

ネズフサゲ

麦まきが終ると、餅やばた餅を作つて祝う。ネズミの穴をふさぐとい

うが、畠へは別に供えない。（大原）

アキアゲ

稲あげ、麦まきが終ると、嫁夫婦はボタ餅を重箱に詰めて、実家の親もとへ届ける。（大原）

庚申待（春秋一回）

カマ番の家へ米を持ち寄り飲み食いした。旧家の屋敷内には古い庚申塔があった。元禄十四年銘の庚申塔が小林源作家にある。（六千石）

二十二夜様

二十二夜様が福田たけちやんちにあった。力石に若い衆がかつきっこして、腸捻転で死んだ。

二十二夜様には好きな女の友だち同志、五六人集る。腹に子があると軽くすむ。お灯明とオマワシ（団子）をあげた。（西野）

二十三夜様 三夜様に仕事をすると、医者の薬札になるって、夜なべを休む。みんなと会つて話をするのが楽しみだった。三夜様の月があがるまで起きていて拌む。（西野）

オカマ様（旧十月二十六日）

旧十月（十一月）は神様が出雲國（高天原ともいう）へ行くので、カマドの神が留守を守る。そこで「オカマノダング」（オカマノルスタンゴ）を作つて供えた。

「キヨウハオカマノダングノ日、尻ツタクリゴ用心」といつて、追っかけっこした。（六千石）

十二月

神迎え（旧十一月一日）

オ神ノオ拂り 神様が出雲國からお拂りになるので、朝早くお迎えに行く。いい旦那が見付かたかなと期待する。（大原）

オ神ノオ拂りで神様が出雲國から拂るので、ご飯を神棚や茶の間へ供える。（六千石）

神無月には結婚式はやらない。神様が出雲へ行つて留守だからやらないという。（大久保）

おつきは大神官様のお札が来た時、ぼた餅を作る。（山ノ神）

稻荷祭り（旧十一月十五日）

お仮屋 十日、二十日、または午の日に祭る。カヤでお仮屋をつくり（今は瓦屋根が多い）、赤飯、トウフ、頭付の魚、油揚を供えて切り火をする。



星敷稻荷（六千石）

（開口正己 撮影）

する。早く下げる方がよいので、一旦下げてから、また取り替えて上げるともいう。

お仮屋をカヤで作って祭る。

赤飯、油揚、一丁ドウフを供えて、火打石で切り火をした（今はマツチで火をつける）。その後、後をふり向かないで帰ってくる。供えた物は早く下げる方がよい。（大原）

稻荷様のオ仮屋を作り替えて祭る。わら宮の方が石宮よりよいので、石宮の家でもうの上にわらの屋根を作りかえてやる。毎年作り替える方がよいといふ。（六千石）

屋敷神 稲荷様は屋敷神とも家の氏神ともいふ。祭日は十一月であるが、イッケによつて稲荷祭りの日はちがう。清水一家は十一月十五日、平沼一家は十一月二十一日。稲荷様のほかに若宮八幡をまつっている家もある。

稻荷祭りのときには、毎年新しいカヤかワラでお宮を作りかえる。稲荷祭りのときの供えものは、赤飯・あぶらげ・豆腐（すみどうふといつて、角をおとして、その角の部分をお供えする。一社につき二コずつあげる）、尾頭付など。お供えしたものは、さげてもらったほうがいいといふ。翌朝、稻荷様のところへ行つてみて、供え物が残つていると、不思

議なことがあるという。

旧十一月七日が稲荷祭りで、オヒマ子をする。赤飯に頭付の魚をそえて、稻荷様に供える。（大久保）

油祝い 稲荷様のお仮屋を建てかえて、油揚を煮て、赤飯と共に進せて祝う。（六千石）

ツジユウダコ（旧十一月三十日）

カビタリ餅の前の晩にツジユウダコを作る。秋の干し物をした時にこぼれたモミを集めて置き、まとめて洗つて粉にひき、ダンゴにしたもので、五個くらいをお神の茶碗に入れて神様に供えてから食べる。（大久保）

カワツビタリ 十二月十八日頃の卯（か）の日から一週間、明神様の川べりで行をする。しみる時で風が吹いて寒かった。

明神様は気味の悪い娘を持っているのでするという。（滝ノ入）

カビタリ餅は十二月一日、餅をつき川へ流す。川神様にあげる。（三島）

カビタリ餅は十二月一日は、水難に会わないよう餅をつく。（山ノ神）

一日の朝、カビタリ餅をつく。川にとびこまないためという。旧十二月一日は川びたり餅。餅を水がめに入れて凍らせる。夏になつて食べれば、氷を食べたのと同じで、はやりやまいにかかるないという。ここでは川がないので、水がめの中に餅をあげる。これが川びたり餅である。これはあとさげて、その年のうちに食べてしまう。（大久保）

コト八日（八日）

ヒイラギ 十月八日のコト八日に格をトボロにさす。籠、ざるは立てない。カバンを下げる鬼（かけ取り）が来る。（滝ノ入）

竹竿に鎌を立て、メカゴの中に入れて吊るした。いわれは不明。カドにヒイラギを植えると金が入つてくるという。（大原）

竹にメカイを付け、ヒイラギを入れて庭先に立てた。また、ヒイラ



屋敷稲荷と雷電木（三島）
(朝岡紀三男 撮影)

ギを軒下に三本さした。「水も鳴らすなコト八日」といって、鬼除けをし

た。(大原)

旧十二月八日は師走八日、この日赤飯をふかして食べた。また、ざる(メカイ)にヒイラギをさして、庭木に結びつけておいた。鬼がこれを見て、メカイの中にお金を入れて逃げて行くという。この日には、はきものを外に出して置くと鬼がそのはきものに判を出していく。判をおされたはきものをはくと、病気になるという。そのために、この日は、子どもにはきものをかたづけさせた。(大久保)

すすはき(旧十二月十三日)

すす竹 竹ぼうきと同じようだが、竹の葉をとらないですす竹をつくつて、これですすはらいをした。

一番先にかまどのかぎ竹のところをはらった。明きの方に向って三回はきおろしてからほかのところのすすはらいをした。

神棚などにかぎつてあるお札はがして簾の中に入れて、べつのところにうつしておく。すすはきが終つてから一番先に、家の中に入れるのが大神宮様。その後に仏様を入れる。そのあとはほかのものをとり入れる。

この日の夜には白いごはんをして、腹一杯いたいた。(大久保)

すすはらいのときには、仏様は出さない。死人がであるという。盆・彼岸のとき以外は仏様は動かさない(家から外へ出さない)。(中原)すすはらいは二十五日すぎ、餅つき前にした。(三島)

冬 至(二十一日)

冬至ゴンニヤク 冬至トウナスを四つ前に食べると、中氣にならない。

ユズ湯をたてる。ユズには、米ユズと葉ユズとあり肌が違う。米ユズは夏蜜柑の肌のように、つるつるしている。ユズは馬鹿で、十八年たなないとならない。毎年団子をこしらえて、つっさしてやらないと、なるの

を忘れちやう。(三島)

トウナス 冬至にはトウナスを食べると中氣にならない。また、コンニャクを食べるといふと中氣にならないともいう。四つ前(午前十時前)に食べる方がよい。(六千石)

冬至には、コンニャクとトウナスを食べた。コンニャクは、胃の中で未消化でたまっている砂を払うといふ。トウナスは、冬至トウナスといって、必ず食べた。これはやはり病いにかかるためといふ。(大久保)

大 师 ガ ユ

知らない。(大久保)

歳 暮

歳暮はジョウヤ(地親、地主)様へ、砂糖や塩引き魚を贈り届けた。(六千石)

お歳暮は、親が生きているうちはするものだといわれている。暮の二十日ごろからもって行つた。持つて行つたものはサケ(シャケ)が多かつた。サケの尾のところにのしをつけてもつて行つた。また、仲人のところへは三年間ぐらいいお歳暮をもつて行つた。(大久保)

餅 つ き

餅つき 暮の二十八日に大体ついた。多い家では二斗以上もついた。白の下に墨を十文字にしてついた。白が動かないようしくのだという。

つき終ると台所に入れてシメ飾りをする。若水を汲む手桶もシメ飾りをする。臼を洗った水を家のまわりにまくと、長虫が入らない。

町田イツケは以前はついていたが、今はつかない。代りに三十日には餅をつく。餅は家でつかなければいい。よそへ行ってつくるのならかまわないとならない。

昔、女シが手がわりをしていてその手をつかれたので、餅をつかなくなつたといふ。

室田イツケでも餅をつかない。代りに赤飯をたく。餅は三月節供までつかない。(湯ノ入)

餅つきは暮の二十八日か三十日につく。「二十九日にはつかない。白の下に藁を十文字にする。臼が動かないようにする為だ」という。キタモトヒガシモトにする(藁の根を北と東に向ける)。(湯ノ入)

ひといろ餅はつかない。粟餅を作らなければ、色粉を入れて赤くする。(西野)

餅つきは十二月二十八日、一本杵でつく。朝の三時頃からつく。早く始めて、早くおやさないと、娘が売れ残る。(山ノ神)

白の下にわらを十文字に敷いて、一本杵や三本杵で餅をつく。(六千石)暮の餅つきは二十八日ごろからするが、二十九日には、苦をかきねるといつていやがる。早い家では、二十六日あたりからつく。(大久保)

正月飾り(三十日)

一夜飾りをしないで、三十日に餅つきしながら飾り物を作る。

ゴボウジメ

床の間へ飾る。

ツルの形 年神棚へ向かい合わせて飾り、脚を棚にしばりつけて歩く形にした。

外飾り 外の縄荷様や門松に飾る。その他、エビス・猿・水がめ・荒神(カマド神)・便所・井戸などにもシメを飾る。(六千石)。

オシメ 松・ミカン・ゴマメ・コブ巻き・紙の弊束等を、オシメを上げた所へさしておく。(六千石)

お松迎え 大尽の持ち山の松を譲つてもらい、三階松を伐つてリヤカーにのせて、売りに行つた。五、六軒売れれば、もとが取れた。(大原) 蕃市 十二月二十六日に、大原の学校の西あたりに蕃市がたつた。この辺の人々は、そこへ正月のおかげりにつかうものを買いに行つた。(二)

で第一番に買つのがたな板(正月棚)。これは、ナラの木で、ふつうの薪ぐらの長さで、巾は三、四すくらい。三枚板と五枚板とあつた。これを組買つた。これに箸のようにな長い一本の棒がついてきた。これを板の下にして、わなをつかつてたな板をいかだのようによじらん。二つのあんだ板は六尺長さの棚の上のせ、その棚を座敷につるした。

幕市で買ったのは、一家によつて多少のちがいがあるが、シラキ(さら)・つづけ(瀬戸家ではこれを十コ買つ)・シヤケ・お勝手道具・食料品などである。

十二月二十五日が松むかえ。うちの山へ行ってお松をとつてきた。

門松はイツケによつてちがいがある。清水・小暮・久保田・瀬戸家は松に竹、永田家は松とナラをつかう。(大久保)

風の神送り(大晦日)

風の神送り 十一月三十一日にする。サン番がさん儀にシメ繩をはつて、弊束を真中に立てて「風の神送り」と書いた旗を立てて、各家をまわる。村人はおさこを紙に包んでそれで体中をなでて儀にのせる。最後に村境の大川に捨てる。

(吉)

風の神送りは十二月二十八、九日にする。

儀に「風の神送り」と書いた紙の旗四本を立てて、竹の棒をさしてサシ番がかつぎ、「風の神送りだ」と書いた旗を立てて、各家をまわる。村人は自分の家の前に来ると、おさこを包んだ紙で体中をなでて、それを儀にあげる。最後に村境の淋しい所にある捨て場に捨ててくる。

この日に八丁ジメも村境に立てた。(湯ノ入)

風の神送りは大晦日に部落の祭りとしてする。儀ベシに竹を差し、中間に弊束と「風の神送り」と書いた旗を立て、子供達がそれをかつぎ、糸をたきながら部落中をまわる。「風の神送りだよ。」といながら全戸をまわる。各家では儀べしに額をこすりつけたり、子供に錢をやる。

最後は村はずれの拾て場——三本辻——に送り出す。(湯ノ入)

大晦日(三十一日)

ソバ 夜、風呂に入つてから、ソバを食べる。また、元日のソバ縁起の家では、ソバを作つて置く。(六千石)

ミソカバラ 借金を大晦日にはすべて払つておく。年取りの豆を焼きながら、キクガラ・ナスガラをもした。「イイコトキクガラ、借金ナスガラ」という。(六千石)

大晦日にすすはらいをした。(湯ノ入)

餅 三十日についた餅を切つておく。(六千石)

ナスガラ・キクガラ 大晦日にイロリで「借金ナスガラ・良イコトキクガラ」といって、ナスガラとキクガラを燃す。(大原)

民 俗 知 識

一、禁 忌

忌まれる日

大原二区では、正月の十五日までは、餅をつかない。昔餅つきの時に、まちがつて女の頭をついてしまったからだという。この部落では、三ヶ月の間、蕎麦を打つて食つならわしになつてゐるが、これは、飢饉の時に蕎麦だけはよくとれて、それで命をつないだから、三ヶ月の間、蕎麦を食うのだという。(大原)

十二月三十一日につく餅は、一夜餅といい、この日に餅をついてはいけない。

正月十五日に、針を使つてはならない。この日は針供養の日である。七夕の日に機を織つてはならない。この日は、一日機織を休み、山からネブタの木を伐つて来て、「ネブタ流れれ、豆の木はとまれ」と唱えながら川へ流す。

土用中に土をいじるものではない。土荒神様のいかりにふれて、病気になる。

旅へ出て、七日目に帰つて来てはならない。

寅の日に葬式を出してはいけない。死人が千里行つて千里もどつて来る。同じ理由で、結婚式もこの日にしてはいけない。嫁が千里行つて、千里もどつて来る。

友引の日には葬式を出してはいけない。戊の日に麦蒔をしてはいけない。

辰の日に田植をしてはいけない。
午の日に肥を出してはいけない。

友引・三隣亡の日に仕事を始めてはいけない。この日に仕事を始めたことが隣近所の人間に知られると、いやがられる。

三隣亡の日に、家の普請をはじめはならない。この日にはじめると、近所の人は、いやがつて、手つだいに行かない。(中原)

忌まれる年令

女は二十二歳で嫁に行くものではない。むかしの仲人は、こういう場合、世話をしなかつた。男の年まわりは、別にかまわない。

女の厄年は、十九と三十三、男は二十五と四十二である。厄年には、反町の薬師様におまいりして、厄をはらつてもらう。

女の厄落しをするには、大豆と一錢銅貨をおひねりにして、これを三本辻に落してくる。又、三十三歳の厄年の時には、特別に、三角のかたつきの帯を、実家の親が贈り、これをしめていると、厄がきかないという。

男が四十三歳で災難に逢うと、あと厄がきたという。(中原)

赤不淨と黒不淨

月经のことをチボクという。この時には、ボクを着てゐるから、神まわりに参加してはならない。子供を出産した時も同じで、一週間は陽にあたつてはいけない。又、チボクの女は、神棚に燈明・供物などをあげてはならない。

お産のボクは百日間で、五十日の間は風呂に入つてはいけない。この期間は納戸の中にこもり、身体がきれになるまで、座敷へは出ない。女の子は三十一日、男の子は二十一日でオホヤケ(産屋明け)となつて、

はじめて外出を許される。

妊娠中に火事を見ると赤穂の子が生まれる。又、この期間に葬式に出逢うと黒痣の子供が生まれる。だから、墓の穴掘りには参加しない。

妊娠中外出する時には、火災や葬式に出逢った時の要心に、必ず鏡をふところに入れて、難をのがれる。もし、鏡を忘れて外出して、葬式に逢い、黒痣の子供が生まれた時には、死体の埋められてある墓の土をとつて来て「子供の癌をとつてください」と唱えながら、その土を、子供の癌の部分に塗りつける。こうすると、癌がとれる。(中原)

葬送に関する禁忌

死者の喪に服することを、ボクを着るという。ボクを着る範囲は、死者の肉親だけである。もっとも重い服装の期間は、死後四十九日の間で、この間は家にこもって、山や川へは行かない。ボクを着ている一年間は、村の祭に参加せず、正月の松飾りをしない。

葬式に参加したものは、家に帰ってくると、玄関に入る前に、外で、

たらいに水を汲み、足を洗い、塩で清めてから家に入る。

墓掘りに使用した塩は、塩又は酒でさしめてから、家庭の片すみの、

陽の当らない場所に一週間以上放置しておく。その間使用してはならない。使う時には、再び塩で清めてから耕作に使用する。(中原)

食事に関する禁忌

朝、味噌汁を、飯にかけて食うものではない。外出した時、他人から恥をかかされる。

赤飯に汁をかけて食つてはいけない。結婚式や葬式の時に雨が降る。七草粥を吹いて食つてはいけない。田植の時に大風が吹く。

一膳飯を食つものではない。縁どくなる。飯は必ず二杯以上盛らなければいけない。

飯を食つて、あくびをするものではない。不幸に逢う。又、食事後す

ぐ横になるものではない。(中原)

火に関する禁忌

子供がマッチをいじつたり、炉の火をついたりすると、寝小便をするからよせと言つてとめる。

爪を切つて、火にくべると、親の死に目に達えない。狂気になるととも言われる。

柿の種を団扇裏の火にくべると、ナリンボ(癪病)になる。(中原)

作れない作物

大原二区の家では、玉蜀黍を作らぬ家、茄子を作らぬ家、南瓜を作らぬ家、小麦を作らぬ家がある。家例として、作つてはならぬ作物とされている。他人からもらつて食つぶんにはさしつかえない。

この地区では、多くの家で、屋敷つちに芋を作る事を忌む風がある。屋敷つちの烟に芋を作るととあととりが絶えるからだといふ。身上の終

えた家のことを、イモバタケになったといふ。

屋敷つちに枇杷や山椒を植えてはいけない。家に病人が絶えない。(中原)

柚子は植えた人が死ななければ実がならないといふ。また柚子・ブドウは屋敷に植えるな、病人が絶えないといふ。

ビワの木を屋敷に植えてはいけない。

今井一家はキユウリを作らない。人の家のをもらつて食べた。(湯ノ入)

藤生一家はきゅうり・やつがしら・とうもろこしを作らない。そば練起で、三が日は、朝そば、昼は餅、夜は米の飯。(西野)

藤生一家では、蔓のあるもの、胡瓜・南瓜・西瓜を作らない。三が日うどんを食べる。昔主人公が借金取りが来るので、お便所で食べたといふ。(三島)

百日紅は屋敷に植えない。寺か墓地に植える。びわも疎り声が聞こえ るといつて屋敷に植えない。(西野)

鳥に関する禁忌

鳥糞を軽蔑すると、鳥に炎をえられるという。口の両脇がたたれると

のは、鳥に炙をすえられたからだという。

妊娠中に兎の肉を食べてはいけない。ミツクチの子供が生まれる。

家に子供が生まれた時に、猫や犬をもらってくるものではない。猫や

犬は、いつもけんかして、勝ち負けがあるため、子供が丈夫に育たない。

(中原)

その他の禁忌

出針を使うものではない。出先で必ず怪我をする。うつかり使った時

は、「とめおくべえ」とか、「隣りのババアの口を縫う」とか唱えごとをすれば、難を逃れる。

夜、手足の爪を切るものではない。ヨ(寿命)をつめるという。

大工は、たてまえの時に「危ない」ということばを、決して口にしてはならない。

桶を投げるものではない。不縁のもとになる。又、同じ理由から、桶

を直で拾うものではない。桶は縁切り、かんさしは形身と言い、

桶を女に買つて与えてはならない。

手振り水をしてはいけない。神主は、手拭いを不淨がついているといつて使わずに手振り水をするが、普通の人はしてはいけない。(中原)

ハンゲの日に首笠をかぶつて田植をすることはいけない。ハンゲが首笠をかぶつて田植をしていて、風にあおられその紐で首をくられたから。

(淹ノ入)

富士登山　お山に行って、何か持つて来てはいけない。かならず災難

がある。

てんかん　てんかんの人が挙げた手の下から覗くと、てんかんになる。

てんかんの人のあぶくがつくと、てんかんになる。

祇園　お祇園とお盆と一緒にやいけない。

餅　いろいろ餅を焼くもんじやない。(二局)

植木　一家は正月から三月までヌリ物(下駄・お膳・箸等)を一切買わない。その前(暮)に買っておく。他人から貰うのは結構である。親戚

に頼んで買つてもらつることもあった。

植木一家では三日で餅を食べるとできものができるといふ。

植木一家では二十日正月まで麦を食べなかつた。麦の入つた味噌は使

用できず、煮えたつたやつを袋でこして食べた。

四つ足の白いものを飼つてはいけない。温泉神社の湯権現様が嫌うからという。(湯ノ入)

薄生一家では正月で餅をつかない。

七草まで福田一家では青菜を食べてはいけない。漬け物でも食べなかつた。ウドンの時には大根を入れたりした。

畜禪一家では門松に松を使わず、ナラと竹で作る。埼玉の妻沼の町でもナラと竹で作る。屋敷に松がない。ショウテン様の境内にもない。(淹ノ入)

二、兆し

雨又は晴になる前兆

寺の鐘のひびきが良い時は晴れ、悪い時は雨になるときさし。

月が大きさをかぶる時は、翌日雨が降る。

青大将が木登りすると雨になる。

燕が低く飛ぶ時は、夕立がくる。

猫が顔を洗つと雨が降る。

地震のある時刻が、昔の言い方で、六つ、八つの時は、翌日雨が降る。

蟻が行列を作つて、移動をはじめる時、雨。(中原)

御荷鉾の三東雨。御荷鉾山から雲が流れてくると小麦東を三東丸める

暇がない位早く雨が降り出す。

雲が西へ流れると雨、東へ流れると晴。

南の東京の方へ長く雲がかかれれば雨が降る。(湯ノ入)

霜刈の時分、雀が竹藪で騒ぐと雨が降る。

朝日焼けだと雨が降る。(台)

風の吹く前兆

蜂が巣を作り年は必ず暴風に見舞われる。又、母屋の軒下に蜂が巣を作る場合も暴風の前兆である。反対に蜂が桑の樹などの高いところに巣をつくる時は、安全な年である。

釜底に火がつくのは、オトウカツビといい、大風の吹く前ぶれである。

(中原)

赤城山に雲がかかると風が吹く。

冬至に六尺の椿を立て、その影が九尺三寸になれば翌年は大風がある。

それ以下なら嵐は来ない。影が短くなると作物はあるならない。(台)

赤城山の黒桧と地蔵の間に雲がかかり、雲と山との間の三角の窓が晴れていれば大風が吹く。少しでも曇っていれば雨が降る。

どんなに雲が厚くても、暖かい時には風は来ない。寒くなると風が来る。(湯ノ入)

豊作又は不作の前兆

雪は豊年のみつきといつて、大雪の降る時は豊作の前兆。

寒の九日に雨が降った年は豊作。

祇園祭りの時に、天王番が上の地区にあたると早くて不作、下の地区に

あたつた年は雨が降つて豊作である。

十三夜に雨が降ると、小麦が不作。(中原)

えんぎの良し悪し

今でも、年寄りたちは、運のよし悪し、えんぎの良し悪しを気にして、

若い者たちからはオンベかつきなどと言われている。

嫁取り、婿取りの時に雨が降ると、トリコメルといつて、えんぎがよい。

家を新築して、たてまえの時に雨が降ると、ヒアセと言つてえんぎが良い。火災に逢わないといふ。

朝、最初の訪問者が女の時は吉兆。今でも、商店などでは、朝、最初に女

の人が買い物に来ると、えんぎが良いといって、貸し売りするという。

坂道を登る時に、馬の糞をひろうのはえんぎがよい。これを家に持ち帰つて、軒につるすと魔除けになる。

優華の花が咲くとえんぎが良い。近くその家には、めでたいことがある。その家のものが、出世をする前ぶれだからといわれる。

燕が巣をつくるのは、えんぎがよい。その家は火災に遭わない。

蛇がとうろを巻いているところを見たのはえんぎがよい。金が手に入る前ぶれ。

夜の蜘蛛はヌヌットグモといつて、えんぎが悪いから、見つけ次第殺す。朝蜘蛛は吉兆だから殺さない。

桜の木に、時なしの花が咲くのは、えんぎが悪い。変事の起る前兆である。

逆さ猪や左膳に坐つた時は、タツ膳といつて、えんぎが悪い。左膳はジヤンボン(葬式)まわりであるといふ。

月夜に鳥が鳴くと、近所に葬式がある。長い間病んでいる人がいて、死期が近づいてくると、その家のまわりに鳥が集まつてきてさわぐ。鳥は、臭いを感じする能力をもつていて、病人がいると、その臭いをかきつけるのである。

旅立ちの前に、下駄の鼻緒が切れる、旅先で災難に遭う。又、家を出で、途中、道を切られる、必ず旅先で災難に遭う。

鶴が夜中にトキをつくのは、火難に遭う前ぶれ。

遠くの方に火柱の立つのを見えた時は、近所に火災がある。火柱の倒れた方に火災が発生する。

釜鳴り(する)のは、火災の難に遭う前兆。

仮壇や神だなの燈明が、風もないのに消える時は、火難に遭う前兆である。

鼠が家の中に出てなくなったら、近く火災の発生する前ぶれだから、気

をつけなければいけない。

朝、魚釣りに出かけようとしている時に人が来て、猿の話をすることは、えんぎが悪い。その日は、魚が一匹もとれないといつて、釣に行くのをやめる。(中原)

夢の良し悪し

歯の欠けた夢は、えんぎが悪い。近く火災の難に遭つ。

金をひろった夢はえんぎが悪い。災難に遭つ。

川魚がたくさんとれた夢を見ると、身うちに不幸がある。

悪い夢は、他人に話して、タケル(伝達すること)とよい。

蛇の夢はえんぎがよい。金持ちになる。

良い夢は、他人に話すと、だめになる。(中原)

その他兆しあれこれ

耳がかゆいと、伯母さんが来る前ぶれ。

鼻におできができると、親戚に子供が生まれる。

赤ん坊の手のくびれが、一つの場合は男、二つの場合は、女が次に生まれる。

赤んばうが這うようになつて、後をふりかえつて見ると、次の子供ができる。

なまくびは、病気になる前兆。

七は向うびらきといって、不吉な数、九は苦厄といって、やはり凶数である。八はひらくといって吉数であるといふ。不ぞろいに出た年は晚

霜の芽がそろつて出た年は、おくれ霜がない。不ぞろいに出た年は晩

霜があつて、麦・小麦の不作の年である。(中原)

三、占　い

煙へ行く前に、自分で作った草履を投げて、緒の方が出れば晴れ、へ

ツタ(裏)が出れば雨が降る。

睡占は、睡を掌にのせて、これを両掌を打ちあって、睡の飛んだ方角によつて占いをする。

御獄講・浅間講などに入っている家では、暮れから正月にかけて、年占を行なう。その年の西瓜の豊凶や、値段などについて、先達を呼んで、頼まれば、他家へ出向いて、おがんでやることもある。(中原)

四、呪　い

病氣の呪い

耳の病氣をミミダレという。岬の脱げがらを粉にしてつけるとなおる。三脚村のオビンヅル様のお札を、耳の中に入れておくと、耳ダレがなくなる。

ヤンメ(眼病)の時は、ヤンメドッコと半紙に書いて、人の見やすい所にはつておく。そうすると、これを読んだ人にたかつて、治る。夜盲症のことをトリメという。じみ貝とたにしを取つて来て、焼いて食うとよい。

モノモライをメカゴという。メケー(目のあらい龍)をかぶると、この病氣になる。メカゴができる時は、メケーを持って行つて、井戸をのぞき、顔を半分ばかり水面にうつして、「なおれば、全部見せます」といえば、メカゴがおれる。

目にこみの入つた時は、まぶたをめくつて、睡をペベツと三回すればとれる。

喉にものがつかえたのを、ノドツケといい、この時は、稻の穗で喉をささするととれる。

疣をとるには、「アビローケーソー」ととなえながら、茄子のへつたで三べんなるととれる。又、貴船様の疣神様にあげてある石で疣をこすると、とれる。(中原)

虫封じ

手のひらに、虫という字を二つ書いて、その上に、封じるという字を書く。(西野)

こうで、かぎつるしから手を出して、男の人は女に、ぬいとすでしぱつてもらう。障子の穴から、しばつてもらう。(西野)

みけ一ご 井戸神様に、みけ一半分見せる。下ん前のつまを、ぬいとすで、三回りしばる。(西野)

やんめ やんめの大安売りと書いて貼る。(西野)

歯いた・のどのとげ 象牙の箸で三度なせる。(西野)

墓場のもり団子を食べると夏やせをしない。又、風邪をひかない。(湯ノ入)

虫歯 とほ口の側に、五円玉を打っておく。(西野)

こうで、はがきを小さく切つて、痛いところにしばりつけておく。天と様が出る頃、「向う山の色男、まねご」とするにも手が痛い」といつて、日をまねく。かぎつるしのコブナを、ヌイツス(穢い糸)を、三通りしばる。(西野)

両親の摘つている一番しめえっ子にイロリのカギツルシの下を通してしばつてもらう。女は男の子、男は女の子にしばつてもらうとよい。(湯ノ入)

カクランマジナイには蒼笠をかぶして、太陽の方に向かい手を合わせて立たせる。アビラウンケンソワカと三回唱えて、水をひしくて三回かける。水がもるとカクランはおるが、もらなければカクランではないという。その後、残った水を太陽にそなえた水だからといってガブガブ呑ませる。(滝ノ入)

六算よけ 三本辻に年令の数だけ線香を束ねて立て、痛い所にその煙をかけて、後を振り返らずに帰つてくる。(台)

台所の流しの下に線香を年数だけたてるとよい。(寺下)

虫歯

うつきの木に「この歯の痛みを治してくれ」といながら針をさしておき、治つたらぬく。(中原)

バヒフ

病の時は、馬という字を三つ書いて入口に逆さにはるとよい。

(中原七区)

タムシ(皮膚病)ができる時は、半紙に「鳴」という字を書いて、これで患部をなでるとよい。「鎮西八郎為朝」と書いてもよい。子供の歯の抜けた時は、下の歯は屋根に上げ、上の歯は縁の下に埋めるとよい。あの歯がよく生えるという。

冬至の日に、柚を漬けておいて、年とりに福茶を飲みながら食うと、夏バテをしない。

冬至の日に、トウナス(南瓜)を食べると中気にならない。又、この日に、茄子の枯枝を燃やして、その火にあたると、風邪をひかない。

風邪がはやる時は、ヒル(大蔵)を三個、きんちやくに入れて、腰につるして外出すれば、風邪がうつらない。

霧乱をおこした時には、井戸ばたへつれて行つて、菅笠をかぶせて、「アビローケーソー」と唱えながら、上から水をかけてやる。こうすると霧乱がとまる。ナバナンゲといつて、七月中に、小麦わらをケード(門口)で七晩づけて燃やすと、疫病除けになる。(中原)

厄病神送り

疱瘡神送り 子供が種痘をした時、ウツ木の木で疱瘡棚を作り、赤い色紙で幣束を作り、これを疱瘡棚の真中に立てて、座敷のすみかお勝手などに吊しておいて、オシラキに飯を盛つてあげる。疱瘡神は、食いしんぼうだからという。子供が種痘をして、十二日の間、こうして疱瘡神を祭り、十二日たつと、三本辻へ送り出す。(中原)

風邪の神送り 十二月十五日に、幣束を立てたターラッペシ(儀のふた)に棒を一本とおしたものと子供がかづき、村内をまわり歩く。その

時、「かーぜのかーみをおーくるよ」と唱え、念仏経をたたきながら歩く。

すると、家々から、それぞれ一銭銅貨をおひねりにして持つて出て、子供たちの額を、このおひねりでさすって、ターラベシに乗せる。風邪の神は、最後に火葬場に持つて行つて捨てくる。子供たちは、もらつた錢で、菓子などを買って食べた。戦後、この習俗は見られなくなつた。

（中原）

（中原）

く生まれるようにといふ呪いである。
出産の時、親もとから、カラメというものを贈る。「一生貢えるようになると、米一升を袋に入れ、かつおぶしと共に祝いとして出し、別に二・三升もつくる。（中原）

夜泣きの子を眠らせる呪い

夜泣きをする赤んぼうを抱いて外へ出て、「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれる先のちぢぞ恋しい」と三べん唱えると、赤んぼうが夜泣きしなくなる。（中原）

（中原）

豊作の呪い

年とりの晩に、猪の頭を二つ叉の豆の枝にさして、「あぶら虫の口を焼きもつす」と唱えながらあぶる。これは家の軒先にさしておく。又、その時に、「借金すがら、良いこと聞くがら、まめに働くよう」と唱えながら豆を炒る。

正月十五日に蘭玉を作り、山桑の枝にさして神様にあげる。蚕があたるようによいままじないである。同じ日に、ミズアサの木の枝に、オッカドの木で作ったアーボ、ヒーボというものを、堆肥の山に立てる。豊作のまじないである。（中原）

雨乞い

星懸の時には雨乞いをする。村の代表が、三夜沢の赤城様へ行き、神主から神泉をもらつてくる。その際、使の者は、途中決して立ち止まつてはならない。途中で立ち止まると、止まつたところに雨が降つてしまふ。だから、神泉は、数人の者がリレー式で村には「こんだ」村人は「さんげさんげ六根清淨」と唱えながら、この神泉を互にかけ合つ。雨乞は雨が降るまで、毎日続けられた。こうしたことは、昭和初期には、まだ行なわれていた。（中原）

お産の呪い

妊娠中、蛇の脱けがらを胸に巻いていると、お産が軽くすむ。

出産の日には塩釜様を祭る。又、産泰様へおまいりして、ひしゃくを買って、底をぬいてあげる。無事に子供が生まれると、又、新しいひしゃくを買つて、底をぬいてあげる。

子供がいよいよ生まれ出るという時には、夫は家の外へ脱出する。軽

病人が死にかかると、タマヨビをする。大原では、井戸へ向かって、病人の名をよびかえす。又、西原では、屋根に登つて、耕の底をたたきながら病人の名をよんで、魂をよびかえす。（大原・西原）

（大原）

病人が、よいよだめときまつたら、極楽往生ができるようとに、組内者が集まり、大きなズズを以て、病人のまわりを「なんまいだ」と唱えながらまわす。

癪病のことをナリンボという。ところ飯を食つた茶碗で、お茶を飲むと、ナリンボになる。不治の病と考えられている。

子供のペニスが腫れた時には、蚯蚓に小便をかけたからだといつて、

蚯蚓をとつきて、これを水で洗つてやると腫れがひける。

精神病はオトウカ（狐）がついたから起る。これを引きはなすには、棒でなくぐるとい。

近所に火災が発生した時は、女の腰巻きのよごれたものを、旗のようになに棒の先にしばりつけ、火に向かって振ると、炎は逃げて、類焼をまぬかれる。

いやな訪問者を早く帰らせるには、座敷のすみに幕をきかさにたてておくとよい。

雷が鳴る時は、線香を立てて「遠くの桑原遠くの桑原」と唱えるとよい。

犬に吠えられた時は、十二支を唱えて、十二番目の指にぎり（ん）でおさえていれば、かみつかれることはない。

道に落ちているものを拾う時は、一度足でふんでから拾うよい。

ものを紛失した時は、お庚申様に願をかける。出て来た時は、スミキリ豆腐をお札にあげる。（中原）

折り釘 わらで人形を作り、「神木の松の木に釘で打ちつけ、丑の刻に通つて釘の頭を打つことで女人の人に多かった」と聞いている。

昭和四十七年にもあり村中の人見に行つた。又、七十年前に、村に火つけが多いのでわらの人形の大きいものを作り、山の神様で村中の人が替わる替る、竹やりについて、最後に火あぶりにして見せたら犯人が見つかり、まもなく病気になつたと聞いている。（寺下）

三隣亡 三隣亡は人に知られればだめである。そつと他人の家の田の回りに米を赤く染めてつく。小豆がいちばんきめがあるという。秋に田園をさくったら赤飯と尾頭つきがでてきたり、ほた餅がでてきたりした例がある。

三隣亡除けには庚申様—猿田彦—をまつるのがよい。戦後猿田彦の碑

を建てた人もある。（湯ノ入）

雷除け いろりや火の近くにおれば雷が落ちても安全だといわれた。

又、麻蚊帳の中に入れるとも言つた。

節分の時の豆を雷の初鳴りに食べるよいと聞いていた。（寺下）

雷よけの木に、ライデンボクというのがある。エンジの木ともいい、

水分が少く、床柱にする。

雷よけには、線香を立てる。蚊帳をつる。（三島）

風除け 繩を竿の先に結びつけて、風が吹いて来る方向に向けて立てておく。よく、「辰が来ないよう縄を立てた」といわれていた。（寺下）

その他 位牌の上の袋を財布にすると金がもうかる。

ジャンボンの竹箸を使つとオコさま（蚕）ははずれない。（湯ノ入）

冬至の日に井戸の初水を桶荷様の屋根にかけると火難にあわない。

（台）

葬式のワラジをトボロに吊すと魔除けになる。

ハナムスピゾーリをはくと蛇にかまれない。

ハチにさされた時は石返しをする。何でもいいから側の石をひっくり返す。（湯ノ入）

こうで異性の末子に、健竹から手をくぐらせてぬいとすで手首をしばつて貰う。（台）

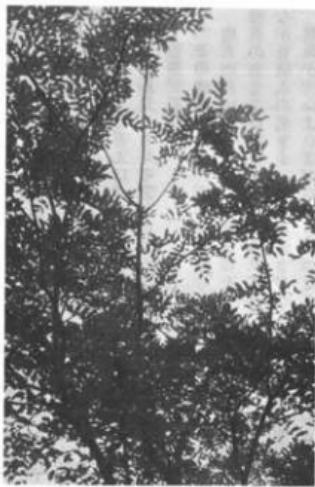
トシリのイウシ（ヤカガシ）をネーマにさすと害虫除けになる。また、カナムシがつかないと云う。（泡ノ入）

年神様をまつた幣束を屋根にあげておくと火事にあわない。（湯ノ入）

大晦日頃付きの魚を稀荷様にあげると、泥棒よけになる。（台）

ぬすつとおりさつまなど、のあらしされると、でかい男と女の薬

人形作つて、それを村中の者が竹槍でつととおして、下の方へ送つて、焼いて来た。大正の始まり頃までやつた。（西野）



雷電木（山ノ神）

（上野 勇 撮影）

花結び 薔薇の一種で、これを履いていくと山に入つてもマムシに

くわれないという。(淹ノ入)

千人針 戰争中、千人針に五銭つけて、死線(四銭)を越えるよううとか、くるみを持って行って、来る身だとかいった。勝ち栗も持つて行った。(西野)

五、民間療法

虫歯がいたむ時には、よもぎの葉を塙でもんで、患部につけるとよい。

又、梅干の肉をつけると痛みが薄れる。

虫歯を系でしばり、この糸を足につないで寝ると、自然に抜ける。

暑氣にあたった時には、梅酢を飲ませるとよい。

食あたりには、梅干の黒焼きか、梅内エキスを飲ませるとよい。

子供が爪をかじると、腹に虫がわくという。虫がわいた時には、海藻

の煎じ汁を飲ませると、虫がくだる。

脚気がかかった時は、毎朝早く起きて、朝露にぬれた土の上を歩くとなおる。

脅病をわざらっている人には、玉蜀黍の毛を煎じて飲ませるとよい。

西瓜もよくきくといふ。

蜂に刺された時には、薄荷の葉をもんでつけるか、塙をすりこめば、

痛みがとれる。

クサ(ふき出もの)ができる時は、どくだみを煎じて飲ませるとよい。

蒜の苔を焼き餅に入れて食べると、喘息の薬になる。

アセモができる時は、桃の葉を湯に入れて入るとよい。

熱病の時は、斬剣を煎じて飲むと、熱が下がる。

赤蛇を焼いて子供に食わせると、寝小便の薬になる。虫薬ともいいう。

かたつむりを焼いて食べると、虫薬になる。

蜂の子や鉄砲虫を、結構でいて、子供に食わせると虫薬になる。

切り傷の出血を止めるには、七種又は三種の草の葉をもんでつけると

血が止まる。又、黒土で患部をおさえたり、袂ボクソをつけたり、或は

又、きざみタバコの粉をつけててもよい。

薬草は、土用に入つて三日目に採取したものが特に効果がある。ドク

グミ・ヨモギ・ゲンノショウコなどを採つてくる。

土用に泥鰌をとつてきて食べる、夏まけしない。

肺病のことロウカイといふ。蛾の黒燒を飲ませるとよい。

下痢のときは、ゲンノショウコを煎じて飲ませるとよい。

ナメクジは痔の薬。

蟻は肝臓の薬。

松葉は心臓の薬。酒に漬けておいて飲むとよい。

ハブ草の実をとつて、ハブ茶にして飲むと胃病によくきく。

足の捻挫には、山梔子の実をつぶして、うどん粉と酢と玉子の白味を

まぜ合せて、患部にぬるとよい。山梔子を入れると、ねむけになるとい

う。

田螺をうどん粉でねつて、はれものにはると、口ができる、うみを吹

き出す。

男の鼻血はよくない。女の鼻血がでるのはよい。子供の鼻血が出た時

には、ポンノクボの毛を抜いてやると血がとまる。

家に重病人がある時には、身内の者が集まつて明神様にお百度まいり

する。

子供が眼病をわざらうと、大原寺の薬師堂に絵馬を奉納して願をかけ

る。

赤んぼうが病氣をすると、大原寺の子育て地蔵様に願をかける。(中原)

虫虫にさされた時、葉を左襷になつてそれで患部をこすつてから、葉

を三回ぐぐしてから燃すといい。(台)

胃にはセンブリ、腸にはゲンノショウコが効く。土用の三日目の四ツ

前に、朝露のあるうちにとつてはすとよく効くといわれている。(淹ノ入)

乳不足 お産をしても乳不足の時は、産婆が乳をもんぐれた。こう

すると少しは出るよつになつた。母乳を補うために「すりゆ」といふ生

来をすりばちですりつぶし、布でこしてから、湯で煎じて飲ませたが、

一時的なもので充分とはいえなかつた。

母乳は、さつまいも、うどんを食べると出るが、うどんの乳はうすい

といわれていた。(杉塚)

蜂 さされた時は油拂をぬる。(台)

モグラの黒焼き 土釜(蓋めしの釜がいい)に生きたままモグラを入れて、炭になるまで焼く。病の薬で一寸なめただけでも効く。カルシユ

ム分の関係であろうか。(台)

うるしかぶれ あぶらげをあぶつてあてるとい。(台)

下痢 アオキの葉をせんじてのむ。

きず薬には赤むかでの油がよい。

頭が痛いときはこめかみに梅干をはる。(大久保)

カクマン かまきり。桑によくたかっている。その頭をちょっとひ

んむいて、紙にでもくるんでおいて、それをびんに入れてとつておく。

そいで練つてとげの吸い出しにする。できもんがふつきれ。生薬屋

にもない。

カクマンの頭をとつてしまつておき、そいで練つてとげ・できもん

の吸い出しにする。(西野)

敷居の上にのばるのは、おとつあんの頭に上のと同じ。

覺のへりは歩くな。

良い子とは、仕事をよくする子、言うことをよくきく子。
「行」としては、台所掃き・ぞうきんがけ・庭掃き・下水かえなど。
食事のしつけとして。
座つて食べる。

六、しつけ

おしゃべりしない。

お鉢をたたくとオサキが来る。

左脇、タツ脇は死人に供えるとき。

箸ではさみっこしない。

食事に箸をたてない。

着物のしつけとして。

左前はいけない。ゼニ首はいけない。(大久保)

悪たれぐら等「光りかがやく長円寺、まぐそぼこり(ほこり)の胎養

寺」と子どもの口げんかのときよく言われた。又、「おまえのかあちゃん

出べそ」「おまえの学校はぼろ学校、つかい棒が十三本、机がなくて、み

かん箱」などと悪たれぐらがあった。

木登りのときは「えんやこんべ、えんやーんべ」といながら登つた。

けらという虫をつかまえて「おやじのきんたまはどんなど」と問いか

けて「おやじのまらは、千じょうじき」又は「とうちやんのまらは、千

じょうじき」とい、ひろげながら「こんなだ」と言つた。(寺下)

七、一人前仕事量

男は、麦の一番ざくを一日に三段切ること。畑うないは、エンガで一日一段が一人前。繩ないは、一晩に二十ポー。一ポーは二十尋。十六歳で米俵一俵がかつけられは一人前。

女は、機織りで一日に一反織れば一人前。二反織るのは早い方だといわれる。(大原)
田植は一人一日五畝、たいがいの人が兵隊検査前に植えるようになっていた。(中原)
力だめし 五十年前までは、十九貫(約七十一キログラム)の石塔で力だめしをした。(寺下)



繩の束ね方……凡そ1尋を8字型に重ねて、20尋を以て1房とする。(大久保)
(都九十九一 撮影)

言語伝承

はじめに

某月某日、民俗調査の打合せのあと、戸塚本町の方々と、一緒に食事をした。話がはずむと、例によつて、私の十八番の蚊の鳴く声・犬の鳴き声から、牛の鳴き声になつた。群馬県でも、牛がメーと鳴く所がある。無論多くの土地ではモーと鳴く。それから話が進んで、酒をすめる時には、牛の鳴き声で、モー一杯というしやれが出た。さらに興がのれば、卑俗なことばで恐縮であるが、狸の睾丸で、また一杯。おつもりは、茂林寺の住職で、もうたくさんということになる。調査当日も、この話を呼び水としたので、俚諺・たとえのことばを数多く聞いた。中でも、カクマントーロー（かまきり）が断食したてだと、瘠せた者をいうのは興味をひいた。私が永年調査している赤城南麓一帯で、かまきりをいふことは二〇〇語ほどあるが、カクマンという土地は、この戸塚本町と、となりの強戸だけである。カクマントーローには、始めてお目にかかるた。国立国語研究所の「日本言語地図」を見ても、カクマンは出ていない。かまきりをカクマンというのは、日本中で、このあたりだけといふことになる。このカクマンを民間療法に使うといふことも初耳だった。私にとっての収穫は多かった。他的方面は、比較的乏しく、環境の破壊が、伝承の世界にまで及んだのか、キツネ・ムジナの話以外には数少なかったのは残念である。（上野勇）

一、命名 人名

命名 富士講の先達や近所の物語りに頼んでつけて貰う。長命の人につけて貰うと長生きをする。名付け親にはお七夜に来て貰う。

体が弱いと一、三才位までに呼び名を変える。（吉）

けだものをつけなくなつた。昔は年の名をつけた。卯年にできたからうさん、午年だからうさんとか。その緒を頭にまいて出たから

まき。けさをかけて生れると、住職になつて出世する。子ども多いので、しまいにしようと思って、しま・すえ・とめとつけた。そのあとできたので、やけだから、はじめ・はつとつけた。（西野）

三つ半紙に書いて引かせる。（三島）

名負け 滅年なので寅雄とつけたら、名負けして弱いので、次郎としたら丈夫に育つた。（三島）

鍋雄 丈夫に育つように、鍋の底をくぐらせて、産湯をつかわせる。五升鍋といって大きな鍋があった。（三島）

トメ・オサム 子どとが多いと、これで終りになるようとに、トメ・オサムなどと名づけた。（三島）

同名の時の通称 クラさんが三人いた。

シンクラヤン（シンさんのせがれ）
ヒゲクラヤン（ヒゲをはやしていた）

ジロクラヤン（ジロさんのせがれ）　（滝ノ入）
改名　子供の時体が弱いと改名をし、それが通称になる。戸籍上の名
と通称とが違う例が多い。

福田友次郎　テルチャヤン

今泉モリマサ　クラチャヤン

山崎あぐり　オハルチャヤン

山崎吉松　マサチャヤン　（滝ノ入）

同じ名の人が二人いると改名する。例えば八が一人いると、後から来
た人を五とか三とかに改名してしまう。（湯ノ入）

あだ名　トンビットモサン　歩き方が、とんで歩くように見える。

ヨナカのエーサン　どちらも気長、話しうと夜中

ヨアケノカクサン　にならなければや帰らない。

ネグマヤン　寝床によくもぐっている熊さん。

ハイカラミツチヤン　娘の頃、頭をハイカラに結っていて、スタイル
もよかつた。（埼玉県までひびいた。（山ノ神）

ネジクマ　いい人だが、ねじれるところさい。

ヒコーキバーサン　後家はあさんで飛行機のようまめに方々歩き、
村の噂をよく知っている。

ヨナカノ〇〇チヤン　長尻で、夜中に帰つて来る。

ナガゾソノ〇〇ヤン　五月になつても、長櫛の着物を着ている。

デンボ〇〇サン　（西野）

ネジクマサマ　消防の班長か何かしていたが、運転台にくまさんが乗
るところ、ほかの人が乗つちやつた。（高津戸から、とうとう今まで歩
いて来た。何でも、くまさんどうするんだって聞いてからやればいい
が、そうではないとねじれる。（くまさんが叩く半鐘は音色が違つていう
と、かならず叩いた。（西野）

呼称　目上に対しては〇〇ヤンといい、目下は呼び捨てにした。

父　オトツツアン　母　オツカヤン

叔父　オツチヤン　叔母　オバヤン

兄　アンチヤン　姉　ネエヤン

大兄　デツケアンチヤン

小兄　チツチイアンチヤン　（六千石）

屋号　柏屋・万屋・桶屋・瓦屋・下駄屋など屋号はあるが、今はやつ
てない。（山ノ神）

〔二〕 地名

台の地名

イナリガ沢　稲荷様が祠つてある。ノイイキ様という石祠がある。今

は特定の行事、祭典はない。行者が信仰したものか。

オカシカ沢　オカシさんのがここで死んだというが、詳しいことは分ら
ない。

京ノ入

不動沼　前に不動様が祠つてある。今は田になつていている。岡上景能が

ここから大原に用水をひこうとして作った沼という。用水の跡が山の中
腹にある。これは失敗してしまつた。

ドウの下　笠懸、阿佐見まで含む広い地名。ほとんど田で岡上用水か
らの水でまかなつてある。

観音寺　田になつていて、ドウの下の中にある。

イシノトウ　中原分である。

ドウの前　表師堂の前の田。

オネ　陵線

ミネ　独立した山の頂上

山ノコシ　麓（台）

滝ノ入の地名　諏訪山（諏訪神社のある山、縮めてヤマという）。ム

ケー山（スヤマの前の山のある山）、大ヒラノタナ（峯の中間にある。昔
屋敷があつたらしく井戸跡がある）。アキハガウラ（山にある、別に秋葉

様も何もない、四～五坪位が平らになつてゐる、シンゲンの宮（今は何もない）、三枚烟（シンゲンの宮の前の煙）。

カマ田 どんな旱魃の時でも水があり、底なし沼のようになつてゐる。

滝ノ入 湯ノ入から出るといふ。

三年経つて湯ノ入から出るといふ。

改修して今はない

ジャンボン田 長円寺の東裏にある、長円寺の田。今は滝之権現で買いつた。

明治四十一年頃田へ入つて心臓マヒか何かでステンと死んだ人がいて、

二、三人続いて死んだので、こう呼んで誰もいがつて持とうとせず、

寺のものになつたといふ。（滝ノ入）

田園の名 島田。天神。天神様があつたのでいう。

腰巻。コナダ。この四つの田は四天王といわれ塙坂一の田園であつた。よくない田にジャ

ンボン田がある。

カマダ。早ばつにも水がある。「底がないから子供は入るな。腰まで入

ると出られねえぞ。」といわれた。湯ノ入にも同様な田がある。（このカ

マダに白をぶつこむと湯ノ入のカマダに出るといふ。杉丸太を下に組み、

その上に土を盛つて、今耕作している。田グワイ。イゴなどの草がはえ

るが除草剤がきかない。（滝ノ入）

山の中の地名 黒石。石原。シダカ沢。大平山。大不リ。八王子の沢。

八王子の沢には八王子木といふお堂があり、明治の中頃まで盛んであつた。

ワキ村（他村）からもお参りにきた。桐生分に茶臼山がある。三十

米位の穴があり、入口は小さい中は立つてある。昔の鉱山のあと

ではないか。そこから金が出るといつて自分の金をかくしておき掘つて

みせ持つに金を出させてだます人のくれ家であった。（滝ノ入）

小字 寺下、林西、萩林、木戸改門、八幡、薬師前、宮前、三崎前、芝崎、石堂、堂の下、新井、六地蔵。（中原、寺下、杉塚）

一一、伝 説

赤堀道元 赤堀道元の家は大きい造りの酒屋で、前藩主の病気を直した名医がついて来た。村で医者をしたが、薬を元値で売つた。俠客大

前田英五郎といぎこさがあつて、娘が赤城山の湖に入水し、蛇になつたといわれる。この家の跡取りの人は、駒の下にコケ（うろこ）が生えて

いるという。（大原）

惟喬親王 今ゴルフ場でならしたが、御所入にお宮がある。雷電様のまわりに馬場がある。（西野）

香電様 太田の香電様だつていつて、寺井の人が、木像を刻んで、

呑電呑電って、自分でいいながら彫刻してたら、その呑電様の木像が、

こつくりしたら、自分の命がおえちやつた。それであらたかなんだつて、

あそこへまつた。（西野）

笠懸野 昔、源義經が通つた時に、笠をかけて休んだ松があつたので、

呑電呑電って、自分の命がおえちやつた。それであらたかなんだつて、

その松を笠懸の松といい、その辺を笠懸山といつた。十四町ほどあり、

戦後、百石といふ地名に変つた。（笠懸山長建寺という山号もある）一百

石分に株が残つていた。地主が四角に松並木を植えた。その後、実が落

ちて生えるので、植えないと。（六千石）

七区） 笠懸の松 義經が笠懸に狩に来て、腰かけた。（山ノ神）

金のなる木 大屋の産泰様の近くに、金のなる梅の木というのがあつた。

ワキ村（他村）からもお参りにきた。桐生分に茶臼山がある。三十

米位の穴があり、入口は小さい中は立つてある。昔の鉱山のあと

ではないか。そこから金が出るといつて自分の金をかくしておき掘つて

みせ持つに金を出させてだます人のくれ家であった。（滝ノ入）

二分石 地蔵山の地蔵様のところに二十三夜と書いた石がある。これ

を一分石といい、金を賭けると絶対にかつげないといった。一分が二十

五銭で、一日土方してかせいで二十銭位の頃である。（滝ノ入）

山ヘキノコ取りに行つた時、ソヨソヨ音がするので、見たら天坪

棒のような大蛇だった。後をついて行つたら、田中屋の松山に入つて行つた。

この辺では蛇は家の守り神といひ殺さない。山で蛇にあつた人が、投げたら、三日めの晩に寝ている所へ蛇が来て、肩をベロリベロリとなめられた。つめたいので気づいたという。(大原)

蛇と女 女は山でやたらの所で小便すると、蛇にスソにはい込まれる。穴の中には小便するなどという。スコ(墨)とまちがえられたら困る。もしはいこまれたら、油紙でつかんで引っぱらないと抜けないと。(大原)

禁忌 蛇を指さすと指がくさる。指をかめばよい。イヌの日に麦をまくと、食べない人ができる。(六千石)

大蛇 梨て場にヤマカガシの尻っぽ切れがいたが、直径十センチほどにも見えた。大きい蛇は主なので殺すなという。六尺五寸もの抜けがらがあつて、三本ずつひげが生えていた。

蛇が鼠を見つけると、鼠はすくんで動きなくなり、蛇の方へ吸いつけられてしまう。(大原)

へびに見込まれた話 奈良竹さんが病気になつて寝込んだとき、蛇が

何回殺しても入つてくるので、へびに見込まれたのだろうといった。(大原七区)

三、昔 話

ホトトギス 兄弟がいて、兄はままで、弟は実子なので、兄がまま母は弟にばかり米をくれると思って、弟ののどを切つて調べたら、アワが出てきた。それで弟にあやまって、「百声鳴くから勘弁してくれ」といつて、続けて百と四声鳴くといつた。鳴き声は「オトト恋イシャ、ホットノド突フ切ツタ」と鳴く。(六千石)

めめずとへび 昔、めめずが目を持つていて、へびは持つていなかつた。目と歌どりかえたので、めめずは、どじべたの中で、ヒーじーと

歌うようになつた。その歌は、次のような歌である。

バラント咲いて フッサリなるのは ささげの実
フッサリ咲いて バラントなるのは くりの実

くりの実は ながく咲いて すくすくまーるくなーる。
めずらの花は まーるく咲いて すくすくなーがくなる。(三島)

鳥 野らで昼食を取つてゐると鳥が「アワカア、アワカア」(栗の意)と鳴いたので「米だ」と答えると「アーオカボカ、オカボカ」と鳴くので「田の米だ」と返したら「カツタンカ、カツタンカ」というので「作つたんだ」とどなつてやつたら「アーソーカ、アーソーカ」といながら逃げて行つた。(中原)

名物 この村に過ぎたるもののが二つあり、下のお松と種草屋の半兵衛下のお松は、枯れて根がえしした上に、子どもが十五人坐れるほどだつた。枝にあぐらをかいても、下から見えなかつた。(西野)

村の変つた人

清水金十郎 刺術家。国定忠治をしばりに出てくれと頼まれたが、断つたことがある。武州の鬼ヶ門を打ちこみ、さらにその先生も打ちこんだので、その意趣返して、酒の中に毒をこもれて死んだという。その防具などの遺品がたくさんある。

腰塚紋治郎 博奕打ち、喧嘩が強かつた。

チヨンマゲ由五郎 大正年代までチヨンマゲをしていた。(大久保)

千両 蚊が当つて、千両とれた。気が変になつて、しまいには千両千両といつていた。大尽で、自分たちの門に請願巡査を置いた。太田に監獄があつて、鎖つなぎを集め、その力で開墾させて、身上残した。体に異常がなければ多額納税者になるところだ。(西野)

盲人 両眼失明したが、どじょう取りをした。(西野)

鬼もたまげるような人 頑丈な体格の良い人。(浅ノ入)

力の強い人 一升舟の上に乗つて、米俵を一番目の繩を持ってかつぎ

あげた。(台)

酒の強い人 ヤツさんは息もつかずに一升杯を飲み乾して、シャ

ア／＼して家に帰った。勝負をした相手は全部飲めずに、その上家に帰

る前におつぶれてしまった。(台)

田中正造 植木鉢に鉢巻の土を入れて、枯れてしまつた植木を持参し

て、政府を彈劾したという話を聞いたことがある。(湯ノ入)

火事坊主 寺が燃えた。小僧にきてて、花火をあげてそれで燃やした。

火事坊主といふ。(湯ノ入)

大イチヨウ 金勝寺には大きいイチヨウとカシの木があつた。昭和十

年ころ、イチヨウを伐つたが、伐つた人は車のバクする所でひかれ死んだ。カシの木は風倒された。(大原)

馬鈴薯 木挽きが諸所廻りて来て、はん田のところに木挽き小屋を作つ

ていた。小屋の近くに馬鈴薯の種をうえた。おらちはばーさんなど、五つか六つだった。おかしな木べえまとまつていて、ひっこぬくべえと思つたら、木挽きのじいさんに、みんながそれするな、今にたまが下にならんで、そうしたらくられるからな。それが馬鈴薯なんだね。(明治二十

年頃だ。(西野)

イコーエ主 昔は和尚が二十人ぐらい寄つてイコーエをしたが、話の上

手なのもいる。そのイコーエ主の話。六部が古寺に泊つたところ、かぎつ

つるしのところつたって降りて来る。かぎならず灰は浜へのおしょによ

似たりといつたら、いろいろが浜かおきが見えると答えた。六部が偉い住職になつた。

善光寺の和尚が、弥七に大豆蒔けつていつたら、弥七が和尚を困らせようと思つて、大豆十俵ぐらいたれて、大豆にきりなく肥料くれたら、大豆がきりなくほきた。大豆ひつこ抜くにまさきがいるか、かもちになるようになつた。善光寺のまちになつてゐるが、この大豆の木だ。

和尚が小僧に一本出したら、一升米をとげといつけておいた。小僧

が便所入つてはめいた外しておいた。和尚が入つて、落ちや大変だつて、ア／＼しておつぶれてしまった。(台)

星野某が大久保へいくとき、小松山の捨場までくると、大きな白髪の化かされた話

両手をあげたら、こりや二十人分だつて、両手をあげたら、こりや二十人分だつて、二十人分の米をといた。(西野)

四、怪異

きつねの嫁入り 曇り晩で、雨の降りそつた晩に、愛宕様の方に明るく見える。(西野)

きつねたかり いろいろなことを真剣にしゃべる。オトカガのりうつたともい。(西野)

狐に化かされた話

大穴伏(オオクブ)の行者が、大久保を通りぬけて生品村に向つた。

途中林の中に入つたところ、狐が昼寝をしていた。たまがしてやろうと

して法螺貝をいきなり吹いた。狐は驚いて去つた。行者は面白いこ

とをしたとて生品村の家をまわりいろいろのものを貰い、帰りもそこを

通つた。そこで葬式の行列に会つた。山中に入つてかくれていると、そ

こへもやつて来て、後へ、後へと追つて来た。行者はついに大きな木に

登つた。すると葬列もその木の周囲をぐるぐるとめぐり、果ては木に穴

を掘つて、そこへ仏さま(死人)を入れようとする。さすがの行者もすつ

かり驚いて、法螺貝を三回ふいた。するとあたりには急に何もなくなつ

て、自分がアクララの木に登つてゐることに気づいた。ようやく下りて

来て、大久保まで辿りつき、そこでとげをぬいた。(大久保)

きつね 西のおじごの話で、夜着物をまくつて、せんと、せんと呼んで、深そで渡れないからつていついていたが、道に迷つてきつねに化かされた。親戚に呼ばれて迷くなつて帰つて来ると、綺麗な娘が手拭をかぶつている。どちらへといつても、返事がない。オトカは後にいるといふので、後を見たら、後についた。(三島)

老人が出てきたので、「今晚は」というと、にっこり笑つたから急いで自転車で通り過ぎると、帰りに同じところで自転車のハンドルを握られたので、強く押したら消えてしまった。

三年ほど前に、あさのさんが雨降りにその道を通ったときも大男が蛇の目傘をさしているのに出会つた。

綿打村へ行くとき、八郎兵衛稲荷でよく化かされた。昔は山が深くて、化かされて朝帰りになることが多かった。特に油揚や魚をもつてるとたいてい化かされた。

大正年間に狐が土手に巣をつくっているのを掘り出してつかまえたことがある。

狐除けには、小泉の稲荷様からオビヤツコを借りてきてまつるとよかつた。(大原七区)

オトカの嫁どり 阿佐見の方から山際に光が行つたり来たりした。

百姓稲荷のおともがいて、白狐だつたといふ。

手で望遠鏡みたいにして見ると動かない。離すと動く。

すぐ近くに見えるが、近くに行けば行くほど遠くに見える。(台)

オトカの嫁どりは大したものだ。踏切からよそやんちの方に、提灯つけて綺麗で、子どもにも見せた。始めでついた提灯が一つつく。そのあとツツツツつて、勘定すると、二十一、二二しろにつく。それからトントントンと、上からおつちよこ山の根もとに行くと、ふつと一つ消える。それからバッパーと消えちゃう。あれ消えちゃつたっていうと、またバツとつく。オトカの嫁どりは、さんざん見た。小雨の降る晩が余計だ。(西野)

オトカの嫁どりは山の方に夜提灯が沢山見える。御祝儀で来るかと見ていると、来なかつた。

オトカの嫁入りは、遠くの方で、あかりが見えるが、近寄っても距離が同じだ。(三島)

おとかつき 三峯さまに、着物を持っておとしてくる。お姿を借りて

くる。かや三本でも姿をかくすという。(三島)

オトカ 初ちゃんの裏にヒヨカリ娘が立つて、おじさん駅はどっちだんべつていうから、駅はそこへいつてこづひつてと教えているうちにいなくなつた。駅までいつたがいない。

オトカに化かされないようになつ毛に、つばをつける。煙草を吸う。

山の中で、尻を据えて煙草を吸う。(三島)

むじな 人家のねえところには、きりなくいた。油揚を食べたがる。長岡の祇園に行きながら化される。長岡の秋祭りに餅を持って行つたら、向うで氣をきかして、重箱に入れてよこした。そしたら、その油揚ほしさに、いい娘に化けた。片方は若い衆だから、今晩はついていたら、口はきかねえで、にこにこつてした。橋のところまで来たら、つるつるつて入つた。重箱手にはねえで、油揚とられて、かたこんぶつて来た。

お祇園の帰りに、石橋の方から、笛・太鼓で騒やかにして来たが、ぱつと消えた。

長岡の水車を行つた。大人について行く。粉が挽きあがつたのが、夜中の一時頃だ。夜中に火を吐いて汽車が来る。まだおそかねえんだな、けれどいくらがたがたしても近づいて来ない。そのうち大人だけあって感づいて、あれはうまくねえや、うまくねえやって走つて行つた。オトカの方が芸が上手だ。(西野)

そば煙で、さくを切つたら、むじなの子が、出たり入つたりしているので、二尺くらいとび上つて、穴にかけこんだ。それからあつさん車に粉取りに行つて来て、夜八時になつても帰つて来ない。探しに行つてみるとそば煙をおお深げえ、深げえ、こんなに水が出るわけねえって、むじなの親にたまされて、四畳ぐらい踏んづぶしちやつた。(西野)

むじなは下を向いて、こんでフーフーと鳴く。手前が後にして前に火の玉を出すわけだから、後を叩けば逃げる。雨戸をむじなに持つてかれて、おつかなくて、雨戸をハチマンカラゲにして寝たことがある。(三島)

ミコシ入道 背が大きくなる前に出て人の顔をなめる妖怪。(台)

人魂 今は人魂がとばなくなつた。女は十九の厄年までに見なけりや見ない。年寄りの人魂はふらふらとぶ。(二間ぐら)青のろ引く戦争後あまり見ない。(西野)

去年、四つ角で人魂を見た。始めに三つあつた。その火の玉を、なんだと思ったら、その火の玉が散れたと思ううち、数がふえて、たまになつていて。手拭でふつとばして、拾つてみたら何もねえ。

四十年以上の前になるが、直ちゃんのおじいさんが若くて死んだ時人魂を見た。イコーカらの帰り、十一時じぶん(お鎮守様からお寺の方へ)、布を引いて通つて、お寺の櫻の木の所でぶつかって、当つたようになつて消えた。つぐ朝死んだという話を聞いた。

人魂を十五六の時、見たのは赤い丸くなつた玉で、足が一本、黄色いのが下つていた。(三島)

火の玉 のろを引かず、まつすぐあがる。自分の姿が前にうつる。(山之神)

かね玉 がらがらつて音をたてる。(山ノ神)

金だま かなだまは喰つてとぶ。青いのろを引く。西のじょうやんの庭に軽葉がかかる。軽葉だから上へえ見たら、人魂のいつたとのろを見たことがある。(二十年前に見なけりや見ねえ。(三島))

生れかわり 桐生のすつてつてのが、桐生の新宿の春竜様に年中来ていて、おらあ今に大尽になるんだい、大尽になるんだいといつていて。死んでから組合の者だか何だかな、足の裏に書いてやつたら、桐生の書上に生れた。そんちでは、養子つ子にくれちやつたんだつてよ。すべつて書いてあつたんだつて。すべが、呑電様で、一年中ノラボーしてい

て、どうしよつもなかつた。(西野) ジヨーインジにいた人が、何を食べても当らないで長生きした。死ぬ時手のひらに名を書いてやつたら、桐生に生れた。墓場の砂でおとさなけりやおちねえで、大評判だった。(三島)

五、諺・酒・落

諺 「じまん・こうまん・ばかがする。」ほらをふいたり、えらがつたりすることは、馬鹿者のすることの意。

「口あいて、こぞう見せる。あけび料(山野に自生する、あけび科)かな」とい、男は無用の言葉をほくのではないことの意。

「口あいて、こぞう見せる。奴さんビン(無用の口をきくのは身分の低いさむらいであることの意)。

「芝居は無学の教育(芝居は無学の人に対する教育である。(中原)やぶりまんがは通らない。道理に合わないことは通らない。

固いものから火が出る。非常に固い人に、案外間違いが起きる。固かんべえと思つたが、使い込みしたとか。

隣りのものは小糖香煎(隣りで貢つたものは、品が少いからうまい。手を下さずに食べるからうまい)。

席織りはこもに寝る。席屋に、自分の使う席がない。生活に追われて、自分のうちは作れない。紹屋の白拘(行つて来るほど違う)。

たまると汚くなる。煙管と——。(山ノ神)

「米糖三升(五・四リットル)持つたら婚に行くな」といわれていたが、娘として村に特別の扱いはなかった。ただ消防団のかご背負いが婿に来た者の仕事であった。(中原)

たとえ天神様の脇差しのようだ。反つては、曲つていること。

金時がぶつちめにかかつたみてえ。まつかになること。

カクマントロー(かまきり)が断食したみてえ。解せていること。

もぐらが石につかえたようだ。もたもたしていること。

縁にいった晚で、いいなりになる。売つたり買つたりする場合、いいなりになる。

こぜの小便のようだ。うすいこと。

大尽のお茶じいやだぜ。ぬるいこと。

法華の太鼓、段々よくなる。

つばくろの三番子。口数が多い。

一風勝負。瀕死の重病人。

だだつ子の子守。骨が折れて、効果がない。

提灯屋の小僧、骨折つて叱られる。

塙田様より新田様。遠くの塙田様をたよるより、うすなきの新田様

をたよる方がいい。遠くの親戚より近くの他人。

夏の昼うどん。ちょうど時期に合った御馳走。

ゆるふん。そういうふんの返事じやだめだ。

かーらちーのほけたみないなこというない。使いのものにならにい。

つきとばせば、ひっくりけえりそなな家。(山ノ神)

しゃれ、社日の金物で、切れっこなし(西野)

六、謎

池に反り橋、团子チンコ何(鉄瓶)

逆さ井戸から大蛇が出て、側で小鰐がとめるもの何(いろり)

木道、金道、からくり道、急いで通る奉公人何(鉄砲)(台)

西野村とかけて何と解く、裸馬と解く、その心は、倉(鞍)がない

朝のまましまっておく共同の倉はあったが、一軒一軒貯蔵しなかつた。

(西野)

破れ障子とかけて何と解く、まま子ととく、その心は、見る度貼り(張

り)たくなる。(山ノ神)

八疊の間とかけて、何ととく、動物二匹ととく、その心は、四角間(鹿

熊)。(西野)

七、方言・その他

アオチ、塙みてえのがあって、誰の所有でもない政府の土地、塙んどうみてえな、誰も取り手がねえみてえな土地。

アカチ、塙みてえのがあって、誰の所有でもない政府の土地、塙んど

クサツケズリ、おら鏡見ねえことにして。ひげする時はどうします。

錢見ねえで、クサツケズリだ。

カラミズ、「氷の入ったのを、早く飲まないと、カラミズになっちゃう」。(三島)

木の実、ウマノマラ、うしころしの実のように赤く、霜が降ると、甘じよっぽくなる。山境になる。

デベソ、花の地が黒く、ぱつんと出る。これも霜が降ると、甘じよっぽくなる。(山ノ神)

スモーテリバナ、すみれ(三島)

ナカヨシゲサ、ひっぱると皮がとれてずいが残る。長いといい。

カーラチゴ、おきなぐさ。若い筆の先のような時、カーラチゴからい

もん、なめてみたら甘いもんと唱える。(山ノ神)

チンバラカイタ、むかっぱら立てた。頭に来た。チンバラカイチヤツタカラキチャッタ。(西野)

カマキリ、オガミムシという。腹の中にはハリガネ虫がいる。オガミムシの頭を取つて針をさし、壁にさしたこれをハリ・トケなどのささつたとき取つてソクヒでねつてつけると、トケは抜けるという。(大原)

カマキリ、カクマン、カマギツチヨ、トウロウともい。(台)

トウロウムシ、カマキリ(カマギツチヨ、カクマン、オガミムシ)に似ているが、足が長くて細い。喰えねえでひばしになつたよ。(滝ノ

カマギツチヨとトカゲ
トカゲは色が青紫で毒をもつてゐるが、カマギツチヨは土色をしてい
る。（大原七区）

アリ アリングド

カマキリ オカンババア オガミムン ハイトリババア
トカゲ カマギツチヨ（黒い方をいい、緑の光る方はトカゲという）
アヤス チョウス

コワカイシ——若い者のこと

ドングルミ——混せ合わせること

ニボウトウ——うどんの巾の広いもの。

トウザギ——普通時に着る着物。

バクメシ——大麦を煮て米代りとする飯。

ジツコ——その土地で生れ育つた人。

ウツツラ——表面のこと。（中原）

鳴き声 蚊はブーン、馬はヒーン（六千石）
あくたれぐち 「大久保のすけランプ」「大沢学校ばろ学校、机がな
くて、みかん箱」「大原あわめし、十六べい（はい）へいたれ」「米喰つ
ていたら出かせぎに来るな」（中原）

大久保のすけランプ 大久保は昭和三年に電灯がつくまで、ランプ
を使つていてた。大原はすでに大正八年に電灯がついていたので、あさけつ
ていう言葉（大原）

光り輝く長円寺、馬糞ばこりの胎糞寺、小便ための十念寺。（西野）

弥三天皇、ショウウ天狗、オシンテンヘエ、鬼子母神（キツツアン）、团
子のくいかけだ。ガンコ者一家の悪口（淹ノ入）
太つているもの 横に歩くんだか、縱に歩くんだか。ヨツチツコラヨツ
チツコラ、みんなヨツチコヨツチコするうち帰つて来る。（西野）
嫁に行くなら戻塙へ。戻塙の女は嫁にもらうな。

芸能

はじめに

萩塚本町の芸能で、とりわけすばらしいものはみあらなかつた。しかし、地芝居などは古く盛んに行なわれたようであるが、すでに消滅し再現も不可能で、ただ古い舞台等の一端が村に残されているので、それにより当時の様子を判断する以外に、古考もそれについて知る者もほとんどなく残念であつた。しかし収獲つたのは神楽（ひよつとこ踊り）にカンカン踊りが結びついて行なわれていたことである。神楽の中で道化舞として、カンカン踊りを取り入れて行つたものと思われるが、それにしてはカンカン踊りが萩塚に残されていたことは誠に貴重と考えられる。県下では多野郡上野村乙父にカンカン踊りがあるだけで、他にはみられない。萩塚のカンカン踊りはひよつとこ踊りに結びつけ、四つに分けて行つているのがめずらしい。民謡やわらべ唄でも特筆すべきものはみあたらなかつたが、草角力の中で歌われた芭句が発見できたのはしばらくしかつた。特に草角力の力士から採集できたことは貴重で、またさわ的な民謡等が現実に民謡とされている時代だけに、そのことにたずさわった本人から、舞をともなつての歌は「本もの」の民謡に触れた感があつた。わらべ唄については、小学生と中学生から採集したが、全国共通の「あんたがたどこさ」などのものが多く、ここにもテレビジョンや、ラジオによる影響が感じられ、さしつめ地域性に富んだものはあげられなかつた。

今回は都合上一日間だけ調査を行なつたにすぎず、過去に行なつた私

個人の調査資料も加えてまとめた次第である。（酒井正保）

一、神楽（ひよつとこ踊り）

寺下では三島神社の祭典を、古くは春四月三十日と、秋十月三日に行なつた。戦後もなく春は四月三日と十月十日に行なうようにした。これは神主の都合によるという。昔は春秋の祭典にひよつとこ踊りを奉納した。時によつては春だけ行なつたこともあるという。寺下では神樂のことを「ひよつとこ」といつている。三島神社には神楽殿もなく近くにある「新海靈神」（おんたけ様）の境内に特設の神楽殿を作る。

三丈程の杉柱を四本土に埋め、地上四尺程の高さのところに床板を張り、その上で舞うようにした。屋根は青竹をゆいつけの上にヨシズ

をして屋根とした。

(1) この神楽の伝承先

この神楽が寺下に伝承さ

れたのは、八十四年前であ

る。寺下の普塩神社の神主で、

さんが十三才のとき、寺下

のおとなたちと一緒に、強

いよつとこ踊りの上手な神

主がおり（通称ひよつとこ



(特設神楽殿の構造)

から習ったという。

(2) 演奏楽器

太胴

締太鼓

笛

座数	一つ	二つ	一つ
----	----	----	----

(3) この神樂の座数は十二座からなっている。

四方がため舞

天狗舞

すみよしの舞

扇の舞

刀小屋根舞

幡荷様の舞

すさのうのみこと舞

かねやまひこの舞

岩戸開舞

しるこ舞

問答

かごつちの舞

以上十二座からなっているが、この舞の他に「ねんねこ踊り」と「カンカン踊り」がつく。これら二つの舞は、十二座中真中程で観客が特に集つたところで、道化踊りとして行なわれる。ねんねこ踊りは、男性が女にふんして一人で、樂器の囃子に合わせて行なう。このねんねこ踊りが終るところで、カンカン踊りの者が一人、ひょっこり顔を付けて踊る、衣裳もひょくとこのものを着て行なう。踊る者も歌いながら踊るが、囃子手が踊るまわりでカンカン踊りの唄を歌う。

このカンカン踊りは四つに分れている。(1)カンカン踊り、(2)山寺、(3)いくべえ帰るべ、(4)お医者さん。

① カンカン踊り唄

カンカンノ一

キユーノデス コリヤ

サンジョナライーサーハミカンサコリヤ

テッベンタイコデヤーハーノハ コリヤ

ヤーハーノハ一

メンコノオサイデツンツラツンノツ

オヤマカフーリン

ヒックリけえつちやばきんだ

ビービーピットコトオッペコベーノベ。



カンカン踊りの伝承者の新井孝平さん
(寺下)

② 山寺

山寺の一山寺の一コリヤ
鐘つくしよもくがひいふのみ

ひいふのみ一

つくたびつくたびビックリシャックリト一
コリヤビックリシャックリト一

オヤマカフーリン、そばやの風りん

ひっくりけつちやばっきんだ

ペツペツベットコトオツベコベーノベ

③ いくんべ帰るんべ

いくんべかえるべ

そらうそだんべ

やつぱりオメコがおつたつだんべ

ヒックリケツチヤばっきんだ

ペツペツベットコトオツベコベーノベ

④ お医者さん

お医者さでも検査のときは

やつぱりオメコがおつ立つだんべ

ヒックリケツチヤばっきんだ

ペツペツベットコトオツベコベーノベ

(寺下)

このカンカン踊りは、踊りながら仕草の中で男根、女陰を手で形どつ

て踊るので、観衆は大きく湧いたという。

カンカン踊りは現在、多野郡上野村乙父部落に残されているだけで他

にはみられない。上野村から片品村の木挽が覚えて行き、カンカン踊り

を行なつたというが、現在片品村で行なえるものはない。神楽の中にカ

ンカン踊りを取り入れて行なつたことは日本的にめずらしいことであ

る。現在寺下の新井孝平さん(明治四十年生れ)の他に数人の者によつ

て伝承されている。

曲節も上野村のカンカン踊りとほとんど同じであるが、寺下のもの

方の終りの部分に、ひょっこり踊りの離子の入っているのがおもしろい。

中国から伝った清樂であるだけに、歌詞の意のわからないのが特徴であ

る。踊りも上野村のものの方が、ゆったりとしている。寺下のは道化舞で行なうだけあって、エロチックな踊りである。しかしテレビやラジオ

のない時代に、神樂にこうしたカンカン踊りを入れて行なうところに、庶民性の表現がなされており、ここに里神樂の特徴がみられる。

この寺下では神樂の中に、このカンカン踊りの他に、大正末期には金色夜叉など時代性のあるものを地芝居的な形として行なつた。

この神樂の付道具である、太鼓や笛、面、衣裳などすべて、栃木県足利在の大町村から借りて行なつた。昭和二十四年頃まで行なつたが、その後中止となつて現在に至る。

二、民謡

(一) 馬子唄

大原町の松葉ベンさん(八十八)が歌つてくれた。大原の大宮酒造屋

屋から駄賃びきが、馬で引く運送車で、東京在へ酒やしそうゆを運び日

帰りにする。行き来する街道すじを歌つた馬子唄を覚えたという。

馬方は二人一組でやつた。地元の馬方であった、二人一組で運送車は

二輪車で、二斗樽や一斗樽を山と積んで運んだ。正月になるとカイシキ

ゼンに酒粕を乗せ、大原の全戸に大宮の酒造屋(岡崎ともいつた)でく

ばつてくれた。

馬方節(馬子唄)

○ 青よくなよもぐうちや近いハイハイ

森の灯がハーケー見えてきたハイハイ

○ はこね八里は馬でも越すがハイハイ

越すに越されぬ八丈島ハイハイ(大原)

(二) 角力甚句

大原七区の島田源次さん(四股名源次山)は、佐波郡東村田部井出身の若浦親方に、二十三才からついて相撲を行なつた。長建寺の庭で昼夜



草相撲の手力士だった角力甚
句の歌い手田島源次さん
(四股各源次山)(大原七区)

てのぼりの下には商店が多く出たという。
巡業先で弓とりひきをすれば「弓とり代」がもらえ、どんすをかける
と「どんす代」が、相撲甚句をうたうと「甚句代」がもらえた。
また大原には行司専門の人もいた。町田政太郎、よび出し専門の者は
家住玉六などがあった。

相撲甚句を歌うのは、力士が土俵入りのときにうたう。力士はどんす
をかけ交差に歌いながら土俵の中で踊る。

相撲甚句（その1）

あはあ日本集める川づくし

上州で名高い利根川で

野州で名高いきぬ川よ

信州で名高い信濃川

江戸で名高い江戸川よ

にこって流れるすみ田川

天を流れる天の川

あさだのにつきが大井川

成田こりしょはかつら川

すしやべん当うまそにつつむはひげの皮

芸者おじょろはうそのかわ

芸者おじょろにだまされる

すもうとりなんぞがよほほ

ああばかのかわだい

ああ一貫一貫がやかんの手

向かべぬのがしゃかんの手

けいこした。昼を遊び長いこと夜になると見物衆が多く来るので、
誠に盛会であった。また一月十五日から十日間星とり相撲を行なった。
また四月の桜の花見時も星とり相撲であった。星とり相撲で大関を投げ
たり、上位の力士を投げると五十銭もらえた。寒のうちに寒けいこを行
ない、六十人程の相撲会に入っている者が、はだかで練習した。この相
撲会にも中央のものと同じように、

大 関 一人 (東西に一人ずつ)
関 脇 一人
小 結 二人
前頭一枚目
一枚目

三枚目 (青年衆)

その他小学校二年生位からこの草相撲会でいこした。
村の祭や、近村の祭りには招待相撲がありそこで行なったり、正月と
四月の花見相撲が終ると荷車に荷を積んで巡業に出た。巡業には春立つ
た。大原からは五人程の力士が立った。埼玉の秩父、東京近在、栃木県
の佐野、前橋などと廻った。
巡業先では、各地から來た相撲とりの力士の名をいれたのぼり旗があ
げられる。のぼりは巾一尺二寸、長さ一丈一尺のものが多かった。そし

夜中に出したが兄ちゃんの手

その手をつかんでだまされ
だまされ

相撲甚句（その2）

正月角に松が立つ

二月はつうまおいなりさんびやっこ立つ

三月節供にやひながたつ

四月八日シヤカガたつ

五月五日のぱりたつ

六月てんのさまみこしたつ

七月夕ナバタさきがたつ

八月十五夜すすきたつ

九月は菊みかんがたつ

十月出雲に神がたつ

十一月は明治節でどこの角にも国きたつ

十二月となるなればみそかのかんじよで
立たれた私なんぞはよほほ
ああさむけだつよ。（大原七区）

（三）端　　唄

丸い玉子も切りよで四角
ままで四角でやわらかに

水の流れは止めればとまる
とめて止らぬ恋の道

水もくよくよ川端柳

水の流れをみてくらす

（四）はたおり唄

はたがおれないはた神様よ
どうかこの手があかるように（大原）

三、地　芝　居

大正のはじめ頃湯ノ入では若衆が掛小屋を、温泉神社の前や、山神様の境内に建てて行なった。

明治のはじめ頃までは、他村にまで芝居しに行なったという。特に生品村などには依頼をうけていったという。その頃の舞台まわしは、故植木一郎や、町田友次郎が行ない幕ひき役は諸田武一郎らが行なった。

芝居の組を若衆といい、小学校終ってこの芝居組に入るには、酒一升もって行って入った。

芝居の出し物は猫驅動、岩見重太郎（猿退治）などが得意だった。湯ノ入にはよい舞台があつたが、小道具なども他村に貸したりで現在はほとんど残っていない。舞台の大きさは間口六間、奥行き四間程のものだったという。

湯ノ入は芝居熱心なところで、集会所も芝居が出来るようになつてある（明治の終り頃建たた）が一度もここをつかつて芝居をやることは出でなかつたという。

この集会所に芝居に当つた隙子が数本使つてある。當時はカラカミだけでも六十本もあつたという。湯ノ入の地芝居について、古文書などの記録も、また當時のことを知る人も数少く、前町長の今井氏等の記憶をたどつて載いた次第である。（湯ノ入）

（一から三までの項目は酒井正保氏の調査報告である。）

四、子供の遊び

子供の遊びの種類 竹馬。なわとび。角力。ブツツケ。ネッキ（山か
らすじょう）のいい木をみつけてきてやる。地面にさして相手のをたお
す。）コマ（木に金の輪がはまつていて、心棒も金。相手のをたおす。）



山之神村 岸又八の作といわれる地芝居の飾り物（その1）（中原）
(阿部 孝 撮影)



同上（その3）



同上（その2）



同上（その4）



同上（その5）

神
まり
かがつて作る。はずまないから、力を入れてついた。（三島）
竹馬 竹がなくなり、雪が降らなくなつたので、今はあまり作らない。
ためかつぎ・かつぶしけずり・ぬきとりなどやる。（山ノ神）

木ん馬 足に木をつぱりつけ、雪の日にすべる。(山ノ神)

チヨーレン (調練) 兵隊二つこ、月明りでやる。(山ノ神)

カツベガシ トッコのことをこの辺ではこういう。小学校を卒業した
ぐらいの子がやる。(台)

竹の玩具 機関銃・水鉄砲・はじき鉄砲・かたかた・竹なんこ(山ノ
神)

さつまじろ さつまの苗床に、山から木の葉を取つて来て踏み込む。

それがちょうど子どもの遊び場になり、とびこむ。(山ノ神)

ドドメつき 竹の箇に、ドドメを入れ、桑でてつき、晝める。子ども
の大好物だった。(山ノ神)

かーらちこ かーらちこ晝めちや、びんたば出一ろつていう。(三島)

それを掉そつと、眞差しさんに聞けば

筆は三間、小鳥は一羽ね

そこで小鳥が申することにや

お前鮮差さんか、わしやもすのおとり
向う通るは鶯が一羽ね

御縁あるなら、また来て掉してね (三島)

カラチゴ (翁草) の唄

カラチゴ カライモン
ナメテミリヤ アマイモン (大久保)

五、そ の 他

正月に村へくるもの 元日に初絵売りがきた。初絵は縁起のよい七福
神の絵などがあり、上から読んでも下からよんでも同じ文句になる「と
うのねむり」の歌が書いてあつたりした。
読み入り 瓦板のようなもので、事件を口上で述べて回りあるいた。

地蔵様や觀音様を背負つてくる人もあるった。(大原七区)

チヨーレン (調練) 兵隊二つこ、月明りでやる。(山ノ神)

力石 佐野から大神樂、猿まわし、国定からテロレン祭文 (猿飛佐助
だとかを語つた)、桐生・太田から紙芝居などが来た。(滝ノ入)

こぜ 新潟の蒲原あたりから来た。五人位でまとまつてくる。目の悪
い人が多く、十一、三才の女の子が手ひきになつてきた。

毎年十一月一ヶ月位の間に来て、懇意な家に二晩泊つて、流行歌。

春雨・ニアカリ・三サカリ・一段物などをやつた。(滝ノ入)

ひよつと 筒井村横町から、百姓の若衆で作った秋葉会というユー
モラスな一座が来た。この土地では神樂といわず、ひよつとことと言つ
ていた。(中原)

力競べ 石で二十五貫がつぐ。馬頭觀世音 (二十四貫) をかつぐ。湯
の入の六地藏は二十六貫あるが、かつげるものが半分ぐらいた。若い時
でなければ、馬鹿げたまねをしない。俵に水を桶杓 (四合くらい) でか
けるとかつけない。(三島)

力石 土俵を作つてかついた。二十三夜様がちょうど二十三貫あつ
た。盛りの者はかついた。(山ノ神)

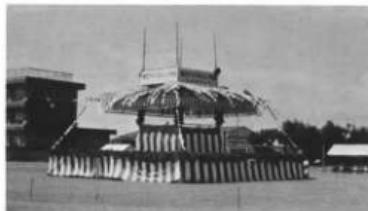
角力 不動様のある沼 (今は水田) の畔が広く、そこで角力が行われ
た。不動様のすぐ上の浅間様の改築時、たしか大正六、七年頃やつたの
を覚えてる。浅間神社に角力の額がある。旧戻塚 (台、滝ノ入、湯ノ
入、西野、山の神、中原、杉塚) でやつた。

戻塚本町に角力協会がある。今でも大原でやっている。角力は景品や
何か金がかゝるのでなかなかやれない。

大正の初年、十両の若林という人が、大原に住みついて教えた。桜の
咲く頃角力があつた。(台)

競馬 大正頃、戻塚往還の十字路から左でやつた。ノックリ馬場で、
上から走つて来る。(山ノ神)

八木節 昔は口説き節であった。そのころは警察の取締りもきびしく、
かくれて練習するが、音をたてるのですぐわかつてしまつた。(大原七区)



盆踊りのやぐら（体力づくり民謡大会）（寺下）
(阿部 孝 撮影)

民 家

はじめに

このたびの民家調査は予備調査と本調査の二回の調査を行った。予備調査は七月月中旬、教育長水田隆一氏・事務局長案崎英夫氏の御案内によつて、町内の民家四十二棟を順次訪問し、外観及び室内を簡単にながめさせていただき、あわせて聞き取り調査を行つた。この中から比較的改造の少ない家を選び出し、予備調査件数の丁度半数に当る二十一棟を本調査対象民家とした。

本調査対象民家は地区別に整理すると第一表のようになる。

第1表 地区別による調査民家の棟数				
地 区	調査民家の所有者			
	山ノ入	西野	中原	湯ノ入
斎藤角太郎	小川守太郎	藤生長蔵	新井丑五郎	藤生新三郎 達也郎 加藤一太郎
1	1	1	1	5
				棟数

一、調査民家の形式分類と編年

二十一棟の調査民家は平面形式より区分すると六つの型に分類される。これらの平面および細部形式を検討し、さらに間取によって建築年代を推定して編年表を作成すると第二表のようになる。

寺下	台
松村多一	小林秀男
佐藤政次郎	坂本市藏
大原	
大久保	
大千石	
合計	
21	1
	5
	3
	1
	2

第二表 藤塚本町民家造構の形式分類および編年表

所 氏 有 者 名 地	間取の形式		構 造				柱 間 装 置			設備・仕上			建 築 に つ い て										
	一 居 取 取	二 間 間 取 取	広 間 間 取	四 間 間 取	多 屋	町	土 台	大 黒 柱 位置	の 間 隔	表 柱	表 の 構 造	大 黒 柱 に 付 け る (コ ン ク シ ン ト ス テ ム)	デ ザ ー (コ ン ク シ ン ト ス テ ム)	ン ド の 境	サ ンド イ ン シ キ	ザ イ ド コ ロ ラ ム	ト コ	エ ン ガ ワ	大 黒 柱 上	建 築 さ れ た ま ま の もの	不 建 築 さ れ た ま ま の もの	家 柄 (役 職)	推 定 建 立 年 代 (世 紀)
坂本市蔵 古	○			○			○	○	○				○	○	○					○	農	18末	被官百姓
松村多一 寺下	○			○			○	○					○	○	○	○				○	〃	19初	おばあさん(81才)で4代目
佐藤政治郎 大原	○			○			○	○					○	○	○	○	○			○	〃	19中	当主(69才)の2代前に建つ
小林源作 六千石	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○			○	〃	19初	六千石で最古の家と伝える
齊藤角太郎 滝ノ入	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19中	熊五郎(4代前)が建つ
今井丑五郎 湯ノ入	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	18中	
加藤一太郎 中原	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	18末	
北爪林一	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19中	当主で4代目(当主41才)
清水長十郎 大久保	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19中	当主(65才)で3代目
長沢林太郎	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19初	古家を買って建替した、当主で4代
小林秀男 古	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19初	古家を買って建替す、時期不明
小川守太郎 山ノ神	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19初	庭の杉木(170年位)と同年と伝える
新井達也 中原	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19初	
藤生新三郎	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19初	嘉永4年71才沒の人の代に建てる
清水福太郎 大久保	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	名主	19中	慶応2年の建立
清水浅男	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	農	19中	浅次郎(M.34年73才没)が建つ
久保田瀬	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19中-末	当主の母(M.3年生)が8才時に建つ
藤生長藏 西野	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	〃	19末	当主(86才)が5才の時建つ
新井真三郎 中原	○			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	名主	18末	四郎右衛門(文化元年没)が建つ
椎名敏夫 大原	〃			○			○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	名主	19中	火災にあい元治元年に再建
町田新一	〃			○														旅籠	19中				

当地方の民家は十九世紀以降の幕末のものが多かったためか、間取りによつて建築年代を推定できたのが二十一棟中十四棟であつて、六七パーセントに達した。このためかなり精度の高い編年表が作成できたものと確信する。

民家の規模は小から大へ、また平面における間取りは少から多へと変遷してきたと考えられている。このことから調査遺構にみられた平面形式を溯源的に順次列挙すれば次のようになる。

- ① 一間取型
- ② 二間取型
- ③ 広間型
- ④ 四間取型
- ⑤ 多間取型（仮称、四間取より室数の多いもの）

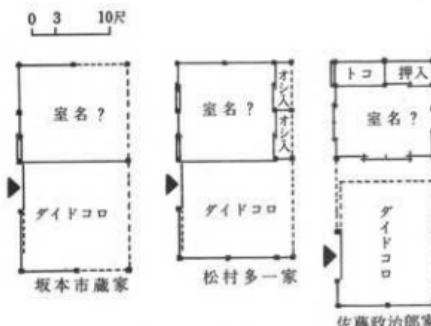
以上五つの平面形式はいずれも農家にみられる型であるが、この他に町田新一家のように妻入りで、入口の中は一般に「通り庭」とよばれる奥まで通じた土間が設けられ、この土間に面して縦長に各室が配置される。町屋の流れをひく形式のものもみられた。もちろん町田新一家は農家ではなく、「銅街通」に面した旅籠である。

次に先に掲げる五つの形式について、平面の変遷を主に考察しながら、順次それらの特質を述べることにする。

二、一間取型

この形は溯源的に考察して、現在民家遺構中で最も原始的な形態を示すものであると考えられている。

古い堅穴住居から発展した民家平面は、やがて正方形あるいは矩形に近い堅穴住居となり、次には坂本市藏家の示す復原平面（第一回参照）のように土間と床上に分割された一間取型に発展していくものと推察されるからである。



第1図、一間取型（復原平面図）

坂本家の規模は梁行約二間（約十四尺）、桁行約四間（約十六尺）で、桁行の中央部を境に左側を床上、右側を土間（ダイドコロ）とし、開口部はダイドコロの出入口と床上に一間幅のものがあつただけで他は恐らく土壁で囲われていたものと思われる。

建築年代は十八世紀末頃と思われ、そう古いものではない。

村松多一家は坂本家と同様の規模をもつ一間取型であるが、床上の室の裏側に押入が付き、その前面がすべて開放されて建具が入っている。当家はいい伝えによれば、建立してからおばあさん（八十一才）で四代目になるというところから、「九世紀初期頃に建築されたものと思われる」。

佐藤政治郎家の規模は梁行二間、桁行五間で、前記二遺構より桁行規模が一間拡大しているため、その分だけダイドコロの幅が大きくなっている。床上の室は上手の表側にトコを、そのわきに押入を配しているところから一室ではあるが、客間のような体裁を備えている。そして、表側だけでなく裏側も間が開放され、建具が入っている。また、床上の室とダイドコロの境にも建具が入つて、床上の室はダイドコロから独立した空間として意識されている。当家は当主（六十九才）の二代前の人気が建つたということから、

一九世紀中期頃の建立と推察される。

以上のように一間取型の民家でも、建築年代によって柱間装置に大きな相違がみられ、時代が下するにしたがって、土壁が消滅し、そこに建具が入って、開放的な空間へと変遷して行く様子が窺われる。また、トコや押入の設備も古いものにはみられないが、新しい造構では設けられており、さらにダイドコロと床上の境では古い造構は建具がなく、内部が一つの空間として意識されていた。しかし、新しいものではその境に建具が入り、床上の室はダイドコロから独立して一個の空間となっている。

三、二間取型

民家の規模は溯源的に考察すれば、小から大へ发展し、それに従つて間取も少から多へと変遷していくたと先に述べたが、それらを裏付けるものの「要素」として、架構技術の発達が考えられる。

小林源作家の規模は梁行三・五間、桁行六・五間で、一間取型造構に比較して梁行において約一・五間、桁行では一・五間の一・五間位増大している。

二間取型における床上の室は「ナンド」と「デー」であるが、ナンドは主に裏室に用いられ、デーは接客室として利用された。このためナンドは裏側に配置され、古いものは出入口以外に開口部はなく、土壁で閉められた閉鎖的な空間となっていた。デーは客間として用いられたため、小林源作家ではトコや押入が付いている。しかし、当家より古いものではデーといいともトコ・押入が付いていないかたものと思われ、表側は坂本市蔵家のように半分が土壁で閉鎖されていたものであろう。

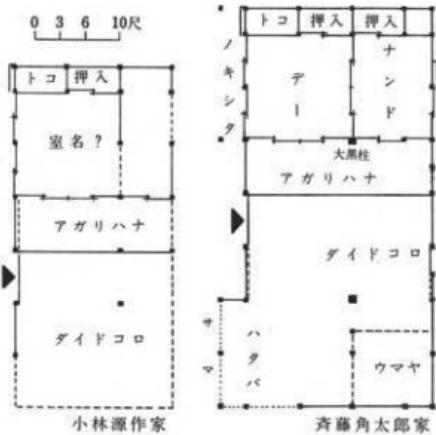
小林源作家は六千石では最古の家と伝えるが、平面や架構および細部手法により考察すると、そつ古いものではなく、一九世紀初期頃の造構と思われる。

斎藤角太郎家の規模は梁行四間、桁行七・五間で、小林源作家より一

回り規模が拡大している。当家は四代前の熊五郎が建ったといい伝え、十九世紀中期頃の建立と推察される。

当家は小林源作家と対比して考察すると、随處に新しい特徴がみられる。それらを列挙すると、(1)規模が増大していること。(2)デーとナンドの境の土壁が消滅して、建具になってしまっていること。(3)ナンドの裏側も半分が開放され、建具が入っていること。(4)ダイドコロでは「ハタバ」が設けられ、その前面が開放されていることなどである。

四、広間型



第2図 二間取型（復原平面図）

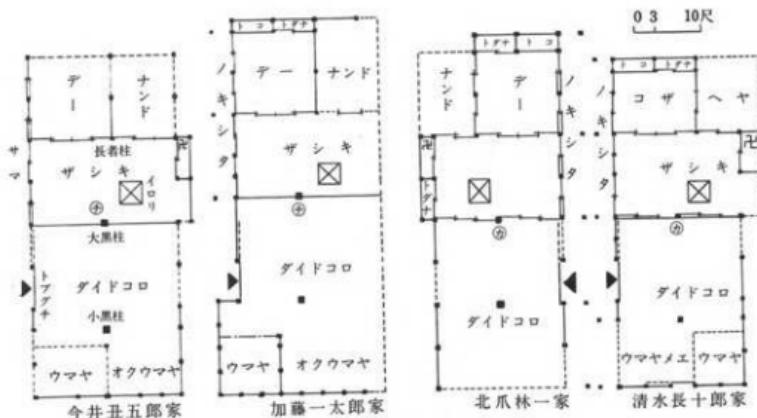
ハナの幅が発展して、そこをザシキとよんでいるものを「広間型」といふ。三つに区分された床上空間はやはりナンドが寝室に相当し、デー（コザ）は接待やその他の「公」の性格を持つた対社会的空間として位置づけられている。ザシキの機能はここにイロリが設けられているところから、家族の居間であり、食事室であり、さらに床上の作業空間（仕事場）でもあるが、また、日常の軽い訪問客のための対応にも使用されるという複雑多面的な兼用空間であった。このため古い造構ではザシキとダイドコロの境に建具を用いず、開放されているところから、ザシキとダイドコロは機能的に結びつきが強かつたことを示している。

今井丑五郎家は調査遺構中で最古と思われるもので、ザシキ表に開口部の古い手法であるサマを残している。大黒柱はチヨーナ仕上げで、デーとナンド境は土壁で閉鎖されている。またデーの妻部には現在奥行の浅いトコとトダナが設けられ、ナンドの妻部にも押入れが設けられているが、トコ柱が中古のものであり、これと対応する柱面には板が覆いかぶせてあるところから、当初はこの部分が妻部の外壁であったものと推察する。すなわち建築当初のデーにはトコやトダナはついておらず、ナンドにも押入れがついていなかったものと思われる。なお、ザシキとダイドコロ境では建具を入れていないなど、今井家は古い様式をよく伝えている。

今井丑五郎家は建立についてのいい伝えや記録を残していないが、平面や架構および細部手法等により十八世紀中期頃のものと推定される。

加藤一太郎家は今井家より幾分建立年代が下降すると思われるもので、ザシキ表のサマが消滅し、デーには奥行の浅いトコ・トダナが付き、表側にノキシタが設けられている。しかし、デーとナンド境は土壁で閉鎖され、ザシキとダイドコロ境では建具を入れず開放されており、大黒柱の仕上げもチヨーナであるなど今井家と近い様式が窺われる。

加藤一太郎家も建築についてのいい伝えや記録を残していないが、以上に述べた特徴や架構および細部手法等から十八世紀末期頃に建立され



第3図 広間型（復原平面図）

た造構と推定される。

北爪林一家は加藤家よりさらに新しい特徴を示している。例えばデーとナンド境の土壁が消滅し、ここはすべて建具が入り、サシキとダイドコロ境にも建具が入って、サシキはダイドコロからの連続性を断ち切つて、独立した一個の空間となっている。すなわち、サシキは居住性をより高めた空間となっている。

当家は当主（四十一才）で四代目になるといい伝えるところから、初代の人が建ったものとすれば、十九世紀中期頃の建立と考えられ、建築式から推してもその頃のものと思われる。

清水長十郎家は北爪一家と同様な特徴を示しているが、ヘヤとコザ境およびコザ表の中柱が省略され、これらの部分に差鶴居が入っている点がより新しい特徴である。

当家は当主（六十五才）で三代目になるといい伝えていること、および建築様式から十九世紀中期頃の建立と推定される。

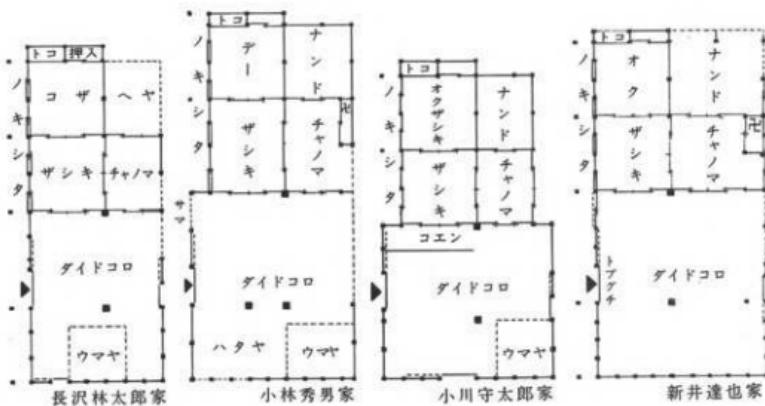
五、四間取型

調査遺構中で四間取型が最も多く、半数に近い九棟がこの形式に属するものであった。

四間取型は前述の広間型におけるサンキをテーとナンドの間仕切延長線上で仕切ったものであろうと思われる。したがつて大黒柱もこの間仕切線上に配置されている。

長沢林太郎家・小林秀男家は特徴がよく似ており、四間取型遺構では古いものなかに入るであろう。デー（コザ）とヘヤ境は土壁で閉鎖され、ヘヤとチャノマの裏側も開放されず、土壁で閉鎖されていたものと思われる。

長沢林太郎家は古家を買って替てから、当主（六十四才）で四代目といい伝え、建築様式と併せて考察すると、一九世紀初期頃の建立と思



第4図-1 四間取型（復原平面図）

われる。小林秀男家は中原の藤生家を買って再建したものと伝えるが、再建の時期についてはいいつたえていない。しかし、建築様式から前記の長沢家と同時期のものと思われる。

小川守太郎家はチャノマの裏側の土壁が消滅し、建具が入っているため、裏側からも採光および通風を可能にしている。

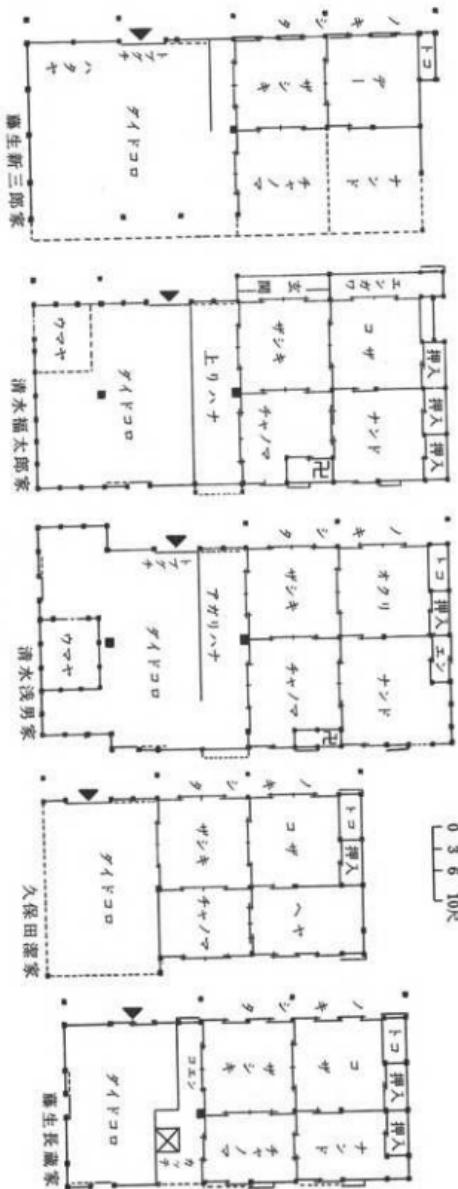
当家は明治二十三年生れの人（昭和四十一年没）からのいい伝えによれば、庭にある杉の木（一七〇年位経っているといわれる）と同年位であるといわれ、また、初代は天保三年に没している。これらのことと、

建築様式とから推察して当家は一九世紀初期頃の建立と推定される。

新井達也家はナンドとチャノマの裏側が半分開放され、チャノマだけでなくナンド（も裏側より採光している。しかし、オク（テー）とナンド）境は前述の三棟と同様に土壁で閉鎖されており、古い間仕切手法を残している。

当家は建築についてのいい伝えや記録などを残していないが、一九世纪初期頃に建立された遺構と思われる。

藤生新三郎家は裏側を桁行全体にわたって改造しているため、この部分の復原は困難である。当家の前述した四造構と異なるところは、ナン



第4図-2 四間取型 (4層平面図)

ドとデー境の間仕切の土壁が半分消滅し、ここに建具が入って、ナンドは

デーから出入ができるようになっていることである。これはナンドとデー境の間仕切として新しい手法である。

当家は市左衛門（嘉永四年没）の代に現在地に移り住んだとい伝えているところから市左衛門が建築したものと思われる、十九世紀初期頃に建立されたものと推定される。

清水福太郎家は藤生新三郎と同様にナンドとコザ（デー）境の間仕切の半分を開放し建具を入れ、さらにナンドとチャノマの裏側も半分を開放し、ここより採光・通風を可能にしている。また、ナンドの上手には押入を二つ設けている。

コザとザシキ表では中柱を省略し、差鶴居を用いている点は新しい手法である。

当家は名主の家柄であったため、ザシキの前に式台を設けて、ここを玄関とし、前面の軒裏をセガイ造にして格式を表現している。しかし、全体の建築様式はこの頃の他の造作と大差ない。そして、当家は慶応一年に建築されたものであるといえられ、建築様式からみてもその頃の建立とみて間違いないものと思われる。

清水浅男家は前述の清水福太郎家と同様の特徴を示しているが、式台およびセガイ等格式的表現は除かれている。これは当家が名主の家柄ではなかつたからであろう。

清水浅男家は浅次郎（明治三十四年七十三才没）が建築したといい伝えているところから一九世紀中期頃に建立されたものであろう。なお、当家は軒桁を少し高めて中二階を設けている。

久保田潔家はヘヤとコザ（デー）境の半分を相変らず土壁で閉鎖しているが、ヘヤとチャノマの裏側はコザ・ザシキの前面と同様に幅二間を開放しているので、前面のノキシタがなければ、どちらが表か裏かわからぬよう柱間装置となっている。

当家は当主の母（明治三年生）が八才の時建ったということであり、

一八七八年の建立である。

藤生長藏家は清水浅男家と似た平面の特徴を示しているが、規模は一回り小さくなっている。当家は当主（八十六才）が五才の時、建ったといふから一八九一年頃の建立である。

当家は調査構造中の四間取型では最も新しいものであるが、前面は土間のノキシタで、ここはエンカワとなっていない。また、ナンドとコザ境の間仕切では土壁が半分残されているため、この間仕切は十九世紀末期になつても、そのすべてを開放していないわけである。ナンドとコザ（デー）境の間仕切にこのような例がみられるのは、他地方の場合一九世紀初期頃まで遡るのが普通であるので、この部分の柱間装置に約半世紀以上の遅れがみられる。また、当方では床上表側の開口部に差鶴居が入り、中柱を省略するのが一九世紀中期頃であるが、これも他地方より半世紀近く遅れている。しかし、当家の場合は一九世紀末期の建立であるにもかかわらず床上表側の開口部に中柱を残しており、差鶴居を用いない。

六、多間取型

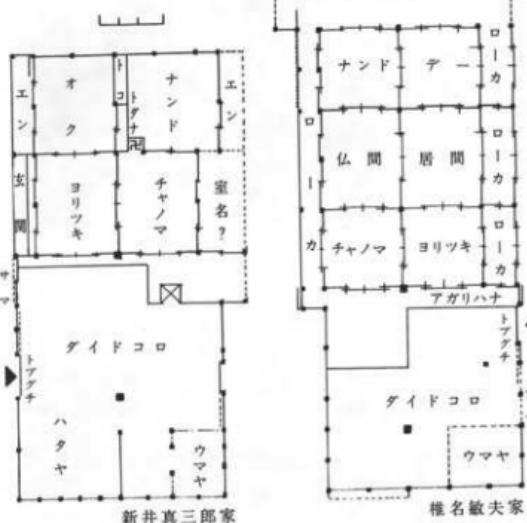
幕末の頃になると有力名主の家は一般農家の家よりも規模が大きくなつて室数が増加する。

新井真三郎家は中原地区の有力名主の家柄で、主屋の南に今日でも立派な長屋門を残している。当家は新井四郎右衛門希昇（文化元甲子年十月七日没）が建つたものといい伝えるところから、十八世紀末期頃の建立と思われる。当家の平面は上手に三室・下手にダイドコロに接して三室を配した五間取になっている。上手の表側の室をオクとよび、この室の裏側のナンド境には、トコ・トダナが設けられているところから、この室は客間として使用されたものと思われる。ナンドは他の造作と同様、家族の寝室に用いられた。

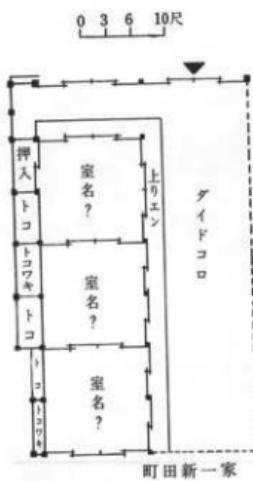
ダイドコロに接した表側の室は、ヨリツキとよばれ、その前面をゲンカンとよんで、ここに式台が設けられていた。式台は床を高く張つて、客を送迎し礼をするところである。このような式台が設けられるのは、名主以上の格式ある家柄にかぎられていた。

チャノマは家族の居間に使用され、この室の裏側に奥行一間程の小さな室が配されているが、室名は不明であった。恐らくここは家族の食事室に使用された空間であろう。

椎名敏夫家は下野国佐野の鎧物屋の出身といい、元禄時代に当地に落ち着き、屋号を「ナベヤ」といつている。



第5図 多間取型（復原平面図）



第6図 町屋形式（復原平面図）

萩塚本町では一番の財閥といわれ、名主の家柄であった。火災にあひ、元治元（一八六四）年に再建したもののが現存の主屋であるといふ伝える。これまで述べてきた各遺構はすべて「クズヤ」と称して、草葺の屋根であったが、椎名家は瓦葺總一階造りで、一階平面は表側に三室、裏側に三室を配した六間取型を示し、表と裏にローカを付けた大規模な構えは財閥名主の家柄をしのぶにふさわしい。

七、町屋形式の民家

街道筋の町人の家（町屋）は、ふつう妻側を表通りに面して、軒をつらねてたち並んでいた。これらの家は通常、一方に片寄つて入口が設けられ、入口の中は奥まで通する通り庭とよばれる土間で、ここに井戸のかまど・流しなどが並べられ、台所となっていた。そして、各室は土間にそつて手前から奥の方へ一列に並べられていた。このような間取を一般に町屋形式の平面とよんでいる。

町田新一家は、銅街道添につる籠の建築で、大正時代の終頃まで旅人の宿泊所となっていた遺構である。建築についてのいい伝えや記録は残されていないが、十九世紀中期頃に建立されたものと思われる。その



斎藤角太郎家



坂本市蔵家



今井丑五郎家

クズ屋根にトタンをかぶせてある。



松村多一家



今井丑五郎家 大黒柱

大黒柱がザシキ側（右側）にとび出ている（大黒柱の逃げがないという）ため、この部分の梁は大黒柱がとび出ている部分だけ欠いている。

当初はザシキに梁を入れていなかった証拠である。



佐藤政次郎家



小林源作家



加藤一太郎家のハタバのサマ
復原するとサマの部分は土壁となり、ハタバの部分にウマヤがあったので、建立当初のこの部分はハタバではなかつたことになる。



今井丑五郎家
表側の柱に元は“サマ”であった痕跡が残っている。



北爪林一家



今井丑五郎家の屋根裏



北爪林一家のエンガワ
元はエンガワでなくノキシタであった。



加藤一太郎家



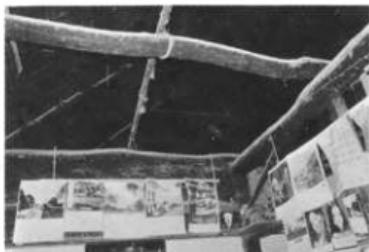
小川守太郎家
トブケチ右側のサマは復原すると土壁になる。



清水長十郎家



小川守太郎家大黒柱
当家の大黒柱はダイドコ側（右）に逃げている。当初よりザシキに疊が入った証拠である。



清水長十郎家は天井がなく、下から小屋組がよく見える。
当地方の民家の多くはこのように天井がなかった。



長沢林太郎家



新井達也家



小林秀男家



清水福太郎家



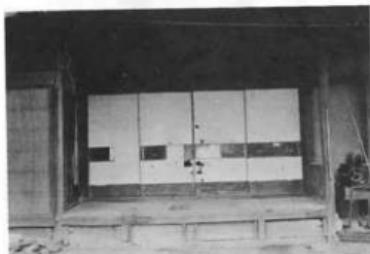
藤生新三郎家



清水福太郎家のエンガワ



藤生新三郎家のテー



清水福太郎家
このエンガワの部分が当初は式台であった。



藤生新三郎家
ダイコロ裏側より大黒柱をみる。



清水浅男家の大黒柱
大黒柱はダイドコロ欄（右側）に
逃げている。



清水福太郎家
ハタバの内部、コーチ棒の入ったサマの部分は復原すると
土壁となり、ここにウマヤがあった。したがって当初はハ
タバでなかったものと推察する。



久保田潔家
東側の屋根が先造になっており、当地方ではめずらしい屋
根形式である。



清水浅男家
軒桁を少し高めて中2階をつくっている
当地方での2階屋は幕末の遺構でもあまりみられない。



藤生長蔵家



清水浅男家
トブグチの大戸、中央に小さな
くぐり戸がついている。



新井真三郎家長屋門



藤生長藏家のノキシタ



新井真三郎家主屋
トブグチ右側の格子戸の部分は復原すると土壁になる。



藤生長藏家
ゲイドコロよりザシキをみる。



椎名敏夫家



藤生長藏家
コザと NANDŌ 墓の柱に残る土壁の痕跡



町田新一家の壁に
書かれた落書
これによって大正10年頃はまだ旅
館業をしていたことがわかる。



椎名敏夫家の大黒柱
大黒柱はガイドコロ開（左側）に逃
げており差判居はザシキ間に寄せて
とりつけられている。



町田新一家
当家は旅館であったため、内部の間取は農家と異なり。妻
入りで向って左側が土間、右側が床室となっている。



小林秀男家
テーとナンド境の柱に残る土壁の痕跡



町田新一家内部

平面は第六回のようで、通り庭としてのダイドコロを持つ町屋形式の平面で、妻側を道筋に面してたつ二階屋である。屋根は現在鉄板葺となっているが、元は板葺であった。当家は銅街道添にたつ町屋造りの唯一の遺構である。

八、屋根のグシ

古老の話によると、昔は「クレグシ」といい、山からクレ（土があつくりいた芝）をとってきて葺いたものだという。したがって、昔はグシに岩松・あやめ・ゆり・ほうすきなどが生えていて、それが草屋根とマッチし、大変よかつたという。しかし、今日ではそのようなグシは一軒も見受けられず、草屋根の遺構でもそれらのすべてが瓦あるいは鉄板葺のグシであった。（桑原稔）

有形民俗資料

今回の調査では、有形民俗資料についての報告は「一ヵ所だけであった。そのため、本調査のあと、若干の補足調査をおこなって、その補いをした。本町では、資料館開設の計画がありすでに町内の人たちから寄付された有形民俗資料類が約二百点ある。現在のところ未整理であるが、農具類が大部分を占めている。

報告例がすくないので、以下便宜上大項目に分類して、簡単に説明を加えておくことにする。なお、生産業、衣食住等の別項にも関係資料が収録されているので参照されたい。

一、農具類

内容的には、耕作用具・収穫用具・養蚕用具その他に分類することができる。網羅的に分類したものでない、町内の農具の一部にすぎない。報告されたものの中で、とくに特徴的なものをあげれば、カゼヨケグワと、クロクワであろう。

本地方が砂質地帯であつて、郷土誌（明治四十三年刊）に、「風散し易き絆埃土なり」とある。カゼヨケグワは、はたけの砂が風に吹きとばされないように、ムギばたけに、さくの北あるいは西側に、ムギラを二つ折りにしてさしむ穴を掘る道具である。この仕事は十二月中にするものである。

つぎにクロクワであるが、これはテンガ（手鉤）より大きな鉤で、写真にみると、刃も厚く大きく、柄の角度も手鉤より大きくなっている。開墾用につかうたものでアラクグワとも開墾グワともいう。クロクワで作ったクワをカナカギにさして土をはたいて乾燥させ、あとで燃し

た。なお、クロクワの標準は、刃の巾が六寸、長さが九寸という。

以下、各農具について、それぞれ簡単な説明をしてみることにする。マンノウ サツマイモを掘つたり、はたけに穴を掘つたりするときにつかう。また、堆肥をくずすときにもつかつた。

トウグワ 土を掘るのにつかう。

アゼカキ はたけのあぜをかいたり、草とどりをするのにつかう。クサツケズリともいう。

レーキ アゼカキではたけの除草をしたあと、レーキで草の土をはいたあと、レーキでならしてうえしろをつくった。

クワ 田畠の中耕につかった。

フォーク 堆肥をかえしたり、車につむときにつかった。また、堆肥を田畠に散らすときにもつかつた。

フリマンガ 田畠の地ならしにつかった。おおぐわをかけたあと、土をこまかく碎くのにつかつた。夫婦一人でふることが多いので夫婦マンガともいう。

エンガ はたけうないにつかつた。エンガがうまくつかえたり、馬がうまくつかえれば百姓は一人前だといわれ、どこへ日傭とりに行つても、一人前の給金がもらえたといつ。

ない桶 下肥をおもに畠にはこぶのにつかつた。天秤棒でかついだ桶一本で一荷といつた。これが満足にかつければ、一人前の百姓だといわれた。

ツミザル ケエザルともいう。こやしを入れてはたけにもって行つて、

手でつかんでくばつた。写真のようにつなをつけてかたからさげた。

苗取台 田植のとき、苗とりにつかった。これに俵べしをのせてつかう。かごやでつくつもらつた。苗取台ができる前に、コムギわらをぎつちりまるいたものに腰をかけて苗取りをしたという。苗かつぎカゴ これに竹のつるをつけた。苗を入れて、天秤棒でかついで田へもつていいくばつた。

ミノ ミチシバやイネワラでつくつた。自家製のものと、買ったものとあつた。買ったものは、むかし、前橋の監獄でつくつたというので、監獄ミノともいつた。おもに、田植のときに男衆が着た。

ぶり棒 麦・小麦・稻などのノゲをおとすのにつかつた。はうちうたにあわせて仕事をした。これがちょうど人にぶてるようになるのは大変だったといふ。ぼうちぶちは、隣近所の人が組んでやつた。サナ 大麦・小麦・ソバをこの上でぶつて実をおとした。写真でみるとおりワクで仕切られているが、一わくにひとりずつはいってやつた。足踏みの脱穀機をつかうようになるまで（昭和初年）つかつていた。写真のサナは大正三年製のもの。

カナゴキ イネこき、ムギこきにつかつた。写真のものは足がとれている。昭和のはじめごろまでつかつていた。
トウミ 穀物の選別につかつた。アイとかごみをふるいわけた。写真のものは慶応元年に、館林領猩々でつくつたもの。
箕 穀類の選別につかつた。サクラの皮とシノでつくつたものと、フジのつるとシノでつくつたものがある。
ムギぶるい ムギぶらをしたあと、あらいのとこまかいのをふるいわけて、そのあと万石にかけた。

石臼 米・アワ・ムギ・モロコシ・ソバなどをひいた。特に、ソバをひくときには、前にひいたものとまじらないように、みごぼうきできれいに石臼の目を掃除してからひいた。なお、石臼の上にのると、背が低くなるといふ。子どもがこの上にのらないように注意した。

二、養蚕・製糸用具など

この関係の資料は「くわすか」であった。資料がすくないということではなく、調査員が報告をしなかつたということである。時間の制約もあるので、ここでは報告のあった分だけについてまとめてみることにした。
クワノオシギリ 蚕の桑育のときに、桑の長さをそろえるのにつかつたもの。桑の先をそろえて、根立のほうをきつた。
キバチ 蛹の上築のときに、この中に熟蚕をひろつた。
マブシあみ機 わらで、おりまげまぶし（シマダともいう）をつくるのにつかつた。昭和十年ごろまでつかつていた。

メカゴ メケエともいう。まゆを出荷するときにつかつた。まゆをメエブクロ（まゆぶくろ、布製）の中に入れてから、このかこの中に入れて出荷した。このカゴの中に八貫から十貫のまゆが入つた。
ワタクリ わたをはたけからとってきて、わたとたねをかけるときにつかつたもの。この写真のものは、太田仲町の山田屋で子年につくつたとある。

ザグリ 糸ひきにつかつた。

まわたかけ くずまゆをにて、このわくにかけた。まわたは、布団とかねまきの中に入れて、わたがきれいよいようにしたもの。
糸より機 足ぶみのもの。昭和十七、八年ごろまでつかつていたといふ。
はんぱたし 伊勢崎機を織つたもの。桐生機を織つたはたしは長ばたしといつて、これより大きかつた。

三、生活用具その他

ここには、生活一般に使用した道具類を中心にして、まとめてみた。これも資料の数がすくなく、とりたてて特色などもいふほどのことはない。しいてあければ、つるべが井戸の中に落ちたときに、イカリをおろ

してつりあがたということくらいであろうか。内容別に分類するほどで
もないの、資料を羅列したにすぎない。

ランプと提灯 大久保はこの近辺でもおそらくまでランプをつかつてい
たので有名であるという。「大久保のすけランプ」といわれていた。大

久保に電灯がついたのは昭和二年で、近在よりいく分おそかつた。
トウゲー 神棚の大神宮様にあかりをあげるときに、あぶくないよ
うに、これをあかりにかぶせたのである。

あんどん 大久保では「大久保のキノコ芝居」といわれ、むら芝居が
さかんであった。むら芝居のとき、このあんどんを小道具としてかした
といふ。

オニジヤクシ ギリシラズ（義理知らず）とも、テマエガツテ（手前
勝手）ともいう。竹でつくり、自家製である。にぼうとをよそうときに
つかつた。

ウス これは米搗きのための臼である。大きなキネをつかつてついた。
一度に二斗ほどの臼である。

箱膳 箱膳の中には、ごはんの茶わん、汁のわん、おかずの皿、箸な
どを入れておいた。子どもには、むかしは數え五つのとき買つてやつ
た（大久保の場合）。娘はとつぎ先で買つてくれた。お勝手に箱膳があつ
て、そこへ箱膳はしまつておいた。大久保では、昭和二十四・五年ころ
まで箱膳をつかつていた。早い家で、終戦の二、三年前ごろからテーブ
ルにしていた場合もある。

ヤゲン ケヤキでつくつてある。これは明治の末年につくったもの。
トウガラシとか、ゴマをつぶすのにつかつた。

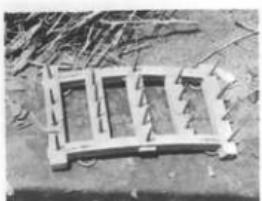
ホケエ 祝儀不祝儀あるいは新築祝いのときなどにつかう。この写真
のホケエには四升入つた。ホケエ二つで一荷とか一駄という。
かけや これはカシでつくつたもの。くいをぶつときにつかう。
イカリ つるべ井戸の時代に、よくつながれてつるべが井戸の中に
落ちた。そんなときに、このイカリで、おちた桶をひきあげたという。

この辺の井戸は深くて、三十尺から四十尺もあつた。

荷輪 馬に乗せて、荷をつけるのにつかつた。

ローソク立て

マユをはかる枠 紙製のもの。方八寸五分五厘、深八寸九分とあり、
これで一升あつた。わきに「壹升駿」とあり、明治十九年六月十九日
検査、明治二十年六月七日検査と記してある。製造人は、埼玉県比企郡
小川村錦町・山谷（某）となっている。この中に乾燥マユを入れたもの
で、マユ賣いは家人と話しをしながら、マユをつめたという。これでは
売り手が損をしたということである。（井田安雄）



フリマンガ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



トーグワ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



カゼヨケグワ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



エンガ（蔽塙）
(井田安雄 撮影)



アゼカキとマンノー（山ノ神）
(朝岡紀三男 撮影)



カゼヨケグワ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



手鋸とクロクワ（手前のもの）
(大久保) (井田安雄 撮影)



アゼカキ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



アラクグワとカナカギ（左）
(蔽塙) (井田安雄 撮影)



ない桶（三島）
(朝岡紀三男 撮影)



ツミザル（大久保）
(井田安雄 撮影)



左からレーキ、クワ、マンノー、
アゼカキ、フォーク（山ノ神）
(朝岡紀三男 撮影)



マンノー（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



ムギぶるい（大久保）
(井田安雄 撮影)



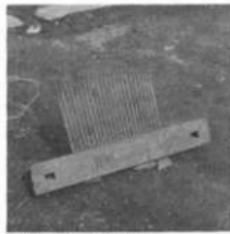
サナ（蔵塙）
(井田安雄 撮影)



苗取台（湯ノ入）
(井田安雄 撮影)



石臼（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



カナゴキ（大久保）
(井田安雄 撮影)



苗かつぎカゴ（大久保）
(井田安雄 撮影)



クワノオシギリ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



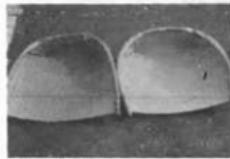
トウミ（蔵塙）
(井田安雄 撮影)



ミノ（湯ノ入）
(井田安雄 撮影)



クワノオシギリ
(朝岡紀三男 撮影)



箕（大久保）
(井田安雄 撮影)



ふり棒（台）
(井田安雄 撮影)



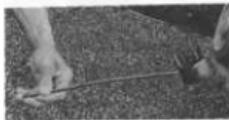
行灯（大久保）
(井田安雄 撮影)



ザグリ（山ノ神）
(朝岡紀三男 撮影)



キバチ（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



オニジャクシ（大久保）
(井田安雄 撮影)



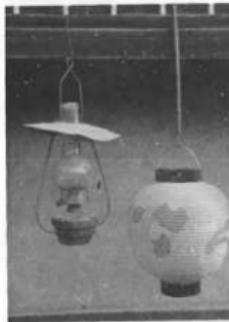
マワタかけ（大久保）
(井田安雄 撮影)



マブシあみき（山ノ神）
(朝岡紀三男 撮影)



ウス（薪塚）
(井田安雄 撮影)



ランプ（左）と提灯（大久保）
(井田安雄 撮影)



メカゴ（メケー）（山ノ神）
(上野 勇 撮影)



箱膳（大久保）
(井田安雄 撮影)



トウゲー（トウガイ）（大久保）
(井田安雄 撮影)



ワタクリ（大久保）
(井田安雄 撮影)



糸より機（大久保）
(井田安雄 撮影)



ヤゲン（大久保）
(井田安雄 撮影)



ホケエ（大久保）
(井田安雄 撮影)



マユをはかるます（大久保）
(井田安雄 撮影)



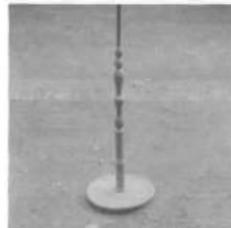
荷軸（大久保）
(井田安雄 撮影)



かけや（大久保）
(井田安雄 撮影)



はんばたし（大久保）
(井田安雄 撮影)



ローソク立て（大久保）
(井田安雄 撮影)



いかり（山ノ神）
(上野 勇 撮影)

岡上景能に関する伝承

等懸野原は水がないので、岡上様が大間々の蕪町から渡良瀬川の水を引いて用水をつくってくれた。今の桐生競艇の水も岡上用水を利用してい。岡上様は新田町に溜池をつくり、余水をためたが、そのため水がさしてきたりするところができ、投書されて江戸へ呼ばれた。江戸へ行く途中で岡上様は自害したが、大原の町は岡上さんがつくったもので、七五三の地割で実によくできている。

大原の町並（手前は七区で5間道、六区から7間幅の道路になっている。）
(近藤義雄 撮影)



中学校屋上より大原を望む（帯状の畠は700間続く）
(近藤義雄 撮影)



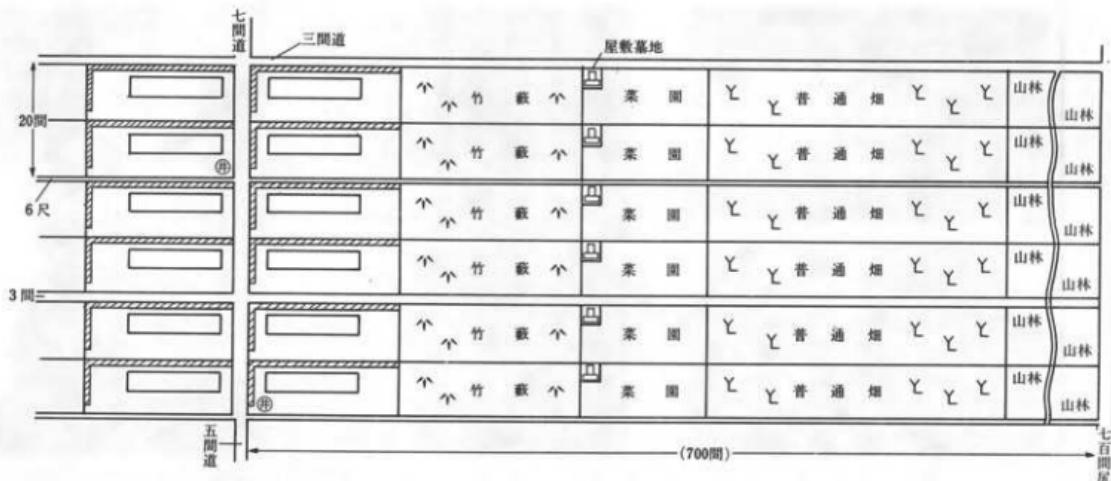
大原の町割（6尺幅の馬入れ道と防風林の櫻ぐね）
(近藤義雄 撮影)



畠作の冬の風除け作業の実演
(エンガ穴をあけ、ワラを二つ折りにして風上にさし、砂除けとした。)
(近藤義雄 撮影)

した。

大原の町割といい、大原の中心部は南北通りは、七間幅の通りを一二町、その南北に五間幅の通りを各三町つけ、横に東西七百間まで通しの地割で、一屋敷の幅は十間、一屋敷二十間を一组にし、その片側は三間道、他は六尺の馬入れをつくり、七五三の地割りといわれている。井戸は三間道の入り口に東西交互に設けられ、共同井戸として使用した。一軒分の地割りは、通りに面して屋敷がつくられ、防風林の櫻ぐねが西北にあり、屋敷に縁いて竹藪が一反から一反歩ほど、それについて野菜畑、その竹藪との間に個人墓地、菜園のつぎに普通畠、その奥が山林となっていた。一軒分の幅は十間で奥行七百間（七百間目のところを東西



1. 南北大通りは、中央7間幅が12町、その南北に各5間幅の道が3町、計18町の町割。
2. 東西は、中央通りから東西へ各700間、そこを700間尻と称する南北の道がある。
3. 1軒の地割は、通りに面して10間幅で700間尻まで続き、屋敷に続いて竹藪、菜園、普通畑、山林が続き、菜園と竹藪の間に屋敷墓地があり、屋敷には西と北に防風林として樅ぐねがめぐらされている。又屋敷毎に道路があり、その幅は3間道と6尺道（馬入か）が交互に通っている。
4. 井戸は共同井戸で、宿の両側に互違いにあり、深さは3丈から4丈の深さで水位の増減がはげしく、6月は最も少なく、9月は数尺で水面に達する。
5. 水路は宿の東側にあり、夏期はほとんど流れず、9月から3月まで（秋彼岸から春彼岸まで）水が流れた。防火用水として冬期通水程度である。
6. この町割は岡上用水が寛文9年（1669）であるから、ほぼこの前後につくられたもの。

とも七百間戻ともいゝ、約一町五反歩になる。野菜から燃料まで自給で
きる町割りであった。宿用水としては、大通りの東側に水路があつたが、
夏はほとんど通水されず、秋彼岸から春彼岸までの乾燥期に水を流して
宿の防火用水とした。(大原七区)

浅黄	朱火 硝石 エ 工 生	火柳 硝石 エ 工 ハイ	クジヤク 硝石 エ 工 生	黄烟 硝石 ケイカン エ 工 四匁
	キリハイ エ 七匁 武匁 七匁	キリハイ エ 武匁 武匁 拾匁	ハイ エ 武匁 武匁 三匁	ハイ エ 武匁 武匁 五分
	武匁 七匁	武匁 武匁 拾匁	拾匁 武匁 武匁 武匁	拾匁 武匁 武匁 武匁

生深	青火 塩素酸カリ エ タルク 一分	黄火 塩素酸カリ セルワック 四匁 武匁 武匁 七匁	紅火 硝酸ストロン 生	紫火 硝石 ヘンノー モロコシハイ モロコシハイ モロコシハイ トタン ハイ 五分
	四匁 三匁 一分	四匁 武匁 武匁 七匁	拾匁 武匁 武匁 武匁	拾匁 武匁 武匁 武匁 武匁 武匁 武匁
	武匁 九分	武匁 武匁 二分		

紫	センコウ花火 硝石 硫黄 炭 二匁五分	墨烟 ナマリ スイギン ケイカン未 アンモニイ 三十匁 三十分	火蝶花 硝石 ハイ 生	白ジヤク 硝石 ケイカン エ 五匁
	四匁 四匁 四匁	五十匁 三十五匁 四十匁 三十匁 三十分	七匁 五匁 五匁	拾匁 武匁 武匁
	武匁 一分			

赤烟	猛烈彈 角サイ ケイカ仁 イ黄 万呂一砂 ヨキユルサカモタセ インサニカリ 武匁	水雷火 エンカリ 錆 ケイカン 硫磺 万呂一砂 フタバ タバコ ラハイ 武匁	西京紫 正エ ナスハイ ヨ○匁 ルタカ分 ヨタカ分	桃火 正エ キリハイ ヨ○匁 キタカ分 キタカ分

硫黄

ト分

第一式法

塩酸鉀

フタキ分

サタ

蕃酸鈉

フタキ分

ア分

シ分

セルラック

フタキ分

ア分

シ分

ステークリン

フタキ分

ア分

シ分

緑色

トタ

ア分

シ分

塩酸鉀

トタ

ア分

シ分

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
加魯梅香
セルラック
細末ニシタル沙糖

トタ

ア分

シ分

三タ

第二法

トタシ分

ア分

シタキ分

塩酸鉀
硝酸銀
沙糖
セルラック

イタ

ア分

シタキ分

フ分

三タ

第一法
塩酸鉀
チエルチールス鋼
硫黄
加魯梅ル

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

塩酸鉀
チエルチールス鋼
硫黄
加魯梅ル

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
炭末
チエルチールス鋼

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
硫黄
塩酸銅
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
炭末
チエルチールス鋼
硫黄
塩酸銅
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
加魯梅兒
セルラック
テギストリーン
チアルチールス鋼

シ分

ア分

フ分

フ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
硫化鉀
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
硫黄
硫化鉀
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
炭末
チエルチールス鋼
硫黄
塩酸銅
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

第一法
塩酸鉀
硝酸銀
硫黄
硫化鉀
加魯梅兒
セルラック
沙糖

トタ

ア分

シタ

サ分

三タ

紫火

硫化銻

墨酸化銅

硫黄

硝酸鉀

塩酸鉀

二十二

サシ

第二法

硫黄粉

弾薬

硫黄

菜葉

硫黄

第一法

塩酸鉀

硫黄

硝サン鉢

キタ

第二法

弾薬

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第三法

硝サン鉢

硝石

硝石

硝石

硝石

第四法

硝石

硝石

硝石

硝石

硝石

第一法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第二法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第三法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第四法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第一法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

第二法

塩酸鉀

硫黄

硫黄

硫黄

硫黄

塩サン鉀 四 サキ 分

赤揚成ハ柳之炭 五 サ 分

硫 黄 二十三 キ フ 分

硝サン鉀 六十七 キ フ 分

陶瓶ヲ用ユ 按二只瓶中ニ於テ火ヲ点シ

紅色ヲ見ハス物ナラシ

紫紅色

黒サン化銅 ト分

乾燥天然ノ炭酸鈣 キタ

硫 黄 キタイ分

塩酸鉀 サタリ分

紫 姶

第二法 硝 石 サ 分

硫 黄 フ 分

硫化銅 フ 分

装茶末 フ 分

此等ハ尋常ノ帶着ノ焰ヲ発見且ツ此等ニ於テ作ル。合葉之火光ハ時間モ長シ。

綠焰

硝サン鉀

アタシ
シタキ分

塩サン鉀 キタ分

加魯梅児 セルラック

赤焰 塩サン鉀

硝サン鉀 サタア分

加魯梅児 セラック

チエルチールス鋼 フタキ分

炭 末 フ 分

第二法 塩サン鉀 アタシ分

硝サン鉀 アタシ分

加魯梅児 イタフ分

デキストリーン キタキ分

セルラック フタア分

塩サン鉀 サタア分

チエルチールス鋼 キタ分

加魯梅児 キタア分

セラック フ 分

塩サン鉀 キタ分

チエルチールス鋼 キタ分

加魯梅児 セルラック

赤焰 塩サン鉀

硝石 キタ分

チエルチールス鋼 キタ分

加魯梅児 セルラック

英軍用彈薬 クタキ分

硝 石 フタキ分

硫 黄 フタキ分

炭 末 フタキ分

黑 煙 ハイ

水銀鉛 ケイカン

八分 八分

拾匁 拾匁

青煙

青 竹 インカリ

エヨウ

アンチモ 武分

キトノ青竹ニタイスル

青 竹 エンサンカリ

ハイ アンチモ

青 竹 ハイ

青 竹 サタア分

四寸ニトロ火薙寸八分

五寸ニトロ火 肉寸四五分

(一) (二) (三)

サ、五、六、七、八、九

拾匁 拾匁
武分 廿タ

六尺ふんどし(六尺揮).....	8,87
六道図.....	74
六道銭	108
ロッコノダンゴ (ロッコの団子).....	4,86,106
ロップ.....	51
露天商.....	16
炉端.....	21
炉ぶち.....	21
ワ	
若い衆.....	60
ワカイシュガシラ.....	61
若い衆の座敷	101
若衆組.....	94
若水	117,118,150
若宮八幡	149
若餅	115,126
わかれじも	39
別レ飯	109
ワカレン	121
ワクヅケ.....	34
和謙	111
わた.....	31,199
総入れ半纏	7
ワタクリ	119,203
渡良瀬川.....	30,205
和服	5
墓.....	29
わら細工.....	39
わらじ	8,10,83
ワラシゴト(ワラ仕事)	29,38
ワラジ銭	106,108
ワラシヌギ.....	56
藁すぐり.....	29
ワラズト	146
わらぞうり(わら草履).....	9,10
ワラティッボウ (わら鉄砲).....	40,146,147
藁人形	114,160
わらの人形	160
ワラビ.....	18
わらべ唄	173
わら宮	117,149
わらもち.....	17

厄除け	7	湯宿	9	嫁の神社参り	101	
ヤゲン	200, 204	湯宿道具	107	嫁の葬送	110	
星号	57, 165	雪	156	嫁のつとめ	4, 12, 102	
野菜	1, 15	行方不明	10	嫁の年	96	
八坂神社	137	湯宿現様	155	嫁の荷物	98	
八坂神社の講	82	ユズ(柚子)	150, 154	嫁の年期	102	
星敷稻荷	83, 93, 117, 131, 148	ユズ湯	150	嫁の年始日	128	
星敷神	149	ユズリ	113	嫁の披露	101	
星敷神様	89	湯之入	59	嫁の土産	5, 101	
星敷どり	19	弓矢	110	嫁は台所からちらえ	102	
星敷墓地	112	夢知らせ	105	ヨモギ(よもぎ)	134, 135, 161	
星敷林	20	夢の良し悪し	157	寄合い	60	
夜食	11, 12	夢見	105	ヨリツキ	21, 189	
やつかがしら	12, 154	ヨ		弱い子どもと着物	11	
星根	159	夜遊び	61, 95, 96	ラ		
星根ふき	25	八日節供	133, 135	雷電様	61, 82	
星根屋	25	羹鶴	27	雷電神社	3, 64	
やのじ	8, 9	羹蓋	3, 11, 26, 27, 28, 36, 86, 111	ライデンボク	160	
截塚石	44, 45, 46, 47	羹蓋儀礼	36	酷農	27	
截塚温泉	1, 85	羹蓋神	69	ランプ	200, 203	
截塚用水	75	羹蓋用具	198	リ		
截塚六右衛門	26	姜子	86, 93	離縁	104	
やぶりまんが	170	用水	1, 26	隣縁	27	
山入り	38, 42, 122	用水池	30	理想大根	28, 31	
山祝い	42	姜脛	27	立志会	95	
ヤマカガシ	166	ヨコサ	21	竜柱	24	
山神講	45	よそいき	5, 6, 7	料理	10	
山神様	68, 122, 133	四つ足	155	隣保班長	59	
山グワ(山桑)	124, 125, 126, 159	四つ身	6	ル		
山さき	44, 46	よつらつくり	37, 38	留守見舞	82	
山師	42	夜泣き	93, 159	ルスンギョウ	140	
山仕事	42	夜泣き地藏	93	レ		
山神宮	68	夜なべ	26, 131, 148	レーキ	198, 201	
山取り仕事	42	ヨナベ仕事	37, 38, 43, 116, 129	令眠	35	
山の神	42, 66, 116	ヨバイ	94, 96	恋愛	95, 96	
山ノコシ	165	四間取型	182, 183, 186, 187	恋愛結婚	95	
山の中の地名	165	四マ八間	20	ロ		
山はじめ	122	読売り	179	炬	21	
夜盲症	157	5, 7, 9, 10, 16, 20, 40, 62 85, 89, 96, 97, 99, 100, 101 102, 103, 122, 128, 134, 140 142, 145, 147, 153, 172	嫁入り	98	ローソク	3
ヤロウミノ	10	嫁が里へ帰れる日	102	ローソク立て	200, 204	
ヤンメ	157, 158	嫁御のお茶	100, 101	ロウガイ	161	
ヤンメトッコ	157	ヨメゴノミヤゲ	101	労働着	8	
ユ		ヨメゴワタシ	100	六三除け(六算除け)	83, 158	
結納	97	嫁と着物	5	六千石	56	
有線放送	60	嫁取り	156	六地蔵	107	
ユーズー念佛	111	嫁の条件	3, 10, 102	六地蔵のローソク	87	
ゆうはん(夕飯)	11, 12					
郵便局	49, 52, 53					
ユカタ	8					
湯灌	88, 107, 108					

見合い	96	むかで除け	4	メズラ	140
見合結婚	95	婿	5,7,40,62,95,97,98,100 101,102,103,122,128	メズラ畠	116,138,139
三日月様	76	向うびらき	157	メハジキ	110
御荷鉢の三束雨	155	ムコウヨコザ	21	めめずとへび	167
三河万才	51	婿入り	101	メンコ	98,103,111,142
みけーご	131,158	婿入婚	85	モ	
みこし	60,65	婿方	85,99	盲人	167
ミコシ入道	170	ムコゲタ	9	モウロクゼキン	9
みごぼうき	199	むこだまし	13	モグラ	146
三島	57	婿の地位	101	モグラの黒焼き	162
三島神社	67,173	袈取り	156	モジリ	7
水	5,22,23,205	麦	2,13,33,135,155,157,199	解	2,12,16,121 150,151,152,155
水あび	138	ムギこき	199	もちアワ	13
ミズアピッキ	139	麦ぞっさき	13	モチ草	135
水がぬ	21	麦の刈り入れ	135	解つき	117,150,151,153
ミズノミダンゴ	106	ムギバナ	16	解をつく日	126
水鉢	140	ムギバナモチ	16	元締	44
水番	3,29,30	ムギぶち	199	ものさし	87
水見舞	63	ムギぶるい	199,202	モノツクリ	123,125 (ものづくり)
みそ(味噌)	17,18	麦まき(麦蒔)	147,148,153	モノモライ	157
みそかそば	12	麦飯	11,14,172	穂すり	41
ミソカバライ	152	むぎわらぼうし(麦藁帽子)	8,9	木綿	10
味噌汁	154	ムジナ(むじな)	164,169	木綿の花	115,126
ミタマノ駆	115,120	虫歯	158,161	モモヒキ	8
ミチシバ	199	虫封じ	92,158	桃割れ	10
道ぶしん	60	虫除け	11	もらい湯	21,118
ミツクチ	155	ムシロ	38	モリコオビ	9
みつみ(三ツ身)	6,10	膳織り	170	モロコシ(もろこし)	14,33,199
三峰神社講	82	ムシロ組合	38	紋付羽織	7
巳年の腰巻	11	棟上げ	24	門牌	107
水口	128	村入り	56	モンペ	8
源義経	63,166	村がら	60	ヤ	
ミナガワ	35	村仕事	60	ヤカガシ	39,124,130,160
ミナガワムシロ	38	むら芝居	200	やきもち	11,14,143
ミネ	165	村の開発	56	ヤキモチッコ	86
ミノ	10,199,202	村の変った人	167	ヤキモチ焼キ	101
ミノムシロ	35	ムラビロ	101	焼判	59
姫蛇	159,161	室田イッケ	151	八木節	179
ミニダレ	157	メ		厄	117
ミニップサギ(耳ふさぎ)	41,114	鉢仙	3,7	厄落し	94,131,153
明神様	149,161	冥途	105	薬師様	73,96,147
民家	20,181,182,183,184	命名	91,164	薬師堂	74
民謡	173	名物	167	豪取	139
ム		メエブクロ	199	厄年	7,93,94,122,153,170
無縁仏	140	メカイ	131,149,150	厄年っ子	93
迎えイチゲン(迎え一見)	85,98	メケー(メケエ)	116,157 199,203	厄病神	131,137,138
迎え中間	98	メカゴ	149,157,199,203	厄病神送り	158
迎え火	141	メシ(めし)	2,12		
迎え盆	140,141				
むかしの婚姻	95				

蛇の夢	157	仏様	150	町屋	183, 189, 193
蛇・ムカデ除け	115, 126	仮の野回り	141	町屋型	182
蛇除け	4, 134	ホトギス	167	町割	1, 206
ペベズキン	104	母乳	162	松	123, 124, 127, 155
ペベ薬師	96	墓標	111	松飾り	125
ヘヤ	21, 88	ボロットジ	38	マツグロ	42
便所	86, 154	母衣輪神社	64, 67	マッチ	47
便所回り	90	盆	13, 16, 183, 140, 141, 143, 155	松遊え	120, 151
ホ		盆送り	109, 140, 141, 142	松本盛行	81
ホーカンボ	17	盆踊り	60, 95, 142	松山	42
ボウ(房)	38, 163	盆踊り唄	142	間取り	20
防火用水	207, 209	盆踊りのやぐら	180	マナイタゲタ	9
蒂	87, 121, 159	盆ござ	116	間に合せ	8
奉公	37	本家	20, 62, 115, 119, 133	マニュファクチュア	43
奉公人	37	盆棚	140, 141, 142	マブシ	35, 130
豊作の祝い	159	盆中の食事	142	マブシあみき	199, 203
豊作又は不作の前兆	156	盆チヂ	141, 142	まむし	46, 47, 128, 160
豊蚕祈願	69	盆の日取り	116, 140	蠍の黒焼	161
坊さんの年始日	122	盆迎え	141	マムシよけ	47
帽子	9	本膳	111	豆占い	131
ホウソウ通り	115	本敷ち	7	豆がら	130
疱瘡神	158	ポンテン	66	豆茶	130
疱瘡神送り	158	ポンノクボの毛	161	豆マキ	16, 130
疱瘡病	158	本間家の娘	135	豆焼き	131
ぼうちうた	199	マ			
ぼうちぶち	199	埋葬	110	まゆ(蘭)	11, 26, 34, 35 36, 199, 200
ボウチ棒	31	マイダマ	124, 126	マユ買い	36, 200
宝塔山	82	マイダマ正月	124	マユカキ	128
宝塔山神社	65	前帯	8	マユ玉(まゆ)	16, 38, 39, 115 だま、蘭玉
暴風の前兆	156	前掛け	8	だま、116, 123, 125, 127 128, 131, 159	
防風林	20, 27, 205	マエスベリ	9	マユ玉飾り	115
訪問着	7	まき錢	110	マユ玉正月	128
ホカイ	109	マキヅケ	17	蘭袋	35
ボク(ぼく)(木)	38, 123, 124 125, 126	マキハチマキ	9	マユをはかるます	200, 204
ボク(けがれの)	153, 154	マキ屋	42	(マユをはかる樹)	
ボクリュウ	42	枕だんご(枕団子)	86, 106 107, 115	魔除け	106, 115, 131, 135
ホケイ	23	枕直し	106	まり	178
ホケエ	200, 204	枕飯	86, 107	マリつき	178
ホシノタマ	119, 124	マクリ	90	丸帯	8
ほたもち(ほた餅)	15, 16 113, 150	まげ	8	まわし	102
ほたもち縁起	121	馬子唄	175	まわた	199
ほたるかい	17	孫だき	89	まわたかけ	199, 203
ほたるめし	13	マコモ	116, 140	マンガ	29, 39, 198
墓地	89	マス	116	マンガアライ	29, 39, 83, 136
墓地代	109	マタレ竹	99	まんじゅう	111, 113
ほっかぶり	9	マチ	33	マンジュウガサ	9
法華の太鼓	171	マチウタイ	99	マンノウ	198, 201
堀田様より新田様	171	町田イッケ	124, 150	ミ	
		町田家	121	箕	99, 100, 103, 116, 129 143, 144, 145, 199, 202

バラック	19, 20	一七日	113	夫婦マンガ	198
ハラミバシ	118, 124, 128	一間取型	182, 183, 184	フォーク	198, 201
はり(渠)	25	人寄せ	12, 16	葺き替え	25
針供養	131, 153	ヒナ市	132	吹竹	94
針仕事	10	ヒナ人形	116	吹きながし	134
ハリハリ大根	17	ヒナの節供	132	ブクキネエ家	65
春駒	51, 134	ひな祭り	116, 132	副食	15
株名様	136	火に関する禁忌	154	福田一家	155
株名山	134	ヒノエウマ(丙午)	39, 93, 131	ふくらすずめ	8
株名神社	3, 64, 82	桧笠	9	藤	135
春祭り	134	火の玉	170	藤生一家	154, 155
馬鈴薯	168	ひば	17	藤生姓	121
はれ着	5	火柱	156	不祝儀	16, 20, 59, 200
晴れの食事	15	ヒバタ	3, 43	富士講	80, 157, 164
ハンゲ(半夏)	39, 40, 138, 155	火吹竹	7	富士登山	155
晩霜	3, 157	ヒヅセ	156	藤の花	133
パンダイ餅	16	火伏せの神	66	舞台	173, 177
はんたく	9	ひば	9	アタイソーニン	121
半纏	6	火祭り	116	フタホケイ	23
バントウサン	37	ひも	8, 9	二間取型	182, 183, 184
はんの木	11	ヒモカザリ	6	ふだん着	5, 7, 8
はんぱたし	43, 197, 204	百から日	113	仏壇	105
半めし	13	百姓のエビス様	129	ブツツケ	177
ヒ		百姓の神(様)	40, 64, 76, 147	ブツツケ七日	110
ヒイラギ(桔)	116, 130, 131 149, 150	百姓の作神	124	仏滅	153
火打石	21	白猿	169	不動講	75
ヒエ	14, 26, 29	百尊着物	93	不動様	75, 123, 129
ヒエヌキ	29	ひやめしそうり	11	不動沼	165
ヒガクシ	110	百万縁	139	太織	3, 43
彼岸	133, 143, 144	日儲とり	198	布団ごしらえ	8
ひきじゃくし	12	病気見舞	104	フナ	35, 37
ひき茶	140, 141	ひょううたん	33	冬の仕事	38
引き物	111	病気の呪い	157	フリマンガ	198, 201
ひきわり	13	ひょっとこ	179	フレ	3
ひきわりめし	2, 13, 15 (ひき割り飯)	ひょっこ踊り	145, 173, 175	風呂	21
ヒシガタ	6	ヒヨトリ	20, 108	フロシキヨメゴ	104
ひしゃく	159	ヒヨリアシダ	9	分家	20, 115, 119, 133
火種	21	ヒラヅケ	34	ふんどし(褲)	8, 11, 87, 88
左住い	19	ヒル	158	分娩	88
左膳	18, 156, 162	ヒルバテ(ひるばて)	16, 142	へ	
左前	162	豊漁	11, 12	米作	3
ヒチヤマイリ	90	ヒロ(尋)	38, 163	米寿の祝	94
ヒッパク	95	ヒロウ	101	兵子帯	8
一ツ身	6, 10	広間型	182, 183, 184, 185, 186	へその緒	89, 164
一いろ餅	151, 155	櫻杷	20, 154	ベッチン	8
ひとかさね	7	びわの木	20	ヘネル餅	16
人魂	105, 170	貧乏桜	49, 52, 134	へび(蛇)	37, 46, 65, 135 156, 160, 166
人玉	105	フ		蛇と女	167
		トイゴマつり	46	蛇の脱けがら	159

ネズミ(鼠).....	37, 146, 147, 156, 167	墓場	108, 111	二十日灸	129
ネッキ	178	墓場の砂	170	二十日正月	116, 129, 155
ネブタの木	138, 139, 153	墓場の土	113	初祈禱	123
ネブツ	137	墓掘り	154	初子	5
年忌	113	はかま	7	八朔	16, 103, 143
年期奉公	37	墓参り	113, 133	八朔の節供	116, 143
捻挫	161	袴返し	98	初産	89
年始	115, 118, 119, 134	ハカマギ	94	初正月	92
年始日	119	ハカマ代	97	八寸歯	9
ねんねこ	7	はきもの	2, 8, 9, 150	初節供	92, 132, 134
ねんねこ踊り	174	はきものの禁忌	11	初田植	30
念佛	75, 111, 129	白山様	145	バッタン	43
念佛延	159	白山神社	66, 68	八丁ジメ	134, 136, 137, 138, 151
念佛講	82	博奕	45	ハヅケノトウバ	114
念佛の水	111	博奕打ち	10, 167	初ナス	116
ノ		バクメシ	172	初なり	136
ノーアイ様	165	羽黒山	71	初荷	121
ノーデンボ	124, 128	箱桶	12, 13, 200, 203	初彼岸	133
納棺	108	箱枕	7	初穂	40
農具	198	はさみ箸	18	初参り	118
農事暦	41	箸	13	初水	116, 160
農休み	41, 139	橋	91	初山	92
ノチザン(後座)	85, 86, 88, 89	ハシキ	110, 111	初山参り	85
ノッキリ馬場	179	機織り	3, 10, 38, 43, 102, 163	初湯	130
ノツツケカミサン	104	はたおり唄	177	初雷	130
ノットカ	157	機織り娘	43, 95	馬頭観世音	74
のどのとげ	158	はだか下駄	9	馬頭觀音	133
野辺送り	110	ハタケ	33	馬頭講	82
ノベノオクリ	111	煙うまい	163	馬頭様	50
のぼり	134	旅籠	182, 183, 189, 196	ハナ	123, 125
野良着	5	畑作	2, 31	鼻	157
野良襦袢	8	畑作地帶	27	鼻血	161
のらっき	8	ハダシ参り	104	花かき	39
のら弁当	12	ハタバ	184, 191, 194	ハナカキナタ	124, 125
ノラボウズ	146	ハタヤ	43, 187	ハナギ	38, 123, 124 (ハナ木、花木)
ハ		ハチ(蜂)	156, 160, 161, 162	ハナドリ	28, 37
歯	157, 158	八王子様	65, 166	花火製造法	208
庵寺	73	八王子山	54	花祭り	133
歯いた	158	八十八夜	16, 39	花見	51
ハイトリバニア	172	鉢巻き	9	花結び	160
肺病	161	八幡様	147	ハナムスピゾーリ (花結びじょうり)	10, 38, 160
バイブル塚	1	八郎兵衛植荷	69	はばき	8
灰焼	32	初市	121	ハビショ	36
蠟唄	177	初午	16, 39, 124, 130, 131	ハヒフ病	158
羽織	7	初午ダンゴ	131	ハブ草	161
墓穴	108	初絵	120	ハブ茶	161
墓掃除	138, 139, 140	初絵売り	179	刀物	106
墓の掃除	141	初えびす	129	服帶	87
墓直し	110, 111	八海山	84, 143		
		二十日えびす	39		

トロロ	15	ナナバンゲ(七晩ヶ)	4,137,158	二百十日	40,143	
ところ飯	159	浪花節	51	ニボウトウ(にぼう うと、ニポート)	12,14 172,200	
ドンド焼き	127	七日ザラシ	4,114	ニホンボウ	104	
ドンドン焼キ	3,4,115 (ドンドン焼キ)	127,145	ナベカリ(鍋借り)	103,122	二毛作	28
トンビ	10	鍋の底	164	二夜様	87	
トンビノハネ	97	ナベヤ(鍋屋)	112,189	ニヤバ	109	
呑電講	82	なまあくび	157	ニュウ(にゅう)	29,40,146	
呑電様	87,93,104,105,166	菜まきの祝い	16	入家式	85,99	
呑電坊主	92	名負け	164	入棺	108	
呑電参り	85	ナメクジ	161	乳牛	27	
ナ		ナラ	123,124,155	乳ぬ	93	
内縁	104	ナラの木	38,115,119 120,122,151	入穂	27	
ナイグ	18	成り木責め	4,115,126	ニワ	35,37	
苗かつぎカゴ	199,202	成田山の虫封じ	84	庭	34	
なえま	128	ナリンポ	154,159	庭あがり	41	
苗代	130	ナレアイ	95	庭神様	41	
苗取台	199,202	繩	38	ニワトコ	123,124,125	
流し場	20	なわおび	9	にわとこの木	39	
長袖	20	なわとび	177	鶴	156	
永田家	120,121,127,130,151	繩ない	37,163	庭のわらしき	33	
ナカダチ	96	ナンド	21,88,106,107,182 184,185,186,187 188,189,195,196	人形芝居	51	
ナガハタシ	43	ニ		妊娠	3,86,154,155,159	
長虫	126,135,150	ニカクマブシ	35	にんじん	15	
長持	5,11	にぎりめし	12	妊娠祝い	87	
長屋門	195	荷鞍	200,204	妊娠祈願	86	
ナカヨシグサ	171	にここに	7	妊娠中の禁忌	88	
流レカンジョウ	114	にごわめし	2,12	ニンソク	60	
鳴き声	172	西ヶ原	26	妊婦	86,88	
なぎなた袖	6	西ヶ原開拓農業協同組合	27	妊婦の労働	86	
仲人	95,96,97,98,99,100 101,102,103,104 132,138,150,153	二十三夜	64	ヌ		
仲人との贈答	104	二十三夜様	148	ぬいとす	158	
仲人のゾウリキラシ	96,97	二十三夜塔	79	ぬいもの	10	
仲人の七でんぼう	96,97	二十三夜待	61,76	ぬすっとおり	160	
仲人礼	97	二十二夜	64	ヌスットグモ	156	
名古屋帯	8	二十二夜様	76,148	ヌルデ	128	
ナス(茄子)	136,140,154,158	二十二夜塔	79	ヌ		
ナスと菊のから	130	西野	56	ネーマ	124,160	
ナズナ	122	西山古墳	45	寝棺	108	
ナスのウマ	142	ニシン	15	猫	155	
誠	171	日露戦争	134	ネゴシ	88	
菜種	18	につけもの	15	猫騒動	177	
ナタマメ	62	新田氏	62	猫の死	83	
夏の昼うどん	171	新田堀用水	30	猫除け	106	
夏バテ	158	新田義貞	1	寝産	88	
七草	121,122,123,155	にない構	198,201	寝小便	154,161	
七草がゆ(七草粥)	122,154	荷馬車ひき	128	ネジリハチマキ	9	
七つ坊主	92,93	二三百高地	10	ネズップサゲ	41	
				ネズフサゲ	147	

ツツソデ(筒袖).....	7.10	天秤棒	198, 199	トコ柱(床柱).....	21, 185	
ツトッコ豆腐	132	天まつり(天祭り).....	4, 116, 121 132, 136	トコバシ	108, 109	
ツネッキ(つねっき).....	3.7, 43	天理教	8	トコホリ(トコ掘り).....	108, 110	
角機.....	97	ト		年祝(い)	7.85, 94	
ツノボウ.....	50	トーグワ	201	年古	157	
睡占	157	トウガイ	203	年男	38, 117, 118, 127, 130	
燕	155, 156	トウカイマブシ	35	年神	4, 117, 118	
つぶれ屋敷	20	トウカラシ	200	年神様	4, 115, 119 120, 121, 124, 126 127, 128, 130, 160	
つばにわ	19	十日夜	4, 16, 40, 116, 117, 146	年神棚	115, 126	
ツミザル	198, 201	十日夜の餅	4, 117, 146, 147	トシコシイワシ	130	
爪	154, 155, 161	道具送り	98	としとくじん(歳徳神)	117, 119, 128	
爪切り	123	道具返し	111	としとり(年とり)	16, 120, 158, 159	
ツメリッコ(つめりっこ)	12, 14	道具披露	101	トシトリのイワシ	160	
つるべ戸	23, 199, 200	鋼藏	2	年取りの豆	152	
テ		トウグワ	198	年の市	120	
テ.....	99, 109, 182, 184, 185, 186 187, 188, 189, 193, 196	トウゲー	200, 203	どじょう(泥鰌)	47, 161	
定期総会	59	道化踊り	174	土葬	108	
手おり	6	咲さま	61	土壇	19	
出稼	48	トウゲンス	107	トッコ	179	
出来合い	96	トウザキ	172	トッチャナゲ	12	
手甲	8	冬至	150, 156, 158, 160	ドドメつき	179	
鉄道	49	冬至ゴンニャク	150	隣り組	57	
手拭	8.9	冬至トウナス	150	利根川	30	
テバタ	43	トウスミ	120	戸番	60	
出針	155	道祖神	3.4, 64, 83, 115, 127, 134	土俵	179	
手袋	10	トウナス	150, 158	トボグチ(トボロ、トボーロ)	84, 89, 111	
手振り水	155	トウナスカムリ	9	泊り初め	103	
デベソ	171	ドウの下	165	土マンジュウ	110	
寺受証文	55	トウバ(塔婆)	93, 113	トミエ	34	
寺の鐘	155	東武線	49, 51	トメ	164	
寺の年始	119, 122	東武鉄道	46, 49	友引	153	
寺への通知	109	トウミ	199, 202	土用	40, 139, 153, 161	
デロレン祭文	179	同名の時の通称	164	土用灸	139	
テン	110	トウモロコシ(トモロコシ、とうもろこし)	31, 62 154, 161	土用念仏	139	
テンガ(手鍼)	198, 201	通り庭	183, 189, 197	豊臣秀吉	4, 146	
てんかん	155	棟梁	23, 24	寅の日	153	
天気祭(り)	33, 83, 136	トウリュウオクリ(棟梁送り)	24	トリイジメ	119	
天神講	132	トウロウ	171	トリアケバアサン	87, 89 (とりあげはあさん)	90, 91
天神様	132	道陸神	83, 114	トリノ市	129	
天神様の脇差し	170	道ロク神様	127	取り結び(取結び)	99, 100	
天水	30	戸隠講	82	トリムスピノウタイ	100	
天水組合	30	トカゲ	172	取り結びのムスピ	100	
天水場	3.61	毒消し	47	トリメ	157	
伝達方法	60	独身者	104	泥棒よけ	160	
天道様	116, 138	ドクダミ	161			
天王様	70, 116, 136, 137, 139	床入れの蓋	101			
天王社	139					
天王番	156					
天王祭り	65					

田植(え)	15, 28, 29, 30, 40, 62 128, 136, 138, 153 154, 155, 163, 199	タノマレナコウド	96, 97 (頼まれ仲人)	チャノマ	186, 187, 188
田植唄.....	39	タノモノガエ	103	チャンチャン	6, 7 (ちゃんちゃん)
高尾山.....	87	足袋.....	10	中氣	150, 158
高尾山講.....	82	足袋ばそん.....	10	中刈り.....	35
高天原.....	148	食べもの格.....	12	中刈り仕立	3
高盛りの瓶.....	101	魂	114	チュウマイ	36
高ん灯籠.....	69	タマジメ	119	中宿	85, 95, 99, 100
たきごわめし.....	15	多間取型	182, 183, 188	チヨーナ	182, 185
滝之入の地名	165	タママイ	36	チヨーレン	128
滝之入の苗字	62	たま虫	11	ちょいちょい着	5, 7, 8
滝之権現	66, 69	タマヨビ	159	悪役人	128
タクワン	17	タムシ	158	長円寺	72, 82, 83, 172
タケ(たけ、竹)	35, 37, 138	たもと	10, 11	町会議員	59
竹馬	178	タライ	110, 111	長建寺	72, 175
竹の玩具	179	タラシ	18	長者柱	185
竹の皮草履	9	樽入れ	97, 103	鳥獣に関する禁忌	154
タコツキ	23	ダルマカイ	94	チヨウス	172
タゴワセ	35	儀ベシ	4	提灯	99, 114, 200, 203
山車	50	団子	16	提灯屋の小僧	171
タシカメ	101	端午の節供	134	チョウナ割り	25
豊のヘリ	162	短冊	138, 139	長命の人	164
立ち棺	108	誕生	3, 85, 86	チョウバ(帳場)	93, 111
脱穀	135	誕生祝い	92	ちょうどむすび	9
脱穀機	31, 199	誕生日	92	チョンマゲ	167
タツ膳	156, 162	誕生解	92	チリメン	7
タツの日(辰の日)	30, 153	男女の交際	85	チンゲ	92, 93
たつみぐら	19	男女の結びつき	95	鎮守様	105
豎穴住居	183	たんす	5, 11	鎮西八郎為朝	158
タテズマシ汁	12	タンスのコヤシ	7	チンバタ(貨機)	3, 43, 147
タテ場	50	たんすまぶり	5	チンバラカイタ	171
たてまえ(建前)	10, 24, 156	タンボ	33	賃挽き	3
タテメエ	23, 24	田園の名	165	ツ	
たとえ	170	チ		通過儀礼	85
タナアカリ	113	チカヅキ(近づき)	100	ツエ	109
たな板	151	地下足袋	8	月	155
田中正造	168	力石	148, 179	接木	27
櫛刈り	29	力競べ	179	つきばし	17
七夕	116, 137, 138, 139, 140, 153	チカラ米(力米)	88, 89, 159	作れない作物	154
七夕飾り	139	力だめし(力試し)	94, 163	ツゲ	105, 106, 108
七夕様	116, 138, 139	力の強い人	167	着木屋	47
タナモノガエシ	116, 143	カメリ	109	つけひも(付け紐)	8, 94
タナモン返シ	104	チクサ	8	つけもの(漬物、漬け物)	3, 15, 17, 31
田にし(田螺)	18, 161	乳不足	161	漬け物工場	32
たぬき	46	乳の出をよくする法	90	ツジュウ	41
種付	44	チゾケオヤ	90	ツヅクダング	41, 149
種もみ	28	血の池地獄	111, 114	辻ロウ	88
田の神	117	チボク	153	ツブケ	151
田の神様	83	茶	111	ツツジ	133
田の字型	20, 21	茶碗	19		
		茶碗を叩く	18		

捨て子	93	先祖様	114, 133	祖靈信仰	4
ステバ(捨て場)	107, 108	洗たく	2	祖靈の降臨	116
スネーケンセンター	1, 44, 46, 47	洗たくをしない日	11	村内婚	95
スペリだんご	14	洗濯物	11	村有財産	60
スマツカリ	131	先達	80, 123, 136, 164	タ	
スマドウフ	131	膳櫛	13	ターラッペシ	107, 158, 159
角力(相撲)	176, 177, 179	千人針	161	台	59
角力甚句	(相撲甚句)	羊羽鳥	61	大神樂	179
スマートリバナ	171	洗髪	10	大旱魃	63
スリコギ	3	センブリ	161	大工	23, 24, 155
スリ鉢	143	染料	2, 11	大慶寺	73
スリ鉢かぶり	121	千両	167	大黒	129
すりぬ	162	ソ		大黒さま(大黒様)	70, 79
座り産	88	葬衣	109	19, 20, 21, 25, 106	
セ		霜害	35, 39	大黒柱	182, 185, 186, 190
生活用具	199	霜害対策	35	192, 193, 194	
青年会	60, 61, 95	葬式	5, 9, 10, 11, 12, 37	大根	1, 3, 15, 17, 26, 27
青年集団	85, 94		87, 109, 111, 114	28, 31, 32, 146, 147	
青年団	60, 100, 121	葬式組	105	大根漬	26
歳暮	103, 104, 150	葬式の箸	111	大根のトシリ	
青面金剛	64, 77	葬式の晩	111	(大根のとしたり、	40, 146, 147
セエタ	50	ぞうすい(雑炊)	12, 14, 17	大根の年取り	
セガイ	182, 188	葬制	88	大根まき	16
石尊様	69, 137	葬送	107	代参	134
石トン様	66	葬送に関する禁忌	154	代参講	82
赤飯	2, 12, 16, 128, 151, 154	ソウトメ	29	大師ガユ	150
セチ	62, 115, 119	雜煮	117, 118, 121	太子講	82
節会	115	ぞうに縁起	121	胎児の性別	3
セチぎもん	7	ぞうり(草履)	10, 11	胎児の予見	86
セチ餅	118	草履下駄	9	大蛇	167
節供	13, 16, 104, 134, 135	ソウリヨウ様(そ うりようさま、そ うりよう様)	140, 141, 142	大食	19
節供返し	63	葬列	109, 110	大神宮	124
節供カラ	135	底抜けびしゃく (底抜け柄杓)	3, 85, 87	大神宮様	83, 91, 128, 147, 150
節供ビナ	132	蔬菜	27	大尽のお茶	171
セッチンマイリ	91	袖の変化	10	太神柱	21
節分	39, 130, 131, 160	外馬屋	19	大恩みそ	17
節分の豆	130	外便所	19	大豆	27, 28
瀬戸家	120, 122, 127, 129	供え飾	120	大豆のから	118
瀬戸氏	62	供え物	149		
セメント	46	ソバ(そば、蕎麦)	2, 12, 14, 16 17, 31, 152 153, 199	21, 182, 183, 184, 185	
背守り	11	ゾバ(縁起)	121, 152, 154	ダイドコロ	186, 187, 189, 193 194, 195, 196, 197
世良田のギオン (世良田の祇園)	41, 60, 82	ゾバカキ	12		
浅間講	157	染物屋	7		
浅間神社	68	反町の薬師様	131, 153		
線香	158	反町薬師	82, 92, 94, 122		
染色	10				
千手觀音像	74				
先祖	127				

死の予兆	86	十六マユ玉	125	職人	44
芝居	60	熟蚕	199	食用野菜	18
地買線	109	宿用水	207	女郎買い	95
しひ布田	8	修驗	64	シラキ	151
ジボシ	29	主食	13	シラジ	129, 141
しめかざり	118	ジュズかけ子	89	シラヤ	127
下大黒	21	出棺	109, 110	ジランボウ	83
霜除け	134	出家	98	尻無し川	22
師走八日	150	出血	161	シロイモ	15
しまい正月	129	十作地藏	73, 93	次郎の朝(次郎の一日)	39, 130
シマダ(島田)	10, 35, 199	出産	86	次郎の解	130
島台	100	出産後の禁忌	88	代かき(代播き)	28, 198
ジマツリ(地まつり)	19, 23	ジュバン(襦袢)	7, 8	地割(り)	55, 205, 206
清水イッケ(清水一家)	62, 120	ショウガ(しょうが)	103, 104 116, 143	新海靈神	81
清水家	127	ショウガの節供	143	シンキャク	98, 99
シメ施り	120, 150	消渴	19	甚句	173
シメ繩	62, 117, 119, 120	正月	7, 13, 15, 16, 115, 123 127, 151, 155, 157	新婚旅行	104
下肥	32, 198	正月送り	115, 128	震災	46
しもつかれい	15	正月飾り	62, 119, 120, 151	シンショウマワシ	62
霜ふたもち	39	正月様	119, 121, 126	身上渡し	62, 102
霜よけ	83	正月棚	4, 119, 120, 122, 129, 151	新星神社	68
霜よけの札	39	正月に村へくるもの	179	心臓の薬	161
ジャガイモ(じゃがいも)	12, 15 27, 60	正月の歌	121	腎臓病	161
シャツ	8	正月の食事	121	新築祝い	200
社日	39, 40, 133	焼香	109	新宅	62
社日講	133	条桑育	199	新田	1, 3
社日様	40, 133	上糸	37, 130, 199	新田村	54, 55
社日の金物	171	焼酎	31	シンドリ	28
シャモジ	3	定使い	59	新年会	122
しゃれ	171	ショウテン様	69, 155	神明宮	68
ジャンボン	3, 160	上棟祭	24	新嫁	116
ジャンボンゾウリ	3, 86, 109	商人のエビス様	129	新暦	117
ジャンボン田	165	ショウビジン	120	ス	
ジャンボンまわり	156	ショウブ	134, 135	スイカ(す) いか(西瓜)	1, 3, 26, 27, 28 31, 60, 61, 116 154, 157, 161
十王のつらよごし	142	ショウブ酒	135	スイカ烟(西瓜烟)	128, 139
収穫用具	198	ショウブの昔話	135	水田	1, 3, 26, 27, 28, 29, 30, 198
祝儀	16, 20, 59, 200	ショウブ湯	134, 135	スイトン(すいとん)	14
十五日ガユ	128	○升マキ	33	水利	30
十五日正月	128	しょうゆ(しょう油)	17, 18	水路	206, 207
十五夜	16, 143, 144, 145	しょうゆしばり	18	スケッタ	29, 38
十三仏	106, 107, 110, 111	ショウリョウ様	140, 141	助人仕事	60
十三仏のだんご	106	しょうろう様	141	スキ	144
十三夜	143, 144, 145, 156	暑氣	161	すす竹	150
シェウト(姑)	12, 16, 99, 101 122, 142	食あたり	161	すすはき	150
男	12	食作法	18	すすはらい	150, 152
十二天	38	食事に関する禁忌	154	雀	155
十念寺	172	食事の禁忌	18		
十輪寺	72	食制	11		
十六玉	38, 124, 125, 126				

小間物売り	47	酒の強い人	168	産婦の休み	89
小麦	27, 28, 31, 42, 139, 144 154, 156, 157, 199	座産	88	産部屋	87, 88
小麦わら	25, 99	差鶴居	186, 188	三宝荒神	124
米	2, 13, 14, 17, 19, 27, 199	ザシキ	20, 21, 182, 185, 186 187, 188, 189, 195, 196	三本辻	93, 107, 137, 152, 153, 158
米ぞっき	13	座敷ぼうき	87	サンマ	11, 15, 129
米俵	163	サシ番	132, 151	サンマ	11
米の品種	28	サス	131	産見舞	89, 92
五目餅	128	雑草	32	三夜様	76
子守(り)	37, 93	サツマイモ	11, 12, 15, 17 (さつまいも)	三隣亡	24, 153, 160
こやし	33, 198	サトガエリ(里)	7, 37, 40	シ	
惟喬親王	73, 166	がえり(里帰り)	101, 102 103, 116, 143	薄	110
コワカイシ	172	里神楽	175	椎名家	112
こわめし	12	サナ	31, 199, 202	塙釜様	87, 159
コワリ飯(小割り飯)	11, 16	サナブリ	39	塙原様	85
婚姻	85	サマ	184, 185, 191, 192, 194	塙びき(塙引き)	11, 15
婚姻團	96	サラシ	8	ジガイ銭	108
婚約	97	皿だんご	106	地神様	41, 133
金色夜叉	175	百日紅	154	ジガラ	19
コンニャク	17, 150	猿田彦	64, 76, 160	時間給木	30
こんにゃく売り	51	猿田彦大神	61	サマ	162
金毘羅講	82	猿の話	157	サラシ	37
金毘羅様	119	猿まわし	179	式台	188, 189, 193
サ		三月節供(三月の節供)	132, 151	自給肥料	32
再婚	104	三か日(三元日)	118, 121 154, 155	ジギョウ	23
祭壇	108, 113	産後	85	地獄	19, 143
祭典	60	さんごくめし	13	地獄の蓋	143
斎藤イッケ(斎藤一家)	62, 155	山庵子	11	仕事着	8
サイノカワラ	111	三三九度	95, 100	仕事はじめ	121
裁縫	4, 7, 10, 102	三尺	8	シジ	35, 37
裁縫箱	10	蚕種	34	地芝居	173, 175, 177, 178
サイモン	51	三十三年忌	114	ジシバリ	17
境木	32	山椒	154	シジマ	7
逆き膳	156	三升ロッコ	106	じじま	8
サカサ塔婆	114	産泰さま(産泰様)	3, 85 159, 166	四十九日	113
魚	11, 15	産泰神社	87	四十九の餅	113
魚釣り	157	産泰道	85, 87	地震	75, 76, 155
魚屋	47	サン俵	117	地藏様	73, 129
坐檜	108	サンダラベシ	107	地藏念佛	73
さきばし	17	山庵イッケ	62	シタノビ	8
サク入し(作入れ)	38, 122, 123	サントウアチャ	16	下見せ	112
作エビス	129	三年みそ	17	七五三	94, 147
作男	37	産婆	88	七夜着	5
サク立て(さくたて)	33, 123	サン俵	117	七夜ぎもん	89
さくたてなわ	39, 129	サンダラベシ	107	地鎮祭	24
サクバ	33	山庵イッケ	62	しつけ	11, 162
桜	49, 156	サントウアチャ	16	ジコ	172
桜の花見	49, 52, 119, 134	三年みそ	17	渥田	28
桜の芽	157	産婆	88	シニカラス	105
ザグリ(座縁り)	3, 43, 199, 203	産婦の食事	89	死人	20
				毒の薬	161, 162

草角力	173	ケサガケッ子	89	蚕影様	39
クサッケズリ	171, 198	ケシ	62	蚕影山	37
草取り	29	削りバナ	125	蚕影山大権現	70
草餅	16	下駄	9, 11	蚕影大神	70
草分け	26	ケゲン	8	こかげまつり	39
櫛	155	下駄の幕緒	156	コガネガヤ	143
グシ	23, 24, 197	結婚	85, 96, 97, 147	五月節供	133
グシ餅	23, 24	結婚式	5, 100, 103, 148, 153, 154	木枯し紋次郎	1
くすまゆ	199	結婚式の座配	60	古稀の祝	94
くず屋根	25	結婚年令	96	穀びづ	13
薬売り	51	毛虫	161	後家竹	20
クダマキ	3	けら	162	九日夜	146
クチガタメ	85, 97, 103	下痢	161, 162	コザ	20, 21, 182, 185, 186 187, 188, 189, 195
区長	3, 59	玄関	19	後妻	62
クツツキアイ	95	検査着	7	こしあげ	10
グツツケナノカ	110	源氏の落人	61	コジハン	11
口説き節	179	剣術家	167	腰巻(き)	8, 11, 159
国定忠治	167	ケンチン汁	15	腰巻き祝	94
区賛	59	ゲンノショーコ	161	ご祝儀(御祝儀)	12, 17, 101, 103 127, 128, 169
くび	38	玄米	107	こじゅうと(小姑)	12, 102
組	57	元禄袖	6	戸主会	57, 119
組合念仏	107	コ			
組内回り	101	コーチ	33	コジュハン	11, 29
蜘蛛	156	小字	166	小正月	16, 38, 115, 123, 126, 128
苦厄	157	小泉福荷	70	小正月の飾り替え	123
くらいぬけ	19	小泉焼	21	コジョハン	11, 12, 14, 16 (こじょはん)
くらびらき(藏びらき)	38, 123	講	61, 64	ゴゼ(ごぜ)	51, 179
クルリ棒	31	交易	49	コゼサン	51
暮市	118, 120, 151	コウカンボウ	83	五節供	132
クレグシ	197	黒糞種	34	ごぜの小便	171
黒あざ(黒疵)	88, 154	耕作用具	198	子育て地蔵	161
クロクワ	198, 201	鉱山	166	子育て春籠	92
黒不淨	153	庚申	61, 64	子育ての神	92
クロンボ	42	荒神	151	ごちそう	15
クワ(猿)	198, 201	庚申講	3, 40, 75	伍長	59, 105
桑	125	庚申様	69, 75, 77, 82, 147, 160	子供の遊びの種類	178
桑売り	26	荒神様	21, 90	子供の墓	111
クワダテ(くわだて)	38, 123	庚申塔	64, 77, 79, 148	コトハ日	116, 131, 149, 150
桑苗	35	庚申の掛軸	76, 78	謎	170
クワノオシギリ	199, 202	庚申の轎輿と箱	78	コナシマキ	28
桑の種類	34	庚申待	40, 61, 76, 148	小荷駄	109
桑烟	28	コウセン	14	小荷駄馬	58
グンマアカギ	35	交通	49	小糠香煎	170
ケ				木挽き	168
桂庵	36	こうで	158, 160	古峰ヶ原	82
ケイカイ井戸	1, 22	香糞	111	ゴフコウと子兆	105
芸人	49, 51, 179	鉱毒	168	ゴボウジメ	151
競馬	179	ゴウネッサク	28	ゴマ	127, 200
ケイヤク	4, 116	弘法大師	33	駒下駄	9
ケエザル	198	コウヤゾメ	6		
		肥	153		

カナババ	89	家洞	154	絹染め	7
カナムシ	160	カロード	11	杵	100
金物屋	51	川魚	157	キノコ(きのこ、茸)	15, 18, 42
金	157	川崎大師	75, 94	キノコシバイ (キノコ芝居、きのこ芝居)	18, 60, 200
金貸し	51	カワッピタリ	126, 139, 149	きのこめし	15, 16
カネゴエ	33	かわや参り	90	木登り	162
かね玉	170	かわらけ	143	木の実	171
金のなる木	166	瓦板	179	キバチ	199, 203
金のわらじ	96	瓦屋	112	キビ	14
カビタリ餅	149	カワリモノ(かわりもの)	3, 15	貴船様	37, 96, 158
かぶりもの(かぶり物)	8, 9	棺桶	108	貴船神社	16, 69
南瓜	154	棺かつぎ	109	キミ	14
カマガミサマ	40	カンカン踊り	4, 173, 174, 175	キミだんご	14
カマギッチャ	171, 172	監獄ミノ	199	着物	5, 8, 11, 139
カマキリ	162, 164, 170 (かまきり)	ガンコ者	172	鬼門	20
カマ田	171, 172	かんざし	155	キモンギリ	19
カマド神	166	元日	117	きやはん	8
カマドの神	151	甘諂	31	キヤリ	24
釜鳴り	148	間食	12	炎	154, 155
カマノフタトリ	143	肝臓の薬	161	給仕	12
カマバシ(カマ 番、かま番)	60, 69, 148	元旦	115, 117, 118, 120, 121	キュウリ(きゅうり)	33, 116 136, 154
カミ	109	乾東大震災	44	旧暦	117
髪	138, 139	カンナ	182	経カタビラ	108
神送り	120	神無月	104, 116, 146, 148	行者	66, 75, 168
神かくし	106	早魃	29, 30, 61	行商	47, 51
髪型	10	冠福荷	82	因数	157
紙芝居	179	寒耕	126	共同井戸	1, 22, 205, 206
神立ち	146	キ		共同飼育所	34
神棚	89	祇園	16, 95, 155	共同仕事	60
雷	159	祇園祭り	137, 156	凶年	17
雷除け	160	きがえぎ	5	キヨメ	106
神の鉢	126	飢餓	17	キヨメの酒	108
神の日	11	キクガラ・ナスガラ	152	キラズ	127
神の水	3	キゴザ	10	きりこみ	14
神迎え	148	キコリ	42	ギリシラズ	200
かめのこ	7	岸又八	178	きりばし	17
賀茂様	37	鬼子母神	64, 76	桐生大次介	62
茅	25	汽車	169	桐生織物	43
カユカキ棒 (かゆかき棒)	39, 124, 128	喜寿の祝	94	桐生機	199
からざお節供	135	キジリ	21	禁忌作物	33
カラス(鳥)	105, 154, 155 156, 167	きず傷	162	金魚	116, 132
鳥鳴き	105, 156	北枕	105, 106	木ん馬	179
カラス除け	139	吉敷	157		
カラチゴの唄	179	キツネ(きつね、狐)	46, 164, 168	ク	
カラミズ	171	きつねたかり	168	クイゾメ	92
		狐に化かされた話	168	食いつぶし	26
		きつねの嫁入り	168	クイノバシ	92
		網市	3	クサ	161
		きぬかつぎ	12		

オハジキ	178	カーラチゴ (かーらちご)	171, 179	笠懸野御新田	1, 54, 55, 56
おはしん	10	賣い桑	3	請負手形之事	
オハイライ	107	カイコ(か りこ、蚕)	3, 10, 109 143, 144, 145 160, 167, 199	笠懸の野	49
お針箱	10	カイコ祝イ(かいこ祝い)	3, 37	笠懸野原	205
おび(帯)	7, 8, 9	蚕龍	35	笠懸の松(笠懸松)	63, 166
オビアキ	91	蚕びよう(蚕日備)	3, 36	飾りだんご (飾り団子)	86, 106, 107
オビタマサマ	126	蚕の害虫	35	火事	88, 154
オヒチヤギ	6, 91	蚕の宿屋	34	かしの木	20
オヒチヤマイリ	90	蚕の病氣	35	火事坊主	73, 168
オビトキ(帯とき)	94, 147	かいこまつり	39	火事見舞	63
おひな様(お雛様)	92, 132, 133	かいこや	20	迦葉山	69
オヒマチ	149	かいこ体	37	風邪	158
オビヤ	91, 92	開墾グワ	198	風邪の神	159
オビヤギモン	91	開墾地	33	風の神送り (風邪の神送り)	4, 64, 83, 117 151, 158
お百度参り	85, 104	開さん	26	風の吹く前兆	156
オビヤッコ	169	外出着	7	風除け(風邪よけ)	64, 160, 205
オヒヤマイリ	91	回転マブシ	35	カゼヨケグワ	198, 201
おひる	12	戒名	108	火葬	108, 113
オビンヅル様	157	改名	165	火葬場	112, 159
オヘヤマイリ	85, 90, 91	買物	50	華族前髪	10
おぼぎ	5	回観板	60	肩あげ(肩上げ)	10, 94
オボタテノゴハン (オボタテのゴハン)	3, 85, 89, 90	改良マブシ	35	かたかけなわ	39, 129
オボヤキ	91	カエル	40, 117, 147	形代流し	4
オボヤケ	153	カエルマタ	83	カタツッポウ	7
お松迎え	151	カカア天下 (かかあ天下)	26, 104	かたつむり	161
オマル(おまる)	143, 144	かかみ(鏡)	88, 154	カタホケイ	23
オマワシ	143, 148	かかり火	99	形身	155
オミタマサマ	4, 115, 119, 120 (オミタマ様)	かぎ竹	21	片見月	144, 145
	124, 126, 127	かぎつるし	158	片身分け	113
オミタマのご飯	127	柿の種	154	かたわもの (かたわ者)	116, 129
オミタリ様	119, 126	柿餅	115, 126	カツオブシ(かつ おぶし、鰹節)	89, 109, 159
お宮詣り	91	柿薬師	147	脚気	161
お召	7	角帯	8	カッテ	21
母屋	19	かくし銭	108	カッペ	10, 116, 136, 143
織り子	3, 43	カクマン	162, 164, 171	カツブシミソ	88
おりまげまぶし	199	カクマントロー	164, 170	カッペガシ	179
織物	26	神楽	4, 145, 173, 174, 179	カツモ	116, 140
終り薬師	147	カクラン(霍乱)	80, 158	かてめし	15
オンカデ	147	カクランマジナイ	158	カドウタイ	99
温泉神社	134, 155	カケエ(懸魚)	116, 129	門送り	24
御岳講(御岳講)	80, 123, 157	かけ膳(除精)	80, 82	門付	134
御嶽さん	81	かけや	200, 204	門火	141, 142
女イチゲン	101, 102	景能靈神社	68, 205	カド松(門松)	61, 62, 120, 124 127, 151, 155
女かぶり	9	笠	9	カナカキ	29, 198, 201
女の持ち物	24	火災	154	カナゴキ(かな ごき、金ゴキ)	29, 31 199, 202
オンベかつぎ	156	笠懸水利組合	30	カナッカキ	30
力		カサカケノ(笠懸野)	1, 54, 56 75, 166		
蚊	172				

エビス	129, 151	岡上様の井戸	22	おじや	14
エビス講(えびす)	15, 40, 116	岡上氏	76, 112	お駕遊さま(お駕遊様)	133, 134
講、恵比寿講)	129, 147	岡上次郎右衛門景能	1	オシャクッコ	100
エビス様(えび)	39, 40, 69	岡上水利組合	30	オシャリ井戸	71
すさま、恵比寿	70, 116, 119	岡上壇	54	オショウパン	98, 100, 101 (お相伴)
さま、恵比寿様)	124, 129, 146	岡上用水	1, 5, 28, 29, 30, 114, 115 132, 138, 165, 205, 206	おしょうろ様	140
恵方	120	オカバ	28	オシラキ	115, 119, 120 128, 147, 158
恵方参り	118	オカボ(おかぼ)	27, 28, 31, 60	オシラサマ(オシラ様)	69, 127
絵馬	84, 85, 87, 161	オカマ様(おかま...)	29, 39, 83, 116	お汁粉	128
エンガ	198, 201, 205	さま、お蓋様)	136, 146, 148	お供え	118, 123
縁起	117, 121	オカマのダンゴ	116, 146, 148	おたいこ	8, 9
縁切り	155	(オカマの団子)		オタキアゲ	3, 4, 115, 116 126, 145
エンキリガタナ	106	オカマノルスダンゴ	148	オタナ	117, 119
エンキリメシ	109	オカミ	114	お棚板	115, 119
縁組	147	オ神ノオ燐り	148	オタナ探し(お柵	
縁組み餅	117, 147	オ神ノオタチ	4, 146	探し、おななさが	119, 121, 123
間魔様	141	オ神ノ鉢	119, 120	し、お棚さがし)	
エンムスピ(縁結び)	96, 146	オガミマキ	28	オ柵ザラシ	121
オ		オガミムシ	171, 172	オチカヅキ	85, 98
オイナリ様	89	オガミヤ	157	お中元	138
大イチヨウ	168	オカリブシ	51	お仲間	98
大久保	27, 56, 57, 59	オカリ屋	69, 80, 82, 117 (お仮屋)	男蝶女蝶	100
大久保のススケラ ンプ(大久保のす	172, 200	148, 149	オッカサンカブリ	9	
すけランプ)		オカンガ沢	165	オッカド	38, 115, 120, 125, 128
オオシマ	34	オカンババア	172	おつき	148
大原	57, 205	おきなぐさ(翁草)	171, 179	おっきりこみ	14, 16
大坂	4	お客様	7	おつけ	15
大原寺	71, 72	おくまん様	66	お通夜	107
大原宿	1, 2	送りイチゲン (送り一見)	85, 98, 99	お手玉	178
大原の市	50	送り中間	98	お手玉うた	179
大原の桜	134	送り盆	154	おてのこば	109
大原の通り	49	おくまね霜	157	オテマル	127, 144
大原の町割	205	オクンチ	4, 16, 116, 145	お天道様	136
おおばんもち	122	オコサマ(オコさ ま、おこさま)	34, 36, 160	オトウカ	66, 159
大前田英五郎	166	オコソズキン	9	オトウカッピ	156
大間々層地	22, 56	オコモリ	116	オトカ	168, 169
大間々の糸市	43	おござり	15	おとかつき	169
大晦日	117, 120, 151, 152, 160	オサキ(おさき)	18, 162	オトカの嫁どり	169
大麦	13, 27, 28, 42, 144, 199	オサム	164	オナベ	61
おおめしぐらい	19	お産	85, 90	おなべ仕事	37
大谷石	44	お産の祝い	159	おなめ	15
大山阿夫利神社	66	お産見舞	9	鬼	116, 130
大山神社	66	御師	82, 136	オニジャクシ	200, 203
大山祇神社	68	おしい	15	オニッコ	93
おかげ	15	お七夜	85, 90, 91	鬼もたまげるような人	167
オカタンボ	27	押美(押し美)	13, 16	鬼除け	150
岡上景能	2, 22, 26, 54 56, 165, 205	オシメ	151	オネ	165
岡上景能公	75			オハグロ	10
岡上公	63				

伊勢講	82	イネコキ	199	ウチ神様	93			
伊勢崎機	199	イネワラ	199	ウツギ	32,115			
伊勢参り	80,82	イノコ餅	4,117,146	うでぬき	8			
市	50	イノコロ餅	146	うどん	2,12,14,16,17,102,142			
市神	50	祈り釘	160	うどん縁起	62,121			
イチゲン(一げん、一見)…	9,20 95,98	位碑	108,110,113,140,141,160	優曇華	156			
一見受け	98	位碑持ち	109	うどんとそば	16			
イチゲン座敷、(一見座敷)	98,100,101	位碑分け	108	うなぎ	47			
一膳飯	154	疣	158	産着	90			
一人前	38,163	いはむすび	9	ウブゲ	91			
イチノセ	35	今井イッケ	140,154	産土様	92			
市日	132	今泉イッケ	62	ウブタテ(の)瓶	88,90			
イチベイ	34,35	忌まれる年令	153	ウブヤギ	6			
一夜飾り	151	忌まれる日	153	産湯	89,164			
一夜餅	153	芋	15,145,154	卯の日卯の刻	117			
市六斎	50	いもがら(芋ガラ)	17	馬	28,43,44,46,50 128,136,140,172			
イッケ	57,62,64,121 149,151	鉢物屋	112	馬方節	175			
一升めし	19	イモバタケ	154	馬肥え取る日	128			
一升ロック	106	いれずみ	10	馬小屋	19			
一食の基準	12	色直し	100	馬捨て場	108			
井戸	1,2,5,19,21,22 23,27,157,159	イロリ(圓加裏)	154,158	馬ヅキ	93			
井戸替(え)	2,5,21,22,23	祝いごと	12	馬の親音様	128			
井戸神(様)	2,22,118,130,158	祝いごとをさけた日	104	馬のくせ	44			
井戸づな	23	イワシ	130	馬の音	156			
井戸繩	22	岩船地藏尊講	82	馬の特徴	44			
糸ひき(糸挽き)	43,199	岩見重太郎	177	牛の日	153			
糸挽き娘	43	隠居	62	ウマノマラ	171			
イトマキ	3	インキヨメン	62	馬のワラジ	127			
糸屋	43	引導	110	ウマヤ(うまや)…	19,184,185,186 187,189,194			
井戸屋	23	うまやごえ(うまやごい)…						
糸より機	199,204	ウ	44,127	うまやのこやしとり	44			
イナ	89	植木イッヂ	61,62,118,119,120 (植木一家)…	生れかわり	113,170			
いなご	18	123,140,142,155	(生れ代り)	ウミゴモ	88			
稻作	26	兎の肉	155	梅干(し)	17,139,161,162			
稻荷	131	牛	28,43	占い	157			
イナリガ沢	165	氏神	19,20,149	うるしかぶれ	162			
稻荷様	19,20,40,69,149 151,160,169	ウジガミ様(氏神様)…	23,118,131	運送屋	50			
稻荷社	128	ウシコロシ	21,33,171	運搬具	50			
稻荷まつり(稻荷…	20,40,69,131	(うしころし)	83	エ				
祭り、稻荷まつり)	148,149	丑の刻参り	139	エイ仕事(えい仕事)	38,62			
犬	87,110	牛の鳴き声	139	エエシゴト(エー…	28,29,37,62			
いぬいぐら…	19	丑湯	139	仕事、エエ仕事)				
イヌの日(戌の日)	33,87,90 153,166	ウシロハチマキ	9	疫病神	137,138			
稻あげ	148	ウス(曰)…	19,111,150 151,200,203	疫病除け	158			
稻刈り	29	ウス年	121	エゴイモ	15			
		ウタイ(謡)…	60,121	越中ふんどし	8			
		ウタイコミ…	99	エナ	89			
		謡初め	121					

索引

アーポ、ヒーポ	159	浅間山	26	アヤトリ	178
藍	2,11	朝霞	11	アラク	33
挨拶	111	朝湯	115,118	アラクグワ (アラク娘)	33,198,201
青大将	155	足入れ	85,103	荒縄	107,108
アオチ	171	足尾鉱毒	30	新仏	133
赤あざ(赤症)	154	足尾銅山	2,114	あら仮の墓	110
赤蛙	161	足尾の銅	50	新盆	114,116,141,142
銅街道(銅山街道)	2,55,183 189,197	足ナカぞうり	10	新盆櫻	141,142
赤城おろし	26,34	小豆	28	新盆提灯	141,142
赤城講	82	アズキガユ(小豆ガユ)…	39,61	新盆づきあい	142
赤城様	19,134,136,159 3,54,56,61,64	あすきかゆ(小豆粥)	126,128	新盆見舞	63,114,141,142
赤城神社	65,82,83,117 134,138,145,147	アズキボウトウ (あすきぼうと)	15,16,76	アリ(蟻)	155,172
赤城のもちくい	138	あずきめし	15	アルコール工場	31
赤城山	42,116,131,135,156	アズマ街道	87	荒れ日	116,138
アカセン	171	アゼ	33	アワ(あわ)…	2,13,14,16,26,199
赤っ子地蔵	73	アゼカキ	198,201	栗こわ飯	130
赤ッツラ飯	128	アゼモ	161	合せ帯	8
赤不淨	153	愛宕様	66	アワメシ(アワめし、栗飯)…	2,13 33
赤堀道元	166	愛宕精進	65	アワもち(アワ餅、…	13,16
赤ん坊	157	愛宕神社	66	あわもち、栗餅)	130,151
アキアゲ(秋あげ)	40,103 145,148	あだ名	165	アンゴ	39
アキノカタ(アキ)	117,118,119	アトマル	9	安産	3,76,85,88
の方、明きの方)	122,150	あと厄	153	安産祈願	87
秋葉様	66	アナップサゲ	41	杏	19
秋葉神社	67,116,145	アナッポリ	108	あんどん(行灯)	200,203
秋葉大権現	66	穴はり(穴掘り)	109,154	イ	
秋祭り	115,145	アナマワリ(あな、…	10,109,110	イカダマブシ	35
アキヤサン	66,79	まわり、六回り)		イカリ(いかり)	199,200,204
あくたれぐち	162,172	アネサンカブリ	9	息ぬき	22
(悪たれぐち)		姉さん女房	96	イキボン(生き盆)	7,103,140
あくび	154	油	18	育児	93
アグリ	91	油祝い	41,149	生品神社	132
アゲハチマキ	9	油みそ	15	いけ場を買う	108
麻	31	油もち	41	イコー坊主	168
アザ	108	アフリ様	137	居酒屋	51
麻裏草履 (アサウラぞうり)	9,10	アベカワ	76	イザリ機	43
朝えびす	129	兩具	10	石臼	199,202
麻の葉の模様	89	雨ごい(雨乞)…	3,33,60,61,64	石返し	160
朝はん	12	い、雨乞)	82,136,159	石蹴り	178
朝日やけ	156	甘酒	18	石宮	117,149
朝風呂	116	甘茶	133	石屋	45
		天の川	138,139	石山の観音(様)	50,128
		雨	139	懇籍料	104
		アメッブリ	82	出雲	40,146,147
		雨又は晴になる前兆	155	出雲国	116,117,148
		アヤス	172		

群馬県民調査報告書第十六集

藪塚本町の民俗

昭和四十九年三月十五日印刷
昭和四十九年三月三十日発行

(非売品)

編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 群馬県教育委員会事務局
前橋市大手町一丁目1ノ1

印刷所 朝日印刷工業株式会社
前橋市元絹社町六七
電話 0544-4367